
時を越えた出逢い

ライト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時を越えた出逢い

【Nコード】

N61300

【作者名】

ライト

【あらすじ】

評価・感想よろしくお願いします。——普段はだらしないが、剣道だけは負けたことがない主人公の優。一国のお姫様だが、気品はなく自由気ままなツンデレキャラの音姫、真名は紬。ある巻物の力でタイムスリップして戦国時代へと来た優はちよつと不思議な力を使える音姫と過ごして一つの真実と戦の恐怖を知る。戦国タイムスリップ恋愛感動コメディ小説！

一話 過去へ

「ひ、姫様！ 姫様はどこじゃ！」

黒い甲冑と赤い羽織を着た一人の男が廊下を荒々しく駆け回り大声で叫んでいた。

襖の戸を乱暴に何度も開け、この小さな城の住んでいる一人のお姫様を探していた。

「姫様！ 音姫様はどこに！」

男が奥の戸を力いっぱい引き開ける。

そこに一人の美しい女性がいた。

桃色の着物にキラキラ光る金箔、そして滑らかでサラサラとした長い黒髪。白い肌に赤い唇。パツチリとした瞳。それは美しく、綺麗な絶世の美女がいた。

「なんじゃ、騒々しい。わらわの前では静かにしろ」

「あ、か、かたじけない。それより、姫様、大変ですぞ！」

男は膝をつき姿勢を低くする。

「なんじゃ」

「それが、今行われている戦なのですが、形勢はこちらがやや不利。

「このままでは……」

「なんじゃ、そんなことか」

「そ、そんなこととは……」

「そんなこと、私に言われても知らん。父上に報告すれば良からう」

「し、しかし、殿は隣の町へと不在の身。今この城の主は姫様の他は……」

「……仕方ないのう」

姫はすつと立ち上がり、少し乱れた着物を整え、嘆息する。

「父の不在の時を狙うとは汚いことをするのう。ならば、こちらも考えがある」

「と、いいいますと?」

姫は着物の袖で口元を隠しニヤツと笑った。

「不知火を使い」

「い、いいのですか? 殿の許可もなく!」

「負けるよりはマシだ。さっさと終わらせてこい」

「は、はっ!」

男は姫に背を向け走り去っていく。

姫はその場に座り込むと、重いため息を吐いた。

「……つまらん」

「オラッ、優！ お前はまた遅刻か！」

教卓の前で先生にこっぴどく叱られているのはこの剣咲高校の二年生、如月優。

勉強は普通より下、顔もいまいち、よく遅刻をして取り柄はない。いわゆるダメなやつだ。

「これで何回目だ！ そんなに俺の授業はつまらんか！？」

「いや、先生だけでなく、どれもつまらないんですけど」

優は頭を撫でて笑いながら答える。

「少しは反省せんか！」

ジャージ姿の教師が持っていた竹刀を優に振り落とす。それを優は苦も無く白刃取りの容量で器用に止めた。

「先生じゃ、俺には敵いませんよ」

優はヘラヘラ笑いながら愉快に自分の席に着いた。他の生徒たち

も笑いながら優に拍手を送る。それに答え優は手を振る。

優には誰にも負けないものがあつた。

それは、昔からある日本伝統の武道の一つ、剣道だ。

授業が終わると、優はすぐに体育館の横にある武道館へと向かった。

これから大好きな部活が始まる。幼いころから始めている剣道ができるからこそ、嫌でも学校に来るものだ。

「お疲れ様です！ さあ！ さつそく練習しましょう！」

優は元気よく武道館に入り、景気よく挨拶する。礼の心だけは忘れたことはない。

優が鼻歌を歌いながら道着に着替えようとする。

そのとき、キャプテンが優に近寄ってきた。

「悪いな、優。今日の練習は休みだ。先生が急用でいないんだよ」

「え？ マジですか？」

「ああ、だからもう帰っていいよ」

「はあ」

優はガツクリと落ち込む。

「仕方ない。なら、うちの道場ですか」

優は帰る支度をすると思つ先に家へと帰った。

優の家は町一番と言つていいほど広く、古風な瓦屋根の今ではあまり見ない木造建築。

敷地内には母屋だけでなく、隣に道場まであるのだ。ここで週三回剣道の稽古をしているのだ。

小学生ばかりが対象で、優の父が師範をしている。

優は自分の部屋で道着と防具を着ると、残りの道具を持って道場に向かった。

「親父！ 俺も練習混ぜてくれ！」

「おつ、優帰ったか。準備できたら自稽古に入ってくれ」

「オッケー！」

優は小手と面を置き、竹刀を持って素振りを始める。

軽くウォーミングアップをし、軽く基本打ちを終えると自稽古に入った。自稽古は軽い試合形式の練習だ。

「ほらほら、もっと声を出せ！ 足を止めるな！」

師範の声が道場に響き渡る。他にも竹刀の重なる音や面に当たる

音、そしてみんなの気迫が籠った声に活気が湧き上がる。

この如月道場は全国でも有名なところで、数々の大会で優勝、全国制覇も何度もある名門だ。

中でも優は天才と言われ、出た大会全て優勝し、全国一位の称号を持っている。高校二年生ですでに三段。大学生相手や警察官相手にしても引けを取らないのだ。

「おしっ！ 優、来い！」

師範が優を呼び自稽古に誘う。

「おっしや！ 今日こそ勝ってやるぜ！」

優は今まで負けたことがない。それは試合でだが、唯一勝てないのが、この自分の父であり、師範である剣^{けん}だ。

そして三時間に渡る激しい練習は終わり、皆帰っていく。

優は父の前で正座をしていた。

「ふふ。今日も勝てなかったな」

剣は満足そうににやけ、無精髭をいじる。

「けっ。今度は勝つさ。まだ俺は強くなるんだからな」

剣は剣道八段を持つ達人。剣道連盟でも知らない人はいないくらいだ。

元は警察官で、なかなか偉い地位まで登ったのだが、剣道を教えた
いという昔からの願いを叶えるため、退職して道場を開いている。

現役時代は、剣道の世界大会に出場し、個人戦で優勝したこともあるのだ。

「ま、いつになることかな。どちらにせよ、約束は守ってもらおうぞ」

「うっ。……仕方ないな」

負けたら倉の整理をする約束をしているのだ。優は引き分け以上
でお小遣いプラス千円という条件だ。

「おら、飯ができるまでさっさと終わらせな」

剣は大らかに高笑いする。優はぶすつと唇を尖らせた。

「けっ！ その前に道場の掃除だろ」

優は立ち上がる。すると、門下生たちが優の下に集まってきた。

「優兄ちゃん！ ちょっと俺の素振り見てくれよ」

「あ、僕も！」

「私のも見てよ」

「ああ、いいぜ」

優は優しく指導をする。優はみんなのヒーローなのだ。いつもこうやって最後は教えている。

優は道場の掃除と着替えを終え、次は倉の整理へと移る。

倉は道場の横にあり、使われなくなったものを置くのだ。

「相変わらず汚ねーな。制服が汚れるぜ」

優はささくれたり折れたりした竹刀を片付ける。そのとき、あるものを見つけた。

「なんだこれ？」

奥の棚の上に置いてあった一つの巻物。埃被っており、随分古くボロボロだ。

「すげえ年季入ってんな。何が書いてあるんだ？」

優は破けないようにそつと開いた。

「ええと、永禄二年、音姫が……ふち……び？何て読むんだ？」

そのとき、巻物が急に光だした。

「え？ な、なに？」

目の前が真っ白になり、そのまま優は姿を消してしまった……。

音姫はそつと廊下に顔を出すと、誰かいないかキヨロキヨロと辺りを見渡す。

誰もいないことを確認すると、ニヤニヤしながらそおくと足音を立てないように部屋から出て行く。

そのときだ。

「あ、姫様？」

後ろからいきなり声をかけられ、音姫はびくつと体を震わせ、恐る恐る振り返った。

そこにいたのは家臣であり、音姫の側近でもある佐祐^{さすけ}だった。

若く、剣術や馬術に優れ、将来有望な人材だ。音姫の幼馴染でもあるのだ。なかなかの美男子で、女性からの人気もある。

「姫様、どこかお出かけになられるのですか？」

「い、いや、ちょっとな」

「ダメですよ、姫様。部屋を出る時は誰かと一緒になければ」

「ま、まあ、みんなも忙しいだろうと思ってな。遠慮してやったのだ。わらわはもう17だ。一人で大丈夫だぞ」

「何をおっしゃいますか。何かあつてからでは遅いのですよ。今誰がお傍につかれますので、少々お待ちを」

その瞬間音姫は風のように颯爽と走り出した。

「あつ、ひ、姫様！」

「ふん。馬鹿ものが。わらわは一人がいいのだ。こんなところにずつといたのでは息がつまるからの」

音姫は城から出ると馬にまたがり、城下町へと向かった。

城下町の中を通り、市場の中を進む。

いろんな人が姫様を見て驚いた表情をしているが、中には笑って見過ごす人もいた。子どもたちは愉快に手を振っていた。それに答え音姫も振り返す。

そのまま城下町を通り過ぎると、小さな森の中へと消えて行つた。

そのあと少しして、佐祐が馬に乗って遅れて来た。

「あ、その商人。姫様を見かけなかったか？」

「ああ、佐祐様。多分いつものところですよ」

そこで佐祐は深く嘆息した。

「またあそこか。仕方ない。帰ってくるまで待つか」

音姫は馬を止めると、そっと地面に降りた。

目の前には綺麗な泉が広がり、太陽の光や周りの木々で美しく反射していた。

音姫はしゃがみ込むと、そっと手のひらに乗せ、そして口元へと運ぶ。

音姫はそっと口元を緩ませ、そしてそっと着物を剥いだ。

足元からそっと忍ばせ、ゆっくりと奥へと伸ばしていく。

太陽光で煌めく真っ白な肌、黒く艶のある長い髪、豊満な胸、そのまま泉の中へと浸していく。

優雅に泳ぎ、水を浴び、体を清めていく。

こうしている時が、唯一心が清らかになる時で、溜めていたストレスが一気に発散していくのだ。

音姫は仰向けになると、体を泉に浮かせながら空を見上げた。

「……わらは、いつまでこうしていられるのだろうか」

音姫はそっと目を閉じた。そのときだ。

「……うあああああああ——！」

太陽から一つの影。だんだんと大きくなっていき、泉へと向かってくる。

音姫は声に気付き、その方に目を向ける。

「……え？」

そして……、

ドッポ——ン！

大きな水しぶきが立ち、雫がキラキラと輝いていた。

音姫は何とか泉から出、仰向けに倒れた。

「な、なんだったんじゃ、今は……」

そこで自分の体が重いことに気付いた。それに何か掴まれているような感覚。

音姫はそつと目を開ける。目の前には一人の見慣れない服と髪、そして掴まれている場所は……胸。

優は固く閉じていた目をそつと開けた。そして目の前の状況を把握しようとする。

「あつ」

自分はずぶ濡れ、目の前には綺麗な女の人、なぜか裸、そして自分が掴んでいる場所は……豊満で柔らかく弾力がある触り心地のい

い……胸。

二人はじつと、そして呆然と見つめ合っていた。

優は愛想よくしようと笑みを浮かべようとする。というより苦笑い。

音姫は顔をだんだんと赤くしていく。

「無礼者おおおお——」！

これが二人の出逢いだった——。

二話 処分と姫

音姫は木の後ろで着物に着替えていた。

額には怒りマークがいくつもついている。

優は泉に映る自分の顔を覗き込んでいた。

左頬には赤い手形がくつきりと残っていた。

「痛い……」

それにしても、ここはどこだろうか。見慣れない場所だし、こんなところ初めて来たな。

すると、そつと首筋に小太刀が伸びていた。

優は苦笑いを浮かべながらゆっくりと振り返った。

後ろには悪魔のような目で睨み、恐ろしい笑い声を上げている音姫がいた。

「フフフ、ちょっと一緒に来てもらおうか。……虫けら」

虫けらってなんだよ……。

優は大広間の真ん中で手を後ろに紐で頑丈に縛られながら座って

いた。

横には物騒な輩が大勢おり、目の前には殿様と思われる人とその側近に、ここに連れて来させた姫とかいう女。

「打ち首じゃ！」

横の一番前に座っていたちよび髭の生えた武士らしい男が声を上げた。

いきなり大声を上げてうるさい人だな。

「姫様の素肌を見られ、この上ない恥をかかせた！ 殺すしかあるまい！」

俺はそんなことは聞かずに辺りをきよろきよろしていた。

なんだこの撮影。カメラはどこだ？ 何て言う映画？ それともドラマ？ けっこう本格的だな。っていうか俺こんなところで何してんだ？

「その小童！ 名は何と申す！？」

ちよび髭武士が大声で問いかける。

「え？ あ、俺？ 俺は如月優だけど」

「なんじゃ、そのふさけた名は！ 拙者を愚弄する気か！ 馬鹿な名を言わず、自分の真名くらい申せ！」

「なっ！ 馬鹿な名つてなんだよ！ いくら撮影邪魔したからって、それはないだろ！ そっちこそ、変な格好して、全然かつこよくねーし！」

「な、なんだと！」

「……そこらへんでやめい」

全員が上座へと目を向ける。

一番偉いであろう城の主、殿が優を見ながら口を開いた。

ちよび髭武士はおずおずと元いた場所に座りなおす。

へっ、ざまあみる。二度と出てくな。

「そなた、名はなんと申す？」

殿はちよび髭と違い、穏やかで優しい口調で問いかけて来た。

「だから、如月優だつて」

「ではそうしよう。優。そなたの犯した罪は重いぞ。わかっておるのか？」

「ああ、まあ、裸を見たのは謝るよ。悪かった。でも、ここまでしなくていいだろ？」

「良いか、音姫はこの城の姫じゃぞ。そこらの平民や商人とは違い、身分が高いのじゃ。どんな理由があるにせよ、素肌を見た以上、た

だでは済ません」

「……じゃあ、どうすればいいんだよ」

「つか、いつまで撮影続ける気だ？ 俺部外者だし。監督はどこだ？ いつまでも付き合っていていいのか？」

そこで殿は音姫を見る。音姫は未だにぶすつとした表情で固く口を閉じていた。

「この件、全て音姫に任せようと思う」

そこで一斉にざわめきが起きる。それを殿が制した。

「音姫はもう10と7。すでに子供ではない。これくらい、できて当然」

その言葉に誰も否定せず、納得の表情を浮かべる。

殿は皆の意を掴むと、音姫に向き直った。

「音姫、この一件、全てお前に任せる。煮るなり焼くなり好きにせえ。しかし、自分がしたことに責任をもつのじゃぞ。よいな」

音姫は閉じていた目を開け、そしてすっと立ち上がった。

怒っているようだが、けだるそうでもある表情をしている。

「良かるう。こやつの処分、私が下す」

音姫は悪役のように、にやつと笑う。

「もちろん、打ち首ですな！」

さっきのちよび髭が乗り出す。

こいつ、マジうぜえ。出て来んなっていったろ。

他の武士たちも同意して騒がしくなる。

音姫は軽く鼻で笑って口を開いた。

「まあ待て。確かに打ち首にすれば、この一件すぐに収まる。しかし、これは全てわらわの判断で、ことによっては大きな責任を伴う。すぐに処分はできん」

「と、申しますと？」

ちよび髭が問いかける。音姫は優に目を向けた。

「少々時間を頂こうか。処分は日が一つ昇るまで。刻は今じゃ。そのとき処分を下す。それまでこやつは牢にでも放り込んでおけ」

「はっ」

側近の佐祐が声を上げる。

「よいな、父上」

殿は満足にうなずく。

「良かるう」

殿は立ち上がり、皆に申す。

「処分は明日のこの刻。以上じゃ！」

その間、優はずっとカメラを探していた。

見当たらないなあ。

「うおっ！」

優は佐祐に強引に連れて来られ、地下の牢の中に放り込まれた。

「罪人、そこでじっとしとれ。明日また来る」

「ちょ、待てよ！　なんで俺がこんなところに入れられるんだよ。
おーい！」

しかし、優の言葉など届かず、佐祐は行ってしまった。

「くそ、なんだよ。撮影邪魔したただけで捕まるのかよ。日本の法律
ってこんなに厳しかったっけ？」

優は仕方なく座ってじっとすることにした。

「ぶへっくしゅ！」

地下にくしゃみが木霊する。制服はまだ濡れており、このままでは風邪引きそうだった。

暖を取るにも牢の外にある木の棒に点けられた火だけ。

「くそっ！ あの誰か知らねー女！ ぜってーぶっ飛ばしてやる！ 見た目は……まあちよつと可愛かったけど、絶対腹黒いぜ」

優はその場に横になると、いつのまにか眠っていた。

夜が訪れた頃、優のいる牢の前に人影があつた。こっそりと優を覗き見る。

「……おい。……おい。おい、その無礼者。さっさと起きぬか」

しかし、優はぐっすり眠っており、なかなか起きようとはしない。

「ぐっ！ わらわを無視しておって……。起きぬか！ この虫けら！」

牢の中に響く怒声で優は心臓を抑えながらガバツと起き上がった。

「え？ え？ な、なに？」

牢の外に人がいるのはわかるが、暗くて良く見えない。

すると、突然火が付き、ようやく顔が見えた。

そこにいたのは音姫だった。

「あつ、てんめえ、よくもこんなところに閉じ込めてくれたな！
あとで痛い目にあわせてやる！」

「ふんつ。わらわがそなたごときにやられわせぬ。それより、ちょ
つと聞きたいことがあるのじゃ」

「な、なんだよ」

「そなた、なぜ空から落ちて来た？」

「はあ？ 知らねーよ。気づいたら落ちてたんだ」

音姫は納得できないようだが「ふうん」と呟く。

「ほう。まあ良からう。それと、なぜそんなりをしておる？」

「なり？ ああ、格好ね。これがわかんねーのか？ 制服だよ」

「制服？ そんなものがこの国にあるのか？」

「……あんだ、ふざけてんの？」

そこで音姫の頬が可愛らしくぷくつと膨れた。

「なんじゃその口答えは！ わらわは姫だぞ！ どこそと知らない
馬の骨ごときが無礼じゃ！」

「へん。知るかよ。姫だか何だか知らねーが、そうやって自分偉い

ですよっていばつてると友達無くすぜ」

「なんじゃと！ そなたこそ、そんな文句ばかりじゃと側に誰もおらんようになるぞ！」

「へん。生憎俺はクラスじゃ人気者でな。仲間ならたくさんいるぜ。お前はどうかんだ？ 同い年の友達がいるのか？」

「それくらいおるわ！ わらわには佐祐がおる！」

「佐祐ね。他には？」

「ほ、他？」

そこで音姫の威勢が弱まりたじろぐ。

「ああ、佐祐っていう人以外にいないのか？」

「うつ……」

音姫は分が悪そうに視線を下げキョロキョロしている。

優はチャンスだと思い、おもいつきりにやけながら攻撃をしかける。

「なんだ、いないのか？ ほら、答えてみるよ。そんな偉そうにするから友達少ないんだな。へっへっへっ」

そこで音姫はぐつと拳を握ってうつむいてしまう。

「ん？ なんだ？ もう言い返す言葉もないのか？」

優は勝ったと思いにやにやと口元を緩める。

俺様を嘗めるな。

すると、地面にぽたつと何かが落ちた。

「え？」

優は音姫の顔を覗き込む。

音姫は唇を噛みながら涙を流していた。ポロポロと落ち、黒い点がいくつもできていく。

さすがに優は焦り始めた。誰であろうと女の子を泣かしたのはまずい。

「あ、あの、その……。すまない。いや、そこまで責めてないぞ。気にすんなよ。友達なんてすぐにできるぜ」

「……死んだのじゃ」

「え？」

音姫は涙を拭くと、ぼそつと呟いた。

「みんな……死んだのじゃ。わらわの友は、皆戦で死んだのじゃ。誰も死んでほしくない。無事に帰ってきてほしい。しかし、皆……大好きなわらわの友は、この国のため、この城のため、そして……わらわのために……死んだのじゃ」

呆然と聞いていた優はごくつと唾を飲み込む。

「あ、その、……ごめん。俺、何も知らなくて……。本当に、ごめん」

すると、音姫は牢を掴み、優を睨みつける。

「よいか！ これ以上わらわの友を汚すな！ わらわの友は最後まで立派だった。勇ましく戦った。そのものを愚弄するものは、例え誰であろうと許さん！ そなたは打ち首じゃ！」

そういつて音姫は優に背を向け出て行くこととする。

優はすぐに呼びとめた。

「待ってくれ！」

その声に音姫は立ち止る。

「なんじゃ？」

優はもう一度丁寧に頭を下げた。

「ごめん！ あと、今日のこともごめんな！」

その言葉を聞き、音姫は出て行った。

そして朝日が昇り、優は佐祐に捕まり大広間に連れて来られる。

目の前には前回同様、殿と側近の佐祐、そして音姫がいた。二人はじっと見つめ合う。

皆が揃うと、殿は扇子をしまい、口を開いた。

「それでは、優と申すものの、処分を下す。優殿」

「……はい」

「何か、言いたいことはあるかな」

優はチラッと音姫を見て、そつと答えた。

「まずは、その姫様にちゃんと謝らせてください」

「それは、自分の罪を認めるということか？」

「それもあります。ただ、それだけでなく、彼女の……友達に」

その言葉に音姫は優を見る。優は頭を下げた。

「どんな理由であろうと、馬鹿にしたことを謝る。……すまなかった」

「それだけか？」

「あと……」

優は顔を上げると音姫を見つめる。そしてニカツと笑った。

「友達がいらないなら、俺がなってやってもいいぜ」

「なっ」

音姫の頬が少し赤くなった。

その言葉に周りの者が口々に言葉をつぶやき騒がしくなる。

それを殿が制した。

「うむ。そろそろ良かろう。音姫」

音姫ははつと我に返ると、立ち上がり、じっと優を見つめる。優はずっと笑っていた。

音姫は小さくクスツと笑った。

「これより処分を下す」

その言葉に全員が注目する。誰もが答えを待ち、耳を傾ける。

優は未だに笑みを浮かべながら目を閉じた。

音姫はそつと口を開く。

「……打ち首じゃ」

三話 主と下僕

「……打ち首じゃ」

音姫が堂々と宣言した。

その処分に皆が頷き賛同する。

優はほんとうに死ぬのかわからず、半信半疑だった。

すると、音姫が口元を緩ませ言葉を続ける。

「を止めて、わらわの下僕となってもらう」

「え？」

その意見にまた騒々しくなる。

「これにてこの件、落着とする」

しかし、皆納得がいかないのか、なかなか立ち去ろうとしない。中には不服で文句をいう者も。

音姫はそれらを見無視し、着物を翻しながら優に近づき、そっと笑みを浮かべた。

優は戸惑いながら音姫を見る。

「さ、わらわの部屋に来い。……下僕」

音姫は最後の「下僕」を強調しながら言い、さっさと去っていく。

優は今の状況が理解できず、首をかしげていた。

呼ばれた部屋へと向かい、優は立ち止った。

「ここでいいんだよ。おい、いるか？」

「入れ」

なんで命令形なんだよ。

優は引き戸を開け中に足を踏み入れる。中には音姫しかいなかった。

「来たな。まあ、座れ。……下僕」

下僕ってうるさいな。

優は黙って目の前に座る。音姫はずっとにやつきながら優を見ていた。

「どうじゃ、自分の命が助かった気分は」

「ま、まあ、まだうまく整理できないけど、礼は言っとくよ。ありがとう」

「ふふ。よいよい。これでそなたはわらわの下僕になったのだから」

音姫は機嫌よくさつきからクスクス笑っている。

「あ、あのさあ。ちょっと聞いていい？」

「なんじゃ、下僕」

ほんと下僕下僕うるさい人だな。

「俺、まだよく理解できないんだけど、これって何の撮影？」

その質問に音姫はキョトンとなる。

「ん？ 撮影とはなんじゃ？」

「だから、映画かドラマの撮影してんだろ？ 俺部外者なのに、勝手に入っていいのか？」

「……下僕、さつきから何を言っているのだ？」

素で音姫はとぼけているようだが、馬鹿にもしている。

優は努力して笑みを浮かべているが、内心怒りで満ちており額には怒りマークがいくつもついていた。

「……からかつてるのか？ 小娘」

そこで音姫は小太刀を抜き優の顔に向ける。優は必死になりなが

ら何度も謝る。

自分は馬鹿にするくせに、逆に馬鹿にされると嫌みたいだな。

「じゃ、じゃあ、ここがどこか教えてくれよ」

「うむ。ここは日向というところで、南部にある小さな国だ。この城の名は楼閣城」

「へえ」

そんなこと言われてもいまいち納得できないな。

「じゃあ、近くにコンビニとかない？　なんか腹減ったんだよな」

「コンビニ？　なんじゃそれは」

「え？　コンビニ知らないの？」

「聞いたことも無いな」

「……………」

「……………」

そこでお互い無言が続く。

冷や汗をかいていた優は部屋を飛び出すと、塀をよじ登り、目の前に広がる景色を眺めた。

「な、なんだよ、これ……」

目の前には城下町、そして広大な草原や森があり、周りは山々に囲まれ、その先は何も見えない。コンビニも、ゲームセンターも、家も、学校も、ビルもない。

「まさか、俺、タイムスリップしたのか……」

すると、後ろから音姫が近づいてきた。

「なにをしておるのじゃ、下僕。そんなところに立つな。さっさと降りろ。下僕のくせに、図々しいぞ」

優は慌てた様子で塀を降りると音姫の肩を掴んだ。

「なあ、ここってどんなところなんだ？ 何でもいい。教えてくれ！」

優の威勢に驚き、目を丸くしながら答える。

「どんなところって、そうじゃな、戦があるが、ないときは皆武芸に励んだり、楽しくやっておるぞ。市場も今は盛んで貧しくはないと思うが」

戦がある……。こんなときに冗談をいうわけがない。ならば……。

優はその場に頭を抱えて座りこんだ。

俺、どうなるんだろ……。

「なんじゃ、こいつ？」

音姫は首をかしげ、優を見ていた。

「未来から来た？」

部屋に戻り、音姫が少し驚き、半分怪訝そうに問い返した。優は肩を落としながらうなずく。

「なるほどな。だから空から落ちてきたり、見慣れぬ姿もしておるし、言葉もどこかおかしいのだな」

優は重いため息を吐く。

「あゝ、どうやったら帰れるんだ」

「そんなの簡単じゃろ」

「え？」

「来たときの逆をすればよいのじゃ」

少しでも期待した自分が馬鹿だった。

「じゃあ何か。俺が落ちて来たように、飛んでいけばいいと？」

「未来から来たのなら、それくらいできるじゃろ」

優は大きくため息を吐いて頭を振る。

「無理だよ。いくら未来から来たって言っても、それはできない」

「ふん。未来人も大したことないんじゃない」

「相変わらず口が悪い姫様だな」

「ま、帰れないなら、ここでどう過ごすかを考えねばな。住む場所くらい与えてやる。飯もくれてやるわ。良かったな、下僕」

「……あのさあ、俺は下僕じゃなくて、優って名前があるんだけど」

「ふん。下僕は下僕じゃ」

優は一つ重い息を吐いた。

「……なんだよ、友達じゃないのか」

「え？」

「俺は友達になってくれたから助けくれたと思ったのに」

そこで音姫の顔が少し朱を帯びていた。

「ふ、ふん。わらわと友達になりたかったら、もっと偉くなるのだな」

そついつて音姫は顔を背けていた。

それから、優は音姫の下僕となり、正式に皆に報告された。

中には優を怪しみ、どこかの国のスパイだとか、変人だとか、下僕に反対する人もいたが、音姫が優に与える仕事を見て次第に文句は消えて行った。

優の仕事は本当に下僕そのもので、主に雑用や荷物持ち、暇つぶしの道具など、手荒いものばかりだった。

優は反抗するが、住まわせてもらい、飯まで与えられている身なので、最後は押し黙ってしまう。

そんな優を見て、音姫は満足そうに笑みを浮かべていた。

「おい、下僕。わらわは腹が減った。何か甘いものをくれ」

音姫が縁側で暇そうに座りながら命令する。

お姫様ならそれらしい振る舞いしろよな。だらしねーな。

「腹が減ったなら他のやつに頼めよ」

「なんじゃ、未来から来たくせに料理もできぬのか。大したことないの」

音姫は馬鹿にするように高笑いする。

優はぐっと拳を握って怒りを抑えた。

このままでは未来を馬鹿にされる。未来人代表として、ここはあつと驚かせなければ。

「うし。じゃあ何か上手いものを作ってやる。おら、ちょっと付き合えよ」

「おつ。なんじゃ、未来の食べ物を作るのか。それは楽しみじゃ」

二人は給仕室に来た。

そこで働く女たちは姫様を見てそそくさと頭を下げる。優にだけは頭を下げなかった。

「ちょっと調理器具を借りるぞ。この下僕が何か作るようなのでな」
皆感心し、どんなものを作るのか興味あるのか覗いてくる。

甘いものつていつでも、あるのは砂糖と黄な粉と餡子。お菓子を作るにも、材料はそこまでないな。

「仕方ない。おはぎでも作るか」

優は米を炊こうとする。

「あ、そうか。電気もガスもないのか。面倒だな」

「ん？ なんじゃ、下僕。その電気とガスとは」

「ああ。未来はな、大抵のものは電気とガスで料理ができるんだ。

だから、いちいち火を焚くこともないんだ」

「電気とは、あの空でゴロゴロ鳴る雷のことか？」

「まあ似たようなものだね。威力は全然違うけど。炊飯器があればな。ま、ないなら仕方ないな。火はライターでいいか」

優は制服のポケットに入ってたライターを取り出し紙に火をつける。そして窯の中に入れた。

「お、おい、下僕、なんじゃ、その小さなものは。ひ、火がついたぞ」

音姫が目を光らせながら問いかけてくる。

「え？ ああ、ライターはここにはないのか。中の油が静電気で火が点くんのだ。簡単に火がだせるぞ」

「す、すごいな。未来はすごいな」

音姫がライターを見上げながら子供のようにはしゃいでいた。その周りに給仕の女たちも集まっている。

ここにとってはそんなに珍しいものなんだな。

優はもち米をお団子にできるようにし、餡子と黄な粉で作った。ものの数十分で作り終えた。単にもち米に詰めたり着けたりしただけだから簡単である。

「なんじゃ、これならいつも食うとるやつと同じじゃな」

音姫は黄な粉のおはぎを食べる。そこで音姫は「ん？」と疑問の顔になった。

「中に、……餡子が入っておるな」

「ああ、入れた方がおいしいからな」

「なるほど。未来はこんな風に食べるのか。うむ。なかなかおいしいの」

「これで満足か？」

「うむ。わらわは満足したぞ」

音姫はおいしそうに、パクツと口に入れて行く。

「あ……」

「ん？ なんじゃ？」

「ああ、いや……」

優はおいしそうに食べる音姫を見て少しは満足した。

あんな可愛い顔もするんだな……。

飯の次は風呂焚きだ。ここでも火を使わなければならない。薪で

火の調整をし、上の水をほどよく暖めて行く。

音姫はこれも優にやらせた。ライターを使うところを見たいらしい。

優はお風呂の焚き方を教えてもらい、裏の薪入れにいる。

「そうか。簡単にはお湯が出ないんだな。こっちでは蛇口を捻るだけで簡単にお湯が出るのに」

「なんじゃ、そっちの世界は火を使わず熱い水が出るのか？」

「ああ、ここでガスを使うんだよ。ガスの熱で水を暖め、それを蛇口を通して出す。待っただけでお風呂なんて簡単に沸くさ」

「ほう。未来は便利なところじゃの。ならば、ここもそうできるようにしてくれ」

「それは無理だな……。道具も何もないし」

優は持っていたライターを取りだした。横で音姫は目を輝かせながら見ていた。

「……なんなら、やってみるか？」

「お、い、いいのか？」

「別に、誰でもできるさ。ほら」

優はライターを音姫に渡す。音姫は優がやったように親指を着火

口に備えた。

「ほら、この紙に点けて」

「う、うむ……」

音姫は少し緊張しているが、着火口を回し、火を点けようとする。

しかし、威力が弱いのか、少し回るくらいでなかなか着火しない。

音姫の苛立ちがだんだん募っていく。

「か、代わろうか……？」

「うるさい！」

とうとう音姫のボルテージはだんだんと最高頂に達しようとしている。

しかし、それでもなかなか火は点かなかった。

「ああ！ なんじゃこれは！ この役立たずが！」

音姫はおもいきり地面に向かってライターを投げ捨てた。

その衝撃でライターは割れ、中の油が出てしまった。

「ああ！ お、俺のライターが……」

「そんなもの、もういらん！ さっさと沸かせ！」

音姫はダンダン足を鳴らしながらその場から去っていた。

優は壊れたライターを手のひらに乗せ、泣きながら悔んでいた。

俺のライター……。

結局こっちのやり方でお風呂を沸かし、優も入り終え、あとは寝るだけとなった。

優はどこか知らない和室を借り、そこで寝ていた。

音姫は自分の寝室で寝ており、もちろん別々だ。

それにしても、何でタイムスリップなんかしたんだ？ 確か、ここ日向って言ったな。てことは、県でいうと宮崎。俺の住んでいるところも宮崎だから、どこか知らないところに飛ばず、今住んでいる過去に飛んだんだな。

「これからどうしようかな……」

それにしてもあの馬鹿姫のせいであちこち痛い。人使いの荒い人だぜ。あんなんじゃない、絶対モテないな。

「さっさと寝よ」

そのころ、音姫は布団の中でクスクスと笑っていた。

「未来から来たとな。なかなかおもしろい者が来たものじゃ。これから退屈せずにいられるかもな」

四話 道具と子供

下僕としての仕事が慣れだし、幾分余裕も出て来た。

優は自分の時代の知恵や技術を取り入れ、この時代に貢献していく。

そのおかげもあり、前まで蔑み、馬鹿にする者もいたが、今では逆に感心し、中には尊敬するものまで現れだした。

音姫も様々なこの時代には無いものを目の当たりにして目を輝かせていた。

優が持っていたのは、音姫に壊されたライターに、防水機能付携帯、アナログの腕時計に、シャーペンとメモ帳、風船ガム、竹刀の手入れで使っていたカッターである。意外にも制服のポケットにはいろいろ入っていた。

それらを見て、音姫の興奮は収まらなかった。

「おい、下僕！ これは何じゃ？ このパカパカするものは」

「ああ。それは携帯電話だよ。これで離れていても話をする事ができるんだ。他にも、ゲームや音楽を聴いたりもできる」

「なんと。こんなおもちゃみたいなもので話ができるとな。おもしろいな。よし！ さっそく使ってみよう」

「それは無理だよ。使うにはもう一台必要だ。それに、この時代に

電波はないし」

やっぱり電池は余っていても圏外とでていた。

「使えないのか？ ふん。役立たずじゃな。なら、この針らしきものが回っておるのは何じゃ？」

音姫が次に持っていたのは腕時計だった。

「それは時計っていつて、時間がわかるんだよ。ここでは刻のことだね」

「刻がわかるとな。しかし、そんなもの、太陽を見ればわかるじゃろ」

「でも、これを一目見ればすぐにわかるんだよ。それに、太陽がいつもより長かったり、夜がいつもより遅くなったりとかしない？」

「ああ、それはあるの。太陽が長いと暑かったり、夜が長いと寒かったりするの」

「それだと、今どのくらいの刻かわからなくなるだろ。これがあれば、太陽のあるなし関係なく分かるんだ」

「ふむ。しかし、別になくても不便はないかの」

「そ、そう……」

さすがにこの時代に住んでいる以上、この環境に慣れているんだな。

「それより、この小さな板状のものは何じゃ？　なんだか甘い匂いがするの」

「それはガムって言って、未来の食べ物だよ。でも、飲み込んじやダメだよ。噛み続けて味わうものなんだ。食べてみる？」

「ほうほう。それは是非食べてみたいのう」

音姫は一つを貰い口へと運ぶ。

「おうっ！　甘い。でも砂糖というわけではない。これはおいしい。何なのじゃこれは！」

たかがガムでこんなにも喜々している人を初めて見た。

「リンゴの味がするだろ。二十分くらいはその味が続くんだ」

「これはすごい。わらわはこれが気に入ったぞ」

「あと、こんなこともできるんだよ」

優はガムを一つ食べ、ある程度柔らかくすると、中に空気を入れ風船を作って見せた。

それを見て音姫の目が更に輝く。

「す、すごい！　下僕は天才か？　こんなの見たこともないぞ！」

「コツを掴んだら誰でもできるよ。やってごらん。まずガムの中心

に舌を入れて、その中に空気が入る穴を作る。唇に挟む感じにする
と入りやすいんだ。あとはそつと息を吹けば膨らむはずだ」

「よし、わらわもやってみよう」

音姫は気合いを入れてガム風船に試みる。

「……………」

何とか膨らませようと頑張っているが、やはり最初は難しい。

一生懸命空気を入れようと唇を突き伸ばしてふ〜ふ〜しているが、
一向に膨らむ気配はなかった。

音姫は「ん〜」と踏ん張り、そんな姿が少し滑稽に思える。

「空気が入ってないよ。ほら、もう一度するよ」

優は難なく風船を膨らませる。それを見て音姫は少し悔しく思い、
より気合いを入れてやる。

そして練習を初めて一時間近くかかったが、ようやく膨らみ始め
た。

「お、できたぞ」

音姫の口から風船が少しずつ膨らみ始める。

音姫は「えっへん」と誇らしげな表情になってどんどん膨らませ
て行く。

「あ、あまり膨らませ過ぎない方が……」

しかし、すでに遅かった。

大きく膨らんだ風船は、空気に耐え切れず、パンツ小さな音を立てて破裂してしまった。

破けたガムはやはり音姫の口や鼻におもいつき張り付いていた。

音姫の目がだんだんと怒りで満たされていく。

優は何も言えず、へらへらと笑みを、いや苦笑いを浮かべていた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「この無礼者が——！」

どうやら音姫にガムは不服のようだった……。

二人は階段を登り上へと目指していた。音姫が珍しく、お礼といい、自分のお気に入り場所を案内すると言いだしたのだ。

「ここじゃ。思う存分眺めるが良い、下僕」

下僕は余計だが、優は音姫がいる場所へと近寄る。

「うおつ。すげえな……」

「ふふ。ここはわらわが一番気に入っている場所だな。日に一回はここに来る」

二人はお城の一番上、天守閣へと登っていたのだ。

そこから見える景色は、見渡す限り壮大な自然に囲まれている。自分の時代では、まずお目にかかれないだろう。

「へえ〜。けっこついい所だな」

下を見ると城下に住んでいる人たちも見える。それに遠くの方も見えるので、戦の場合はここから陣形の確認や相手の動きも把握できるのだろう。

優は城下町を見て、音姫に問いかけた。

「なあ。ちょっと下に降りてみないか？」

「ん？ 下とは城下のことか？」

「みんながどんな暮らしをしているのか気になるんだ」

「ふむ。まあ良からう。しかし、わらわは一国の姫。見つかったら簡単には抜け出せぬだろう。そつとじゃぞ」

音姫が悪そうな笑みを浮かべる。優も同じように笑みを浮かべた。

「へへ。おう」

二人はこっそりと抜け出し、そして城下へと降りた。

「へえ、これが城下町ってやつか」

城下町には庶民が商いをしており、活気に満ち、誰もが笑顔で過ごしていた。

買い物をする人や商売をしている人。走り回っている子供や素振りをしている武士など。

しかし、やはり戦をしている以上、そこまで良い環境とは言えず、お城と比べれば当たり前だが、あまり裕福とは程遠い感じはした。

二人が歩いていると、皆音姫の存在に気づき、すぐに頭を下げる者、愉快そうに笑う者、手を振る子供などがいた。一方の優は制服なので怪訝な表情や、目を細める者など、興味深そうに見ていた。制服で髪型も違うから仕方ないが……。

「なんかいろんなものを売っているな。珍しいものばかりだぜ」

「そうか？ それより、私はちと寄るところがある。下僕も来るか？」

「ん？」

音姫と一緒にある場所へと来る。見渡せば何もなく、大きな広場があるだけだった。

しかし、そこには何人もの子供たちが遊んでいた。

「あ、姫様じゃ！」

「姫様！」

皆音姫のもとへと集まる。音姫は笑みを浮かべながら全員の頭を撫でている。

「みんな元気じゃったか。楽しく遊んでおるか」

「うん！」

「ね、姫様。今日は何して遊ぶの？」

「早く遊ぼう！」

「待て待て、そう慌てるでない。今日はおもしろいものを持って来たぞ」

そういつて音姫は優の方を見る。

俺はもの扱いか。

「ねえ、姫様。あの人だれ？」

「へんなもの着てるよ」

「髪も変だよ」

こっちから見ればお前らが変なんだけどな。

「ふふ。あやつはな、なんと未来から来たものじゃ」

「未来？」

「未来って？」

「ま、異国の国から来たものじゃ。今日はあやつがおもしろい遊びを教えてくれるだろう」

音姫は俺を手招きしてこっちに來させる。優は少し戸惑ったが、皆の前に立った。

「お前誰？」

「姫様の何なの？」

「まさか、姫様の婚約者？」

「なんだと！ 姫様と結ばれるのは僕だぞ！」

口ぐちに勝手なことばかりいうガキだな。

優は咳払いをして口を開いた。

「ええ」と、俺の名は優。この姫様の側近だ」

「嘘を吐くな。そなたはわらわの下僕だ」

音姫が後ろからサラツとジト目で忠告する。

「なんだ、下僕か」

「それなら心配ないね」

「下僕じゃ結ばれないもんね」

「だいたい、こんなカツコ悪いやつと姫様が結ばれるわけないし」

優は今にも怒りが爆発しそうだが、何とか堪える。

「さて、今日は俺がおもしろい遊びを教えようじゃないか」

「何するの？」

優はニツと笑みを浮かべて発表する。

「剣道だ！」

「剣道？」

「ああ、剣術のことだ」

「剣術ならいいよ。俺等にはまだ早いし」

「父上に稽古してもらってるしな」

「まだ戦にも出ないし」

「他の事したい！」

すぐに拒否られ、優は少しガツカリだった。

「そ、そっか。俺剣道しかできないしな。じゃあ、サッカーはどうだ？」

「サッカー？ 何それ」

やっぱりサッカーなんて知らないか。

俺はそこらへんにあったボールを掴む。どうやら蹴鞠のようだ。サッカーボールより固いし、少し小さいがいいだろ。

「いいか、サッカーってのはだな」

優はサッカーのルールを簡単に説明する。子供たちは興味津津で聞き入っていた。

「へえ、蹴鞠と対して変わんないけど、面白そうだね」

「やろうやろう！」

「よし、チームを作って始めるぞ！」

優は捨ててあった漁業用の網を使ってゴールを作り、気の棒でコートの線を書くと準備を終えた。

「よし、始め！」

「いくぜ！」

さすがにみんな蹴鞠をしているせいか、難なく足で蹴っていく。ドリブルはうまかった。

男女関係なしにしているが、女子も男子に負けず頑張っており、なかなか白熱した試合が繰り広げられていた。

少しして、審判をしていた優は疲れ、端で見ていた音姫の横に座った。

「サッカーとは不思議な遊びだな」

「まあな。あれが俺等の時代の遊びだ」

「そうか。……礼を言っぞ」

「え？」

「あの子らの相手をしてくれたからな。わらわもそろそろ手持無沙汰で、次は何をするか思いつかなかったのじゃ」

「そうか。ま、まだまだいろんな遊びがあるから俺に任せろ」

「ふん。さすが下僕じゃ」

「下僕はないだろ。でも、何で一国の姫が、あんな子供と遊んでるんだよ」

その質問に、音姫は少し寂しそうな視線を子供たちに送りながら話した。

「……あの子らはな、わらわの友の身内のものばかりじゃ」

「え？」

「あの子らは泣いておった。兄が死んだ。父が死んだ。いつまでも泣いて、困ったもんじゃった。だから、わらわが友の代わりに面倒を見ることにしたのじゃ。わらわのために命を張ってでもこの国を守った、あやつらのために」

優は優しく笑みを浮かべた。

「そっか」

音姫は滲み出た涙を手の甲で拭うとすっと立ち上がった。

「そろそろ帰るか。父上も心配するだろ」

「ああ」

「お前たち！ わらわは帰るぞ！」

「またね、姫様！」

「下僕も次は一緒に遊ぼうぜ！」

「また来てね！」

二人はみんなに手を振りながらお城へと帰って行った。

五話 妹と思い

今日もいつものように音姫の側にいて雑用やら我がままやらを聞いて、ヘトヘトになりながらも遂行しているとき、厄介なものがまた増えるとは思わなかった。

「そういえば、下僕はまだあやつのことを知らなかったな」

廊下を歩きながら、音姫がふと思いついたように呟く。

優はその後ろからふらふらなりながら顔をあげる。

「あやつ？ 誰のことだ？」

「ふむ。実はな」

そのとき、後ろの方で元気な声が響いてきた。

「姉上ー！」

二人は振り返る。

そこには肩まであるショートカットの髪が揺れ、ずるずると赤い着物を引きずり、音姫を小さくしたような容姿、パツチリとした瞳に小さな唇、見慣れない子供が走ってきた。

「これっ。走って大声まで上げるなど、はしたないぞ、ようひめ陽姫」

音姫が優しく叱りつける。

「へへ。すみませぬ、姉上。あ、この方が姉上の下僕ですね。何やら未来から来たとか」

「……せめて側近とかそんな感じで呼んで欲しかったな。それで、この子は誰なの？」

「うむ。紹介しよう。わらわの妹君にあたいする、陽姫じゃ。部屋が遠くてあまり会えないのだ」

「お初めに存じます。わらわの名は陽姫。どうぞよろしくつかまつります」

陽姫は幼いわりにとても丁寧に自己紹介し頭を下げる。そのせいで優もつかしこまってしまう。

「い、いえ、こちらこそ、よろしくお願いします」

「ふむ」

すると、陽姫はジロジロと優を見、観察するようにじっくりとじったりしていた。

「え、えと、何？」

「うむ。姉上、わらわはこの方を気に入ったぞ。どうかわらわの側にさせてくれ」

「え？」

「な、なんじゃと！」

三人は音姫の部屋にいた。

陽姫はなぜか優の横に座り、制服を珍しそうに引っ張っていた。

「陽姫。すまないが、下僕はわらわの下僕だ。いくら陽姫の頼みでも、許可することはできぬ」

「えゝ。どうして。少しくらい良いではないか」

「ダメじゃ。すでに正式に定められておる。諦めるのじゃな」

「ぶゝ」

陽姫の頬が可愛らしく膨れる。意外にも可愛かった。

「ん？ ……おい、下僕。貴様、何にやけておる」

「え？ 俺、にやけてた？」

「ああ。気持ち悪いほどな」

音姫はじつと蔑んだ目で睨んでいた。

優は一人っ子で、前から弟か妹が欲しいと思っていたのだ。ちょうど年も陽姫くらいが良く、イメージにもぴったりだった。

「なあ、陽姫ちゃん」

「陽姫……ちゃん？ 『ちゃん』とは何なのだ？」

「ああ、未来では小さな子には『ちゃん』を着けるんだよ」

「そうなのか。ならば、別に『ちゃん』を着けてもいいぞ」

「ありがとう。それで、陽姫ちゃん。これから俺を呼ぶ時は『お兄ちゃん』って呼んでね」

「お兄ちゃん？ 『お兄ちゃん』とは何なんだ？」

「目上の若い男の人に対しては『お兄ちゃん』って未来では言うんだよ」

「へえ、そうなのか。なら、これからお兄ちゃんっていうぞ。お兄ちゃん」

うん。本当にお兄ちゃんになった感じがだ。

「おい下僕。なんだか気持ち悪く見えるのだが、気のせいかな？」

おそらく現代でこんなところを見られていたら痛い人に見られるだろう。悪くなれば警察沙汰に……。ここが戦国時代でちゃんと良かった。

「なんだかすぐに人を呼びに行きたい感じたが、まあいいじやろ。それより、わらわはちよつと父上に用がある。下僕は陽姫の面倒を頼むぞ」

「ああ、いいぞ」

優がニコニコしながら容易に了解する。

音姫はどこか違和感があるが、部屋から出て行った。

「お兄ちゃん。陽姫と遊ぶのだ。未来の遊びを教えて欲しいぞ」

「未来の遊びね」

ここで医者さんごっこを教えたら完全に俺は危ない人になるな。ちよつと教えたいたい気もするが、ここは我慢しておこう。本当に首が飛びそうだし。誰かさんは本当にやりかねん。

「それじゃ、しりとりでもしようか」

「しりとり？ ま、まさか、……わらわの尻を取るのか！？ 未来はそんな恐ろしい遊びをするのか？」

陽姫は頬を赤くするも、恐怖でガタガタ震えてもいた。

「そんな恥ずかしいものでも恐ろしいものでもないよ。言葉の最後の語を取って、その語から始まる言葉を言い合う遊びだよ。最後に『ん』を言った人が負けだよ」

「なるほど。よし、やってみるぞ」

二人は向き合ってしりとりを始める。最初は優からだ。

「いくよ。しりとり、りんりん」

「う、ごまー!」

「ま、まくら」

「ら、……ら?」

陽姫は難しい顔して考え込む。

戦国時代だと、現代とは外来語も普及しておらず、簡単には思い出せないかもしれない。意外にも、この時代ではしりとりは難しいかもしれない。

「ら……、ら……、ら? え、えと……くし!」

今強引に他の言葉に変えた気がしたが、始めたばかりで難しいのだろう。仕方なく聞き逃すことにしよう。

「し、しお」

「お、お、おいも!」

「も、もののけ」

「け……、け……、……そ、そっきん! あっ、いや、ぞうり!」

またもや強引に変え、しかも一度「ん」が着いても気にせず言い直すとは。このままでは勝負がつかないような。

「あ、あの、陽姫ちゃん。さっき、『ん』がついたんじゃない……」

「っ、ついてないぞ!」

陽姫は腕を組みながら他所を向いて知らんぷりをする。

「ほんとに? 今側近って」

「わ、わらはぞうりっていったぞ! 『ん』はついてないぞ!」

陽姫は頑なに自分の過ちを認めようとしない。そっぽを向いて口を噤んでいる。

「ふうん。まあいいか。じゃあ、続きね」

「うむ」

「り、りく」

「く、くり!」

「り、りす」

「す、すみ!」

「み、みず」

「ず、ず……ず、ず……? ず……。……てきじん! あ、いや、……あ、あみ!」

「……………」

また勝手に語尾を変え、おまけに「ん」がついている。そして言い換えていた。

「あの、陽姫ちゃん。今言い換えて「ん」が着いたよね？」

「っ、ついてないぞ。陽姫は負けていない！」

陽姫はまたもやそっぽを向いて顔を背ける。

「陽姫ちゃん。だったら俺の顔を見て言っていないって答えてみて」

「うぐっ」

陽姫は目を潤わせ、半泣きになりながらゆっくりと振り返る。

「ほら、俺の目を見て」

二人はじっとお互いの目を見つめる。

陽姫はすぐに視線を外し、「あっ」「うっ」「あぐっ」「うぐう」と弱々しい声を上げる。

「陽姫ちゃん。確かに、てきじんって、「ん」がついたよね」

じっと陽姫の目を見る。陽姫は分が悪くなると、目を潤々させていた。

「あうう」

そんな表情につい優はにやけてしまう。

こんな表情をする陽姫はなんとも可愛いものだった。本当に妹みたいだ。

「はは。ごめんな。負けたくなかったもんな」

そういつて優は優しく頭を撫でて上げる。陽姫は力が抜けたようにふにゃつとなり、顔の筋肉全てが和らいでいた。

「ふにゃ」

ああ、もうこのまま陽姫の側近になってもいいな。

そのとき戸が開き、外から音姫が入ってきた。音姫は二人の様子を見、今の状況を把握する。

陽姫のいつもお目にかかれないはしたなき顔。その要因は……優。

すぐに激怒が漂い始めた。

「何をしておるのじゃ、……下僕」

「え？ あ、いや……」

「わらわの妹君に何をしておるのじゃ、……下僕ごときが！」

「あ、ああああ……」

そのあと、優は城中の廊下を掃除させられ、翌日は筋肉痛で歩けなくなっていた。

今日も優は陽姫の面倒を見ていた。

音姫や殿などのお偉いさんたちは会議中とのことだ。

幼い陽姫はまだ参加できないので、こうして優が側についている。

今二人は手を繋ぎながらお城の周りを散歩していた。

「お兄ちゃん。わらわは何か遊びたいぞ。外でやる未来の遊びを教えてください」

「外でねえ」

幼い子は外で何をするのだろうか。しかも女の子。

男なら虫取りやおいかけっこ、スポーツなど活発的なことができるが、女の子だともっとゆったりとした感じの遊びがいいだろうか。

お人形遊びやママゴトなどがいいと思うが、この時代にそんなものの道具はないだろう。

ならばどうしようか。

「じゃあ、陽姫ちゃんは、いつも何をしてるの？」

「わらわか？ わらわはいつも蹴鞠が勉強くらいしかせぬぞ。……
姉上のような力はないからの」

最後は少しぼそつと呟き、よくは聞き取れなかった。

「そうか。じゃあ、俺が勉強を教えようか？」

「おおっ！ まことか？ 是非頼むぞ！」

そついうことで、二人は陽姫の部屋へと訪れた。

そついえば陽姫の部屋に来たのは初めてだった。

音姫の部屋からだいぶ離れ、ここも負けないくらい広いが、中は音姫と大して変わらない感じだった。

陽姫は机と紙、筆、墨などを用意した。

習字などで使う道具が、ここでは普段の書きものになるのだ。

陽姫は墨の準備を終えると、子筆を持って優を見る。

「さ、よいぞ。わらわに教えてくれ」

「じゃあ、国語は無理だから。算数を教えよう」

「算数とは何じゃ？」

「数のお勉強のことだよ。何かを数えたりするときに便利だよ」

「うむ。是非教えてくれ」

「よし」

優は未来の数字の数え方を教える。

戦国時代では、ひ、ふ、み、などの数え方であり、今のよう
に一、二、三、というわけではない。

そのあと簡単な足し算や引き算を教えた。

少しして、陽姫が少し深刻そうに呟いた。

「のう、お兄ちゃん。お兄ちゃんは未来からきたのだな？」

「ああ、そうだよ」

すると、陽姫はうつむき、子筆を置いた。

「どうしたの？」

「わ、わらわは信じるぞ。お兄ちゃんが未来から来たと。お兄ちゃん
は、嘘など吐かないからな。でも、中には嘘だというものもある
のだ」

優は陽姫の言葉に真剣に耳を傾ける。

「べ、別に疑っているわけじゃないのだ。ただ、……確信したいの
だ。だから、この時代と未来の時代の違いを教えて欲しい」

陽姫が真剣な目つきで懇願する。本当に信じようとし、疑いたくないのだろう。

優はすぐに優しく笑みを浮かべてうなずいた。

「わかった。じゃあ、俺の時代の話をしてやるよ」

「うむ」

陽姫はうなずいて耳を傾ける。

「そうだな。俺の時代は、今よりずっと暮らしが楽だ。火だって簡単に着くし、熱いお湯もすぐに出る。ご飯もずつとおいしいし、たくさんのお菓子もある。未来は、本当に豊かな時代になった。なにより、……戦うことがない」

「戦がないのか？」

「そう。戦争は終わった。人間は戦うことは辞めた。でも、知らないところで戦争は続いているかもしれない。ただ、俺の住む国、この国は、二度と戦争を、戦うことをしないと誓った。俺は戦争を体験したことはない。でも、いろんな情報を取り入れ、戦争がどれだけ怖いかわ、どれだけ奪い取るか、どれだけ不幸にするか、よくわかったと思う」

「未来はすごい。わらわも未来に行きたいぞ！」

「そうだね。行けたらいいね。ただ、陽姫ちゃんには、一つ約束して欲しいことがある」

「ん？ 何じゃ？」

優はそつと陽姫の手を取り、優しい眼差しで見つめた。

「戦を、いつか無くしてほしい」

「戦を、なくす？」

「そう。戦わないでほしい。誰も、もちろん、陽姫ちゃんも。そして音姫も。無駄な争いで、大切な命を無くさないでほしい」

「しかし、戦を無くすにはどうしたらいいのじゃ？」

優はニコツと笑みを浮かべる。

「そのためにはたくさん勉強して、偉くならないとね」

「勉強すれば良いのじゃな。わらわは頑張るぞ！」

優は陽姫の頭を優しく撫でる。

いつか、そんな日が来ればいい。勉強だけでどうにかなる問題ではないが、いつか実現してほしい。陽姫には、今はこういうしかない。

そのことを、音姫は廊下で静かに全てを聞いていた。

六話 剣術と決意

「稽古？」

朝の食事をしながら、優は音姫に冷静に聞き返した。

「あ、ああ……。その、佐祐がな、姫の下僕になる以上、それなりの武術は持ち合わせなければならぬといって……」

どこか歯切れの悪い様子で音姫が説明する。

すると、襖が開かれ、佐祐が頭を下げながら入ってきた。

「お食事中失礼する。優殿。我が名は佐祐と申す。姫の側近として仕えている身で、若頭でござる。是非とも、優殿と手合わせ申し上げたいのであるが」

「で、でも、佐祐。別にこやつは剣術など関係なかるう。優はこの時代のものじゃない。戦にも出ることもなければ、無理に覚えさせることなど……」

音姫は優に剣術を覚えさせたくないのか、慌てた様子で止めようとする。

「いいえ、姫様。申し訳ありませんが、下僕と言いましても、何かある時は姫様を守りとおさなければなりません。何も備えていないよりも、少しでも剣術を身につけなければ」

「し、しかし、じゃな……」

音姫は少し心配気味に優を見る。

「な、なあ、下僕。無理にする必要はないぞ。剣術など、覚える必要はない。そ、それよりも、わらわと一緒に町に出かけよう。子供らにまた新しい遊びを――」

「いいよ」

「え？」

優はご飯を食べながら答える。音姫はキョトンとなる。

「剣術、やってやるよ」

「い、いや、でも――」

「そうかそうか。それはありがたい。では、後ほど道場で」

そういつて佐祐は部屋から出て行く。音姫はすぐに優に問いかけた。

「よ、よいのか、下僕？」

「ああ。ちょうど体を動かしたかったんだ。長くしないと鈍るしな」

鈍るという言葉に音姫は少し疑問になるが気にせず説得しようとする。

「だ、だがな、おぬしは別にそんなこと……」

「なんだ、心配でもしているのか？」

何気ない優の言葉に、音姫の顔がパツと赤くなり、すぐに腕を組んでそっぽを向く。

「べ、別に心配などしておらぬ。ただわらわは……」

「へへ。ま、見てろって」

優は余裕のある笑みを浮かべてご飯を食べて行く。

この魚上手いな。

食事を終えると、二人は城内にある道場へと足を向ける。

近づくに連れ、活気ある声が次第に大きくなっていく。

「いじいじゃ」

音姫が戸を開けると、そこには多くの武士が剣術に励んでいた。

「おお、やってるやってる」

優は呑気に中に入る。音姫は少しおどおどしながら着いて行く。

その姿に前にいた佐祐が気づいた。

「お、優殿。来たでござるな。では、さっそく手合わせ願おうか」

「ええ。いいですよ」

優は制服の上着を脱ぎ竹刀を借りる。準備運動をしているとき、音姫が話しかけて来た。

「お、おい、下僕。本当に大丈夫なのか？ 無理せんでもいいぞ。佐祐は道場一の強者で、その腕は誰もが認めるほどで……」

「心配ねーよ。それより、姫様。ちょっと賭けしないか？」

「賭けじゃと？」

「そ。俺が勝ったら、その下僕ってのは辞めてもらっぜ。ちゃんと名前で呼んでくれ」

「なっ、そ、それは……」

「いいだろ？」

優は軽く素振りをしながら含み笑う。音姫は悩んで末、仕方なく了承した。

「……勝ったらじゃぞ」

「へへ。約束だぜ」

門下生たちは端の方に座り、音姫は上座にいた。真ん中にスペー
スを作り、優と佐祐が対峙している。

剣道と違うのは、どちらも防具をつけていないところだ。

「手加減はせぬぞ」

「本気で来てください」

お互い竹刀を構える。それを確認し、審判は手を上げた。

「始め！」

佐祐は声を上げようとした。

「やつ……あ……」

しかし、声が止まってしまった。目の前にいる自分よりも背の小さい少年。しかし、今は遥かに大きく見える。

どこにも隙のない構えと集中で砥ぎすまれた目。始めてまだ一步も動いていないのに、汗がこめかみを流れた。

なんだこの威圧感。今まで感じたことのないものだ。雰囲気、いや周りの空気が重く、自分に纏わりついているようだ。

「どうしたんですか？ 来ないのですか？」

「な、なに？」

そのとき、優の剣先が動く。素早い動きを見せ頭を狙ってくる。佐祐は間一髪で頭を竹刀で守り、当たらずにすんだ。

「いい反射神経してますね」

優はそのままガラ空きの胴に竹刀を動かす。佐祐は後ろに俊敏に下がり間を取る。

「へへ。良い反応ですね」

優は余裕の笑みを浮かべ見下してくる。佐祐は奥歯を噛み締めた。

まさか、これほどまでの腕前とは……。明らかに油断していた。

「すごい……」

音姫も啞然と見ていた。

まさか、あやつがここまでの腕とは知らなかった。体つきから多少の武術は身に着いていると思っていたが、まさかここまでの腕前とは……。

優は軽くジャンプをしてリズムを取り、ふっと息を吐いた。

「それじゃ、決めに行きますよ」

「……なぬ？」

優と佐祐の間が一気に狭まった。優の瞬発力は半端なものではない。剣先が佐祐の喉を襲う。佐祐は首をずらし、その剣先から逃れる。しかし、

「そう来ると思いましたよ」

そこで佐祐は気づいた。剣先の軌道が変わり、下に向けられる。優が狙ったのは喉ではなく……手。

バシッ！

竹刀のぶつかり合う音が響いた。優の竹刀は佐祐の竹刀に当たり、佐祐は竹刀を落した。

「俺の勝ちですね」

優は竹刀を肩に置きながら呟く。

誰もが呆気にとられ、目の前の状況に釘付けになっていた。審判は我に返ると優に手を上げる。

「そこまで！ 勝者、優！」

その結果に誰もが息を呑んでいた。あの佐祐が負けたことが信じられないのだ。

音姫はつい立ちあがってしまった。

「あやつ、あの佐祐に勝ちおった……」

優は音姫の視線に気づく。優は笑みを見せると、ブイサインを見せた。

「ま、待て！」

佐祐が優を睨みつけ突然声を上げる。乱れた息を整え、流れる汗を拭うと口を開く。

「まだ勝負はついておらん。次は竹刀ではなく、真剣で勝負じゃ」

「……いいですよ」

優は目を細め、ふと笑みを浮かべた。

お互い再び真剣を握り構える。しかし、そこで異変が起きた。

「な、なんだこれ……」

初めて見る真剣。研ぎ澄まされた綺麗な刃は光で反射し輝いていた。包丁よりも長く、竹刀と同じ長さだが切れ味はまるっきり違う。切られれば……死ぬ。

佐祐は真剣を構え、気迫のある目つきで優を睨む。

前に聞いたことがある。剣道などの試合は、試し合いと書き、自分の力量を知るための稽古である。しかし、一昔前はこう呼ばれていた。

しあいは、死合と書く。つまり、殺し合いだと。

優の手は震えていた。本能がわかった。体が悲鳴を上げていた。負ければ死ぬ。切られれば痛みを伴う。自分の人生が……終わる。

甘く考え過ぎていた。真剣を握ったこともないくせに、容易に承

諾し刀を握る。今自分が本物の馬鹿だと気付いた。

竹刀とはまるで違う雰囲気を纏った真剣。現代ではそうそうお目にかかれない唯一のこの時代の武器。

自分が先に進んでいる時代だからと油断していた。その油断が自分の首を締め付け、そして愚かさを物語っていた。

「初め！」

審判の声が響いた。はっとした優は顔を上げた。目の前には真剣を振りかざす佐祐の姿。

優も真剣を上げて防ごうとする。しかし、恐怖のせいか体がうまく動かない。頭で分かっているても身体がいうことを利かない。もう真剣はそこまで来ている。

やられる……。

「うつ！」

優は目を閉じた。死んだ。自分は、ここで死んだ。

しかし、痛みは襲ってこなかった。いくら待っても頭に真剣の刺さる感触は来ない。

そつと目を開けると、そこには自分の真上で止められた真剣があった。

自分を見下し、少し蔑むような目で見ながら、佐祐はすつと真剣

を引き、鞘に収めた。

優は呆然としていた。そして生きていることがわかった、どさつとその場に尻もちを着いた。

「大丈夫か？」

音姫が優しく声をかけ駆け寄る。

すると、佐祐が背を向けながら口を開いた。

「お主、どうやら真剣での手合わせは初めてのようじゃな。これは失敬した。じゃが、真剣を持っただけでそこまで弱体化するとは片腹痛い。われらはいつもその恐怖と戦っている。いつ死ぬかわからぬこの身、己の身体が国を守るために、われらは戦っている。それも分からぬ小童に」

佐祐は振り返り、優を睨んだ。

「一国の姫を守る責務が務まるか」

その言葉に優は呆然とする。

「さ、佐祐！　そこまでいう必要はなからう！　こやつはな！」

「姫様。あなたも少しは考えて行動してください。勝手にお城を離れ、どこぞと知らない者と会話をし、そして人気のないところに足を踏み入れるのは危険すぎます。もっと自分の身を大切にしてください。姫様の身に何かあったからでは遅いのです。この国が平和に、そして庶民やわれらがこうしていられるのは、姫様次第なんですか

ら」

「うつ……。くつ……」

音姫は何も言い返せず、口を閉ざしうつむく。

「優殿。今問う。そなたに姫様を守る力がありますか？ 共にいる権利がありますか？ 今のそなたでは、この時代で生き抜くことすらできぬ。そんなお主に、人を守ることはできぬ」

優はうつむき、そして深く考えた。

なぜ自分は姫の側にいる。音姫が下僕として一緒にいるようにしたからだ。

しかし、一国の姫様の側に、こんな得体の知れない不審者を側においていいのだろうか。

それも心配であり、皆が気になっていたことは、この如月優が姫を守るほどのやつかどうかなんだ。

確かに剣道の腕に自信はある。竹刀を持てば、そこらへんのやつに負けたりしない。

でも、それは現代での話。ここには現代にはないものがある。それが真剣。真剣を当たり前のように持つこの時代で、自分の力は通用するのだろうか。

なければ、姫のそばにいる資格は……一切ない。

音姫は佐祐を睨みながら、浮き出る涙を堪え反論する。

「さ、佐祐。そなたはわらわの味方ではないのか。わらわの考えに賛同できないと申すか？」

「そういうわけではありません。確かに、一国の姫としての責務は重く、その精神的負担はかなりのものでしょう。そう思うからこそ、度重なる無断外出を黙秘し、殿の耳に触れば私が代弁してしまいました。しかし、姫様がこの国の姫君であることもお忘れなく。改めて……自分がこの国のためにすべきことを考えてください」

最後の言葉に佐祐はずつと重く、深く言い放つ。音姫は拳を固く握り、視線を反らした。

佐祐は嘆息する。

「申し訳ありませんが、姫様、そやつを連れて出て行ってください。稽古はまだ続きますゆえ」

音姫はコクツとうなずくと優と共に道場を出て行く。

佐祐は出て行くまでずつと優を睨みつけていた。

二人は部屋に戻り、縁側に座っていた。

優は未だに放心状態のように気落ちしていた。佐祐の言葉が何度も頭の中で繰り返され、そして自分の今の立場の重みを知らされた。

そのとき、音姫がそつと呟いた。

「……すまなかったな」

「え？」

「佐祐が、あんなこと言って……」

音姫は自分のことのように、申し訳なくうつむく。

「……いや、いいんだ。事実だし。俺はビビってた。自分が死ぬかもしれないって。それにしても、何であの佐祐ってやつは姫にそこまで口答えできるんだ？ あんなやつより、姫の方がよっぽど偉いだろ」

音姫はそつと昔を思い出すかのように話した。

「……佐祐はな、私の幼馴染でもあり、唯一の友なのだ」

「え？」

「これでも多くの友はおった。でも戦で死んだのは知っておるだろ。その生き残りが佐祐じゃ。佐祐は絶対に帰ってきた。生きて帰ってきた。……わらわを守るために」

「そうか」

優は笑みを浮かべ、すつと立ち上がり、まだ青く晴れ渡った空を見上げた。

「どうしたのじゃ？」

「……姫様。前から聞こうと思ってたんだ」

「なんじゃ？」

「……どうして、俺を下僕として、側に置くんだけ？　こんな、どこぞの知らないやつなんかを」

その質問に音姫の顔が微かに朱を帯びてしまっていた。

「いや、それはだな……。あ、その……た、ただ、おもしろいやつだと思つてな。そ、それでじゃ……」

「そつか……。あいつ、俺が姫の側にいるのが気に食わないんだろ？　弱いから」

「え？　ま、まあ、そうじゃな。そういうことになるかの」

「だったら、俺はもつと強くなるぜ。真剣なんて、俺の時代にはないからな。こんな経験滅多にできないぜ」

優は決意の籠った目を見せる。

「あの約束はまだお預けな。竹刀じゃ勝ったが、真剣では何もできずに負けたからな。今度こそ、あいつを負かしてやるぜ」

優はぐつと拳を握る。その決意を見届け、音姫は小さく笑みを浮かべた。

「うむ。期待しておるぞ」

「おう！」

七話 実践と守護

次の日の朝から、優は庭で素振りを始めるようになった。

もちろん手には真剣が握られている。

まずは真剣に慣れなければならない。掴み心地、重さ、雰囲気、どれも竹刀とは比べ物にならない。

今まで自分がしていたことがママゴトみたいだ。

優はじつと構える。

この真剣の恐怖。これを克服しなければならない。恐怖に勝って初めて、真剣をものにできる。

手のひらに感じる柄からの感触を一部にし、集中力を研ぎ澄ましていく。

周りの音が止み、静けさが取り巻く。心を無にし、邪気が消えていく。

優は目を閉じながら、そっと真剣は振りかぶる。頭の上に構える。そして、そっと開き、素早く振り落とした。

綺麗な風切り音が響き、優の目の前でピタッと振動を殺し止まる。

優は緊張を解き、ふっと息を吐く。

大分慣れてきたが、佐祐に勝つにはまだまだだ。もっと真剣を自分のものにしなければ。

優は真剣を鞘に収め、腰に添える。

そのとき、縁側から音姫が声をかけて来た。

「おい、下僕。稽古もいいが、その辺で飯にするぞ」

「お、おう」

優は手ぬぐいで汗を拭きながら縁側に腰を降ろした。

「どうじゃ、真剣には慣れたか？」

音姫が腰を落とし、顔を覗きこんでくる。

優が持っている真剣は、音姫が所持していたもので、あまり使わないということで、借りたものだ。

「いや、まだまだだな。このままじゃ、何とか動けても、あいつには勝てないな」

「じゃが、竹刀では勝てたではないか。それなら」

「いや、そうもいかないんだな。竹刀と真剣じゃまったく違う。竹刀には実際に刃がないが、真剣には刃がある。その刃が相手と垂直や並行にならなければ、まったく切れないからな」

音姫は納得するが、心残りであることを打ち明ける。

「……なあ、下僕。一つ聞いてもいいか？」

「ん？」

「そなたに……人を切る勇気があるか？」

その言葉に優は俯いてしまう。核心をつかれ、正直戸惑う。

自分に人を切ることができるだろうか……。

前に陽姫に言った言葉、『戦を無くしてほしい』とは、つまり人を殺すなともとれる。

優自身、人を殺したくもなければ、切りたくもない。

「下僕。別に無理に戦わなくていいのだぞ。気にせず、子供たちと遊ぼうではないか。陽姫の面倒も見てくれ」

優は視線を降ろし、そして頭を振った。

「……悪いな、姫様。ここで逃げるわけにはいかないんだ。俺はどんな条件でも、剣だけは負けたくないんだ」

優は顔を上げて笑みを浮かべる。

「俺よりも強いのは、一人で十分なんだよ」

その素顔に音姫も納得する。

「そうか。じゃが、剣術だけでは体に悪い。たまには気分転換も必要じゃ。このあと寄るところがあるのだが、下僕も来い。きつと、興味深いところぞ」

音姫は着物を翻し、部屋へと入っていく。

二人は城を出、馬小屋へと訪れる。

今から馬に乗るのだが、優は馬に乗ったことがない。音姫にそそのかされ、乗馬しようとするが、少し馬が走るだけで倒れてしまう。

仕方なく、前に優、その後ろに音姫と、格好悪い乗り方で行くことになった。

二人は城下へと向かい、町の中を通り、奥の森の中へと踏み込んでいく。

「……」

優がつい言葉を漏らす。目の前の光景、それは二人が出逢ったあの泉がある場所だった。

「どうじゃ。ここに来るのも久しぶりじゃろ」

「ああ」

優はそっと泉に近づき、そして空を見上げた。

この上から自分は落ち、この時代へと訪れた。空には何もなく、白い雲と輝く太陽があるだけ。いったいどこから落ちてきたのか、皆目見当もつかない。

「下僕は、自分の時代に帰りたいか？」

「……ああ。あの時代で、俺はやりたいことがたくさんあるんだ。絶対帰ってみせる」

「……別に、ずっとここにいてもいいのだぞ。無理に帰らなくても……。わらわの城で暮らせばよい」

「ありがとう。でも、俺はこの時代の人じゃないんだ。……歴史は、変えちゃいけない」

「……そうか」

音姫は寂しそうに俯く。

「でも、だからってすぐには帰んないよ。佐祐にまだ勝ってないし、まだまだこの時代のことも知りたいしな」

そこで音姫の表情がパツと明るくなった。

「そ、そうじゃな。ここが飽きたら帰ればよい。それまでずっとここにいろ」

「おう。そうさせてもらっぜ」

二人は木陰に座り、太陽の光で反射する泉を見つめる。

風の過ぎ去っていく音、それに伴って揺れる木々、飛んでいく草葉、鳥のさえずりと、自然を満喫できる最高の場所だ。

ここまで心が穏やかになる場所は他とないだろう。現代はなんとも愚かなことをしたのだろうか。

「……ここはな、わらわが幼いころから良く来た所でな、嬉しい時も、悲しい時も、苦しい時も、ここにきてはこうして座り、心を癒したものじゃった」

「そうか」

「下僕の時代では、こんなところないか？」

その問いかけに対し、優はうつむきながら少し重い口を開く。

「……俺の時代では、多分、こんな場所はほとんど残されていないな」

「そ、そうなのか？」

少し音姫が驚いて聞き返す。

「ああ。未来はこんな綺麗な場所は残さず、人口の多い国は、自分の住み家、施設、会社などを建設するために、埋め立て、開拓と新しいものを作り、壊し、自然を破壊していく。こんな大自然を残すのは、簡単なことのはずなのに、難しい問題と変わってしまった」

「どうにかできぬのか？　せめて、ここだけでも」

優はゆっくりと首を振る。

「多分、ここも埋め立てられ、新しいものに変わるだろうな。この泉も、木も、山も、どんどん消えて行く」

「そうか……」

音姫は寂しげな顔になってうつむいてしまう。すると、突然顔を上げて、後ろを振り返ると小太刀を抜いた。

「なにするんだ？」

音姫は名案を思い浮かんだかのように、木に向かって何かを掘っていた。それを見て優は軽く吹き出してしまった。

「なにやってんだよ。そんなもの掘りやがって」

そこに掘られてるのは音姫の名前だった。

『音姫のもの。無断での伐採は禁ず』

「そんなこと書いても、いつまでもつわからないぞ」

音姫は爽やかな笑顔を見せ、満足げに腕を組む。

「よい。少しでも残れば、それでな」

優はそっと笑みを浮かべる。

「そっか」

そのとき、草陰の方から物音が聞こえた。ガサガサという音。明らかに風で揺れた音ではなく、雑草を踏み締める音。

優は耳をそば立て、警戒心を極限に高めた。

「ん？ どうしたのじゃ、下僕？」

「静かに」

優は音姫の口を紡ぐ。その行為で音姫も警戒し始めた。

優は息を止めじつと周りを見渡す。あまりにも静かで自分の心臓の音が聞こえるほどだ。というよりも、緊張と不安のせいで鼓動が高鳴っているのだ。

どうか自分の予想が外れて欲しい……。

しかし、それは無残にも裏切られた。

木の陰からすつと人影が伸び出てきた。他にも違う場所から出てくる。そこには軽装な服装をし、手には真剣が握られている。

「山賊……」

音姫がぼそつと呟く。山賊となれば、狙いは音姫の持ち物だろう。

優は音姫を庇うように手を広げる。

すると、リーダーらしき男が口を開いた。

「これはこれは、お姫様がこんなところで何をしてらっしゃるのですか？ いや、そんなことどうでもいいか。ほら、わかってるんだろ？ 無駄な抵抗は止めて、金目のものを出しな」

「生憎、そなたたちにあげるものは持ち合わせていないのでな。目障りじゃ、さっさと立ち去れ」

さすがというべきか、どんな状況でも音姫は強気だな。でも、この状況はさすがにまずい。

相手は凶器を持った山賊が五人。こっちは二人。といっても音姫じゃ相手にならない。実質一人。どう見てもこちらのほうが悪い。

逃げようにも、すぐに追いつかれてしまうだろう。馬は山賊の一人がすでに奪い取っている。退路はない。

優はチラッと自分の腰に収められているものと、山賊たちが持っているものを見る。

やるしかないか……。

優は鞘に手を当てると、すっと真剣を抜いた。そして目の色を変え、山賊たちを睨みつける。

「げ、下僕……」

「いいか、俺がやつらを引きつけるから、その間にお前は逃げる」

「い、嫌じゃ。下僕を置いてそんなこと――」

「いいから言つとおりにしろ!」

「っ……」

突然の優の怒声に音姫は押し黙る。

「今だけはいうことを聞いてくれ。今姫が死んだら、悲しむのは誰だよ」

「うつ……わかった。しかし、……頼むから死なないでくれ」

音姫はぎゅっと優の制服を掴む。優はニツと笑みを浮かべる。

「死ぬかよ。もとの時代に戻るまではな」

「おい、なにこそこそしてる!」

一人の山賊が刀を振り上げ、優に振り落としてくる。優は真剣を上げ、何とか受け止める。

そしてガラ空きになった胸に優は打ち込もうとする。

よし! これは入る。

確信したそのときに目に入ったのは、

「あっ」

自分が手にしているのは真剣。人を殺すことのできる武器。いつも握っていた竹刀とは訳が違う。

切られれば死ぬが、切れば同様に死ぬ。これをそのまま振り抜けば、この山賊は死ぬ可能性がある。

迷いが生じる。優の真剣がぶれ、力も弱まる。

優は固く目を瞑った

自分には……できない。

「なにしてんだ？」

はっと我に帰る優。しかし遅かった。

胴には真剣は当たらず、優はおもいつきり腹を蹴られ、後ろに吹っ飛び仰向けに倒れる。

鈍い痛みが腹からじわじわと襲いかかってくる。優は痛みを耐え、ゆっくりと起き上がろうとする。

そのときだ。

「は、離せ！ 無礼者！」

優の目の前に映っている光景は、音姫が山賊のリーダーに腕を引っ張られているところだった。抵抗するが、大の大人に敵うわけない。

「大人しくしろ。抵抗しなければ、命まではとらねーよ」

優は焦るように立ち上がり、助けに行こうとする。しかし、痛みで上手くあるけない。

「くそっ……。おい！ その手を離せ！」

「下僕……」

全員が優の方を見る。リーダーは合図すると三人の山賊が優を囲み、鋭い目つきで睨みながら真剣を構える。

優はさっきの自分の甘さに喝を入れた。

もう迷ってはダメだ。確実に死んでしまふ。生き残るためには、音姫を助けるためには、……相手を切り、勝つしかない。

「うおりゃああ！」

一人の山賊が刀を振り上げ力強く振り落とす。優はぎゅっと真剣を構え、体を流すように突っ込み、がら空きになった胴に真剣を打ち込んだ。

「うおおおお！」

優は力強く打ちつけ、確実に入ったことを確認すると切り抜いた。

「うっ……」

山賊は腹を抑えその場にうづくまる。

その間に残っていた二人の山賊が襲いかかってきた。

優は真剣を横に構え、鋭い目つきで睨み、集中力を高める。

一人の山賊の刀が振り落とされる。優は受け止めるように真剣を上げるが、それをフェイクにし、そのまま体を横に反らし、真剣を下げる。

勢いのある山賊の刀は地面に突き刺さる。その隙に優は真剣をくると回すように振りかぶり、そのまま山賊の頭におもいきり落とした。

そしてそのまま素早く残っている最後の一人に近づく、山賊は焦っているにもがむしゃらに切りかかる。

優はいとも簡単に避け、山賊の手に真剣を打ち付け、そして真剣を半回転させ、柄で山賊の首に突き当てる。

「ぐあっ」

全員の山賊はやられ、地面に寝そべっていた。

その光景を山賊のリーダーや音姫は呆然と見ていた。

優はすつとリーダーの方を振り返り、冷酷な目を向ける。

「……離せよ」

リーダーは怖気づくかのように舌打ちをした。

「このままガキ相手に怯んでたまるか！」

リーダーは恐ろしいことに、音姫に向かって刀を振り上げた。音姫は恐怖で動けずにいる。優はすぐに音姫の下に走り出す。

「終わりだ」

リーダーの刀が振り落とさせる。音姫はぎゅっと固く目を瞑った。

「うおおおおー！」

その叫び声で音姫は目を開けた。横から勢いよく飛び出した優が音姫の前に来る。真剣でガードする。

しかし、リーダーの刀はガードをすり抜け、優の目上の額を切られた。

「下僕！」

優はそのまま地面の上に倒れた。傷口からは赤い血が大量に流血している。

「下僕！ ……おい、下僕！」

「……最後だ」

音姫は後ろを振り向く。そこには刀を振り上げているリーダーの姿。音姫は優を庇うように覆いかぶさり、ぎゅっと目を瞑った。

そのときだ。

「誰だ、お前！ うわっ」

そこでリーダーの手が止まる。そこには、馬を見ていた山賊の一人がやられており、真剣を持っている佐祐が立っていた。

「姫様！」

佐祐が素早くリーダーの前に立つ。そして簡単にリーダーを倒した。

その間に、音姫は何度も優に向かって叫んでいた。

「下僕！ おい、下僕！ 目を覚ませ！ 頼むから、目を開けてくれ！」

優は痛みを堪え、そつと少しだけ目を開ける。

目の前には涙でぐしゃぐしゃになっている音姫の顔があった。何度も自分呼びつけ、力強く体を揺する。

優は音姫の無事を確認すると、視界はだんだんと暗くなっていた……。

気づけば、優はいつのまにか布団の上で横になっていた。目を開ければ天井が見える。

「気がついたか」

優はそつと声のした隣を見る。そこには佐祐ともう一人知らない男がいた。医療道具などを持っているので、おそらく医者なのだろうと思う。

そこで自分のおかれている状況を理解した。確か、山賊に切られ、そのまま倒れていたはず。

誰かが助けに来て、自分はここまで運び込まれたのだろう。

佐祐は医者になんかを伝え、そのまま医者は部屋から出ていった。

「まったく。無茶しおつて。ま、傷なら心配するな。すでに治っておるはずじゃ。……姫様のおかげでな」

音姫のおかげ？ 応急処置でもしてくれたのだろうか。

頭には包帯が巻かれ、意外にも痛みが消えて、何ともなかった。まるで完治しているように。

「あ、あの、佐祐さん。音姫、あ、いや、姫様は？」

「心配するな。今は少し疲れて自分の部屋で眠っておる」

佐祐はすつと立ち上がると、部屋から出て行こうとする。そして取っ手に手をかけたとき、ぼそつと呟いた。

「あの山賊たちで、離れた場所で三人が倒れていた。別に傷は無い

のだが、何か強い打撃を与えられたかのように。……いつまでも、お主は甘いのだ」

そういつて佐祐は出て行った。

その言葉で、優は佐祐が何を行っているのかわかった。

あの三人の山賊を倒したとき、優は切って倒していない。全て、峰打ちだったのだ。

確かに、自分は甘いかもしれない……。

そのとき、突然バンツと大きな音を立てて戸が開かれた。そこには息を切らしながら立っている音姫がいた。

「あ、お前、大丈夫だったのか」

すると、音姫は目にいつぱいの涙を浮かべ、ぼろぼろ流しながら、優の前に座るといきなり怒鳴ってきた。

「この愚か者が！ どれほど心配したと思っておる！ わらわに心配かけるなど、下僕ごときが十年早いぞ！」

「え？ あ、その、ごめん……」

まさか怒られるとは思わなかった。

すると、音姫はすつと優に抱きつき、胸の中に顔をうずくめ、肩が小刻みに震えていた。

「音姫？」

「……もう、嫌なのじゃ」

「え？」

音姫は止まらない大粒の涙を流しながら、優の服を力強く掴み、訴えるかのように言う。

「……もう、わらわの下から友が消えるのは嫌なのじゃ。……誰も、死んでほしくないのじゃ。……もう、失いたくないのじゃ」

音姫の声に嗚咽が混じる。

「もうあんな恐怖は味わいたくない……。どんどん消えて行く友の声、存在……。さっきまでいたはずなのに、もういないなど……。こんな寂しさは、もう嫌なのじゃ……」

「お前……」

「もう下僕とは言わん……。もう馬鹿にもせん……。だから……。だから……。わらわのそばから離れないでくれ……」

そのまま音姫は子供のようにながら泣き続けた。

優はそつと優しく音姫を抱き、柔らかく頭を撫でた。

いつも強気な音姫が見せる初めての弱気な姿。それが強く印象的に記憶され、そして初めて……。倒す剣道ではなく、守る剣道を学びたいと思った……。

八話 佐祐と理解

優が部屋で傷を癒すため、療養で寝ているとき、深夜にも関わらず、すっと静かに襖が開かれた。

人の気配に気づいた優はそっと目を開け、目を凝らしていく。

慣れて来た視界には、佐祐が映っていた。

「優殿。夜分すまぬが、少しよいか？」

こんな深夜の最中、わざわざ来るということは、それほど重要な話なのだろう。まず、佐祐から話を持ち合わせるなど、初めてのことであった。

優はゆっくりと起き上がると、コクツとうなずいた。

二人は外に出て縁側に座り込む。夜空に浮かぶ星と月が眩しく、満天の星空は心が弾むようだった。

二人は無言のまま眺めていたが、唐突に話を切り出したのは佐祐からだった。

「まずは礼を言おう。姫様を守り通したことを、深く礼を申す」

佐祐は座りながらだが、深く丁寧に頭を下げる。優はどこか複雑な気持ちで視線を反らした。

「……いえ。佐祐さんが来てくれなければ、あのあとどうなってい

たか」

あのあと自分は倒れて気絶してしまっている。佐祐が来なければ、今頃音姫はこの世に存在してなかったかもしれない。

お礼を言われるほど、大そうなことはしていないと思っていた。

「いや。そなたが守らなければ、姫様は死んでいたかもしれない。確かにそなたは最後に気を失ったが、立派に姫様を守るという役目は果たした。この勲章は、殿に報告し、褒美をもらわねばな」

「いえ、そんな……」

優は遠慮するようにぎこちない笑みを浮かべる。

そして沈黙が訪れる。少しして、次は優が問いかけた。

「佐祐さん。……佐祐さんは、音姫とどういう関係なんですか？」

前から気にはなっていた。どこか二人は上下関係のなく、お互いを理解し合っている仲の良い関係に見える。

四六時中、側近として側にいれば、そのような関係になるかもしれないが、佐祐は音姫に道場で、あのようになら目線で見える。どの発言力がある。

ここは戦国時代。上下関係に厳しく、いくら側近であり、それなりに身分が高くて、あそこまで反抗するのは不可能のはずだ。

そこで佐祐はふと笑みを浮かべる。

「姫君の名を申すとは、なかなかの達者な口でござるな」

確かに、さつきは素で馴れ馴れしく音姫と言ってしまった。

「あ、その、すみません……」

「構わぬ。そなたはこの時代の習わしには関係ないのだからな。……そうじゃな。わしと姫様は幼馴染じゃ」

「それは……聞いてます」

前に音姫が話してくれたのを覚えている。

「そこで不思議に思わぬか？」

「え？……何がですか？」

「なぜ一国の姫とわしみたいな武士が幼馴染かと。わしは確かに上級武士の子じゃが、そこまで仲良くなれぬぞ」

確かにそうだ。なぜそこまで仲良くなる事が……。

「……実はな、姫様は、殿の本当の子ではないのだ」

「え？」

その事実には衝撃が走った。

「殿の子に、子女は生まれなかったのだ。というより、母君は子が

産めない体であつた。優しい殿は仕方ないといって諦めていた。内心、すごく困つていたであろうにな。そんなとき、上級武士である子の音姫に目をつけたのだ。他の女子と結び、子を産めば良いのじやが、殿はどこか変わった人でな、そうしなかった。母君を裏切るようで嫌だつたのじやろう。そして、音姫を養子として授かり、姫となつたのじや」

「そ、そうだつたんですか……。でも、陽姫は？」

「陽姫様は姫様の妹君の関係じや。しかと、血の繋がりはある。姫様の養子と同じように、陽姫も引き取つたのじや。せっかくの姉妹を、わざわざ離れさせるのは酷じやからの」

「なるほど。それで、佐祐さんは音姫と仲が良いのですね」

「上級武士の子同士。わしと姫様はそれは仲が良かった。毎日のように遊び、日が暮れるまで笑いあつたものじや。というよりも、姫様のいいなりになって、尻に敷かれていたのじやがな」

佐祐は愉快そうに笑う。優もクスクスと笑う。

「じやが、姫となつてからはそうそう遊ぶこともできず、姫としての振る舞い、勉強、作法など、覚えることは星の数ほどある。姫様に暇な時間などなかったのじや」

今では有り余っているように見えるが、気のせいなのだろうか……。

「今は落ち着き、生活にも慣れ、こうして余裕もできた。というよりも、殿がそうさせたのじや。……わしが側近になつたからの」

「え？」

「わしの父上は上級武士の中でも最も上の存在。つまり大将なのじゃ。お主に打ち首といったやつじゃよ」

そこで思い出した。あのいちいちうるさいちよび髭野郎のことだと。

「あのちよび髭が……」

優は拳を握って怒りをあらわにする。

「ははは。ちよび髭か。おもしろいな」

「あ、すみません……」

「いや、かまわんよ。ま、そのちよび髭のおかげで、わしも力がつき、こうやって意見を聞き入ってもらえるようになったのだから。そこでわしは、殿に姫様が精神的に参らぬ様、外出などの気分転換をさせるようお願い申したのじゃ。条件としては、わしが側にいて守ることなのじゃがな。じゃが、おかげでこうして伸び伸びと成長なさっておる」

「良かったですね」

「うむ。じゃがな、姫君を襲ったのは、ここからじゃ」

佐祐は難しい顔をして話す。

「今の時代は戦いが全て。生き残るには勝つしかない。男たちは戦が始まれば死ぬまで戦う。もちろん、わしもな。そして、……姫様の友も」

佐祐は昔を思い出しながら語る。

「姫様の友は、わしの友でもある。戦に連れ、友たちがどんどん死に、その数は減っていく。国のため、姫のために戦い、そして死んでいくものたちを見て、姫様の精神状態は極限にまで追い込まれていた。自分に押し掛かる責務の重さ、戦の恐怖、自分の価値観など、想像も超えるほどの姫様という立場に、押しつぶされそうになったのじゃ」

「そうだったんですか」

「だからこそ、姫様であろう者が、あのように身勝手に外出できるようにしたのじゃ。これはわしの案なのじゃがの」

「なるほど。そうだったんですね」

「しかし、それには二つの条件がある。一つは姫君としての責務を果たし、国のために貢献すること。そして、……さつきもいった、わしが側にいること」

佐祐はぐつと拳を握った。

「姫様を容易に外出するには力が必要じゃ。権力もじゃが、武力もな。権力は父上がなんとかしてくれたが、武力は自分次第。わしは鍛えに鍛え、道場一の力をつけた。そしてわしが側近となり、姫君は外出できるのじゃ。じゃが、今ではなぜかお主が側近となってい

るがの」

「いや、俺は側近というより下僕といったほうが……」

すると、佐祐はぽんつと優の肩に手を置いた。

「お主は強い。剣の腕前は確かなものじゃ。実際に受けたわしがい
うから間違いない。……これからも、わしの代わりに姫様を頼むぞ」

「で、でも、俺なんかより佐祐さんの方が……」

「ああ。まだわしだって負けておらんぞ。勝負はついておらんから
の」

「どうやって勝敗は認めないらしい。この負けず嫌いは音姫ゆず
りだろうか。」

「しかし、姫様のあのような笑顔は久しぶりに見たものじゃ」

佐祐は空を見ながらほくそ笑む。

「わしといるよりも、ずっと生き生きとした顔立ち、あれはお主に
しかできぬこと。だからこそ、わしはお主に姫様の側にいさせたい」

「でも、俺……」

「お主でよい。自信を持て。そなたなら、姫様を守れる」

佐祐は満足げに笑みを浮かべながら、すっと立ち上がった。

「あ、そうじゃ。お主は知っておるか。……姫様の力を」

「力？」

「その様子じゃと知らないようじゃな。ならば、本人に直接聞けばよい。いや、近いうちに知るかもしれぬがな」

「あ、あの」

「夜分にすまなかったの。傷が癒えるまで、療養するがよい。その傷はすでに治っておるが、全て姫様のおかげじゃ、後で礼をいうがよい」

そういつて佐祐は行ってしまった。

優はすぐに戻る気がせず、しばらく星を眺めることにした。

夜空に浮かぶ月を見ながら思う。

この時代に来て、自分がすべきこと。新しき課題。それは些細だが、見えて来た気がする。

そして、なぜ自分はこの時代に来たのだろうか。

その謎は、いつかわかる日が来るのだろうか……。

部屋ですつと療養に努め、栄養を着けようと、夕食をもぐもぐと食べているとき、元気よく、というよりもおもいきり戸が開かれ、

外から陽姫が入ってきた。

「お兄ちゃん！ 怪我をしたとは真か！ 無事なのか！」

相変わらず元気で可愛い音姫の妹である。なぜこんなにも姉とは違つて癒しを与えてくれるのだろうか。

「大丈夫か？ わらわが撫でてやるぞ」

そういつて陽姫は小さな手で包帯を巻かれた優の頭を撫でる。

ああ、たまにはこうして撫でられるのもいいな。

「お兄ちゃんは、姉上を守ったそうだな。妹であるこの陽姫からも礼をいうぞ。誠に感謝する」

「いや、俺なんてたまたま運良く相手が倒れてくれて、何とか庇えつつ感じただよ。佐祐さんのおかげだな」

「そんなことないぞ。父上が是非ともお礼をしたいと申しておった。きつと豪華な褒美が貰えるぞ」

「へえ、褒美か。例えばどんなかな？」

陽姫は撫でるのを止めると、自分の顎に人差し指を当てて考え込む。

「うん。褒美を受け取る者の要望によるが、地位が大判小判などの」

「そっか。好きなものが手に入るのか」

「お兄ちゃんは何を望んでおるのだ？」

陽姫が興味津々に訪ねて来る。

「そっだな。今俺は……」

そのとき、すつと戸が開かれ、少しおどおどとした感じに、音姫が顔を覗き込んでいた。

「あ、その、……ちょ、ちょっと良いか？」

音姫が少しぎこちなくというより、どこかそわそわした感じに問いかける。

優はちょうど夕飯を食べ終えたばかりなので、断ることはなかった。

二人は廊下に出てスタスタと静かに歩いて行く。

陽姫には悪いが席を外してもらい、使い終わった食器を持って行ってもらった。

給仕の人達は驚くだろう。姫の妹に値するものが食器を運んでいるのだからな。

二人はひたすら無言で歩き続けた。

前を歩いていた音姫は、何度かチラチラとこちらを振り向き、どこか気にしながら歩いていた。

行きついた場所は、音姫のお気に入り場所でもある、天守閣だった。

以前は昼間にきたのだが、今はすでに太陽は沈み暗くなり、ぽつぽつと煌めき始めている星が綺麗に輝いていた。

二人は手すりに身を任せながら、じっと夜空を眺める。

そういえば、前にもこうして佐祐と星を眺めたが、戦国時代の人たちは、こうして星を眺めるのが好きなのだろうか。

少しして、音姫が少し緊張気味に優に問いかけた。

「も、もう、傷は治癒したのか……？」

「え、あ、ああ。もう痛みはまったくないよ。というより、気づいたときから痛みはなかったけど。だからもう大丈夫だ」

「そ、そうか。それはなによりじゃ」

本当に安心したらしく、音姫は深く安堵の息を吐く。

「あ、あのな、まだお礼を言っけなかつたのを思い出してな。今回は、本当に助けられた。心から、お礼を申し上げる」

音姫は深く丁寧な頭を下げた。

「俺は何もしてないよ。そこまでお礼を言わなくていいぜ」

音姫は顔を上げた。

「いや。本当にわらわの命がこうしてあるのはそなたのおかげじゃ。本当に、礼を言う」

「そ、そうか」

優は照れたように頭を掻いて軽く笑う。

「そ、それでな、父上が、今度褒美を差し上げたいというのじゃ。何か要望はあるかの？ 何でも良いぞ。金でも、地位でも、名誉でも」

「いや、いいよ、褒美なんて。俺はそこまでされるほどじゃないねーよ」

「そんなことないぞ。わらわを助けたのじゃ。このくらい、して当然。遠慮などするな」

「そうか？ じゃあ、一ついいかな」

「うむ。何でも申してみよ」

優はポリポリと頬を指で掻きながら、少し遠慮深く言う。

「俺、これからも、音姫のそばにいたいな……」

「え？」

音姫の顔が一瞬で赤くなる。

「いや、けっこうこの生活楽しんだ。俺の時代じゃ、こんな味わえないし。そりゃ、不便だし、面倒なことたくさんあるけど、こうして音姫や陽姫ちゃんと一緒に過ごして、なんというか、ホッとするんだよな」

優はヘラヘラとほくそ笑む。それから、音姫は頬を紅潮させたまま、視線を下げた。

「あ、あの、この前の、わらわの言葉を覚えているか？」

「え？　なんかいったっけ？」

「ほ、ほら、あの、もう、下僕とは言わないと……」

「ああ、そっぴやそんなこと言ってたな」

音姫が大泣きしたとき、そんなこと言っていた気がする。

「そ、それでな、こ、これからは……そ、その……、あぐ……だ、だからな、その……」

音姫は人差し指の先をツンツンしながらもる。

「え、ええと、だから、……こ、これからは、そなたのことは……す、優と呼ぶ。……よ、よいな」

「え？　あ、ああ」

「か、勘違いするでないぞ。別にわらわは、約束は破らない主義で、

決してそなたを見直したわけでは」

うむ。見事なツンデレっぷり。でも、黒の長髪にいつも強気な態度。そこから見せる守ってあげたいような弱さと恥ずかしさのギャップを見ると、ついそんな単語が思い浮かぶ。

でも、……音姫は、自分のことをどこまで思っているかは、よくわからない。

「ありがと、音姫。これからもよろしくな」

優は満足気に言う。すると、

「……紬じゃ」

「え？」

音姫は未だに顔が真っ赤であり、暗がりの中でもそれがわかるほどだった。

「わらわの真名じゃ。音姫は仮の名で、真の名は紬つむぎと呼ぶのじゃ。本来、真名は、身内や配偶者などにしか教えぬ仕来たりじゃが、優には特別に教えてやる。感謝しろ」

「へえ、真名なんてあるんだ。それじゃ、これから紬つむぎと呼ぶぜ」

「お、おう……」

音姫は顔を背けて、羽織で覆い隠していた。

まさか、真名をちょっと呼ばただけで、こんなにも緊張し、そして嬉しさが込み上げてくるとは思わなかったからだ。

少しして落ち着くと、音姫、いや紬は夜空を眺め、満面の笑みを浮かべ、上機嫌なままだった。

九話 催しと穏やかな娘

今日もいつもと変わらない、穏やかな日常を過ごすことを考えていた優。

傷はすでに完治し、普段の優へと戻った。

あの夜から、少し音姫、もとい紬の態度は多少なりとも変わった。下僕とは言わず、名前で「優」と呼び、以前のように見下すこともなく、過酷な雑用も押しつけることはなくなった。

優自信、それは嬉しいことなのだが、いざ仕事がなくなると、それでいいのかと考えるようになった。

自分は拾われ、いわば居候の身。何か手伝いをしなければ、返って落ち着かなくなってしまう。

そのことを紬に相談したのだが、紬は

「よいよい。優はのんびり毎日を穏やかに過ごせばよいのじゃ。それとも何か、わらわのお仕置きが必要なのか？ まったく、優はおかしなやつじゃの」

そんなことを言い、仕事はなくなった。

それから、優は常に庭に出て真剣で素振りをするようになった。やることと言えば、今はこれしかなく、大好きな剣道もでき、佐祐

との再戦も考えているので、これはこれでいいとも思ってきた。

しかし、いまいちパツとしないのが、自分の今の立ち位置。

下僕でないとすると、自分の身分は何なのだろうか。

別に、優はこの時代のもではなく、身分や地位に興味もなければ、それを得ようとも思わないが、どうもスッキリとしない。

これなら、まだ下僕として紬の側にいた方がまだ良い気がする。

別に自分はM体質ではない。これだけは、はっきりとっておく。

そして、優はさっそく紬に自分の役職を紹介してもらおうと、相談に押し掛けた。

「うむ。優の言い分はよくわかったぞ」

紬は納得したようにうなづく。

「ならば、わらわが優の職を与えてやる」

「おう。掃除でも何でもしてやるぞ」

優は気合いの入った声で答える。

「うむ。優の役職はわらわの側近じゃ」

「……え？」

「なんじゃ、気に入わんのか？」

紬が拗ねたように口を尖らせる。

「いや、側近は佐祐さんじゃ……」

「佐祐は昇格して大将じゃ。あやつも立派な武士じゃからのう」

「でも、いいのかな？」

「いいに決まっておる。わらわが決めたのじゃ。変更はないぞ」

紬は満足気に笑みを浮かべる。

「でも、俺が側近で、みんなが納得するかな。側近つて、それなりに強い人がするんだろ？ 主を守る役職だし。ならば、みんなに俺の力を認めさせなきゃ」

「それなら心配いらぬ。つい最近、佐祐を倒したではないか」

「ああ、まあ、そうだけど……」

「これ以上の詮索は無用じゃ。優は胸を張って、わらわの側近と名乗るが良い」

こうして、釈然としないが、優は紬の側近として、働くことになった。

次の日から、紬は殿をはじめ、佐祐の父上に値するあのちょび髭野郎などに、優が側近になったことを報告する。

紬の父である殿はすぐに了承した。さすが娘に溺愛しているだけのことはある。

しかし、やはりこの男は納得していなかった。

「納得いきませぬ！ 姫様の側近は我が息子の佐祐のはず！ そんなよそ者に側近をまかせるなど、笑止千万！ まずはそれなりの力量を見せつけるべきでは！」

相変わらずうるさいおじさんだ。優がそんな目で見てみると、近くにいる佐祐はクスクス笑っていた。

すると、じっと聞いていた紬は立ち上がり声を発した。

「おい、そのちょび髭！」

「ちょ、ちょび髭！？」

あの馬鹿。俺が前にいったことを、怒り任せにいつてしまいやがった。

おかげでちょび髭は戸惑っている。佐祐は腹を抑えながら笑いを堪えていた。

「さっきからごちゃごちゃと、わらわの意見が聞けぬと申すか！」

「し、しかし、一国の姫様を守るものが、そんな妙な奴ではこちら

も不安で納得できません。それなりに。この小童に覚悟があるのか、それを確かめさせていたきたい」

「……認めさせればいいのだな」

「あ、はい」

「ならば、こういっのはどうじゃ」

紬は笑みを浮かべ、大々的に発表する。

「国一番の強者を決する試合をするのは」

「な、なんと！」

その企画に皆ざわざわと騒がしくなる。

「参加者は誰でも良い。一般人でも誰でもな。特別に見学も自由じゃ。せつかくじゃから、城下のものも参加させよう。それで優が優勝すれば、そなたも認めざるを得ぬじゃろう？」

「も、もちろんでございます」

「うむ。詳しいことは後日報告する。以上じゃ！」

紬が満足気に座る。

隣で佐祐はにやつと笑った。

「優殿。どうやらあのときの決着は近いうちに着きそうじゃな。楽

しみにしておるぞ」

「……もちろんですよ」

こうして、国一番を決める、日向統一決定戦が始まった。

次の日から、この事を国中に広めるために皆動きに動いていた。

試合会場の設備や、観客席の設立、報告やルール、道具、企画、運営など、やることは大いになった。

なにより、紬はこの大会で上位にいったものは、すぐに中級、または上級武士、もとい商人や農民などは武士になることを約束した。このことが広まり、町を初め、皆気合いが入っていた。

優と紬は城下を歩きながら、皆暇があれば素振りをする人たちを眺めていた。

「うわー、みんな竹刀持つてるよ。すごいな」

「ま、昇格など簡単には行かぬからな。この千載一遇の機会に、昇格しようとするものが多いのだろう。」

商人や農民よりも、武士のほうがそれなりに待遇は良いからのう」

「へえー。でも、何で誰でも見学することを許したんだ？」

「ん？ もちろん」

紬は優の方を向き可愛らしく笑みを浮かべる。

「そなたの力を国中に広めるためじゃ」

「て、まだ俺が優勝できるかわかんないだろ」

「大丈夫じゃ。そうじゃな、優勝するなら、優か、あとは佐祐くらいじゃろう」

「ま、確かに佐祐さんは強いけどな」

二人は一通り町を回り、城へと戻ってきた。

優は自分も練習しようと思い、真剣の代わりに竹刀を持って素振り始める。

真剣をずっと握っていたせいか、竹刀だとやはり軽く感じる。つい力みが出てしまった。すぐにこの重さに慣れなければ。

優は迅速かつ丁寧に、一つひとつ集中して振っていく。

少し休憩しようと、優はふっと息を吐いて息を整える。

そのときだった。

「どうぞ、優様」

目の前には綺麗な手ぬぐいがあった。

「あ、ありがとう」

優はそれを受け取る。そのとき、初めて渡した人を見たのだが、そこにいたのはとても美しい女性がいた。

歳は紬や優と同じくらいで、同じように黒く長い髪、しかし、どこか穏やかで優しさのある雰囲気を出し、おっとりとした感じの人だった。

綺麗な肌に、大人びた顔立ち、そして女神のような瞳。紬もなかなかの美少女だが、ここにいる人も負けなくらいの美少女だった。

その女性は可愛らしく、ニコツと笑みを浮かべた。

「お初に、優様。わらわの名は雲と申します。優様のお噂はかねがね耳にしております。どうぞ、よろしく願いつこう奉ります」

雲はぺこりと頭を下げる。

「あ、その、いえ、こちらこそ」

顔を上げた雲は優しく微笑んだ。その笑顔を見て、優の顔は赤くなってしまうた。

「それでは、これにて失礼します。今度の催し物、優様の活躍に激励申し上げます」

雲は最後までお淑やかかつ丁寧に振る舞い、去っていった。

「……可愛い人だったな」

そんな言葉をつい呟いてしまう優だった。

「ああ、雲にあつたのか」

優は紬に彼女のことを問いかけた。

「あの子この城に住んでるの？」

「雲は上級武士の子でな、わらわも何度か話を交わしたことはある。ま、どうも箱入り娘って感じで、どうも好きになれんがの」

「まあ、確かに、紬よりもずっとおしとやかだしな」

そこで紬の眉がピクツと動いた。

「なんじゃ？　わらわはおしとやかではないと？」

紬が怒りの形相で優を見下してきた。優は何度も頭を下げる。

「ま、雲はマイペースな奴じゃからのう。容姿もそれなりに美人じやし、男たちから人気もある。秀才でもあり、いわゆる完璧な奴じや」

「へえ」

「ま、わらわよりは劣っておるがの。ふふふふふ」

紬が不気味に笑っていた。

それにしても、また会えないだろうか。

そんなことを、優はつい考えてしまっていた。

大会まで残りわずかとなった。

ここで簡単にルール説明をすると、剣道とだいたい同じであるが、武具なし、使うものは竹刀で、年齢制限なし、時間無制限で、相手に一本取れば勝ち。一本というのは、面、小手、胴、突き、どれかに綺麗に当たればいいのだ。場外はないが、審判が目に見えないところまでいけば無条件で失格。方式はトーナメントで、優勝者には賞金もあり、上位に進めば昇格もあり得るといふ。

紬は優の側近になるための催しだが、殿や大将にしてみれば、新しい戦での逸材の掘り出し物探しに持って来いだった。

優は庭でイメージトレーニングをしていた。縁側には陽姫がいた。

「のう、お兄ちゃん。お兄ちゃんもあの催し物に出るのдар？ 絶対一番になってくれよ。わらわは応援するぞ」

「ありがと。今回は確かに負けられないな。紬の側近にもならないといけないし、佐祐さんとリベンジしなければ」

「リベンジ？」

「再戦のことだよ」

「なるほど」

そのときだ。

「精が出ますね、優様」

その穏やかな声に、優はさっと振り返った。

そこにいたのはやはり、雲だった。

「汗が出てますわ。これをどうぞ」

雲は手ぬぐいを渡す。優は礼を言って受け取った。

「もうすぐですね。心から激励申し上げます」

「ありがとう」

優は嬉しさのあまり、顔を少し赤らめてしまう。

すると、突然雲は優の顔を掴み、じっと見つめて来た。

「え？ あ、あの、何か？」

「……凛々しい顔をしておる」

「え、あ、その……」

「……優様は、誰かと契りを交わしましたか？」

「え？ 契りつて……？」

確か、契りは結婚の意味があつた気がする。

「べ、別に誰とも……」

「さようですか……」

霏はそつと手を離し、ニコツと笑みを浮かべた。

「楽しみにしております」

そう言い残し、霏は去っていく。

優が呆然としてみると、横から陽姫が近づいてきた。

「お兄ちゃんは、霏殿を知っておるのか？」

「あれ？ 陽姫ちゃんも知っているの？」

「うむ。何度か遊んだことがあるぞ。とても優しくてな、なんだか心が落ち着くのじゃ」

「へえ。たしかに穏やかな印象だよな」

そして、ついに統一戦が訪れた。

十話 統一戦と予選

とうとう紬が開催した、日向統一決定戦が始まった。

参加数は百を超え、いつも戦に出ている者や、農民、商人も加え、皆気合いの入った顔で臨んでいた。

試合会場はいくつもあり、優は紬と陽姫と共に一緒に見て回っていた。

「なんかすごいことになってるな」

「ふふ。皆おもしろそうにしておるの。難儀やな」

「もう疲れた。お兄ちゃん、わらわを運んでくれ」

優は駄々をこねる陽姫をおんぶしながら見て回る。

すでに試合が始まっているので、竹刀のぶつかり合う音や歓声が響いてくる。

「優の試合はいつなのじゃ？」

「うん。第6会場でもうすぐだよ。その前に佐祐さんの試合を見に行こうよ」

「うむ。そうじゃな」

三人は第4会場で行われる佐祐の試合を見に行く。観客席に着い

たとき、ちょうど始まるところだった。

「おっ、佐祐じゃな。おゝい、佐祐ゝ！」

紬は佐祐に手を振る。

本来姫様がそんなことをするのははしたないのだが、そんなことは気にしないらしい。

声に気付いた佐祐はリラックスした様子で、笑みを浮かべながら軽く振り返した。

「あの様子じゃと心配ご無用じゃな」

「うん。大丈夫そうだね」

そして試合が始まった。佐祐の相手は町の農民らしい。町の男は基本戦に出ているのだが、農民だと武士と違い、練習時間などはなく、農作業で忙しい。

佐祐はものの数秒で一本を取り、楽々一回戦を突破した。

「さすが佐祐さん。見事だな」

優は拍手を送る。

「うむ。期待通りだな。さ、次は優の番じゃ。会場へと移ろう」

「おっ」

優は自分の番である会場へと来た。ざっと周りを見渡すと、他と違い、観客の数が多かった。

殿やあのちよび髭を初め、上級武士や中級、下級武士の者、もちろん、紬や陽姫、佐祐までいる。

そして城下町の子供たちや、優の噂を聞いたものなど、ギャラリィは溢れかえっている。

こんなことは、全国大会以来だった。

とうとう優の番になり、軽く腕を回して前に出た。相手は佐祐と共に道場で鍛えている門下生の一人だった。

「お兄ちゃん、頑張って〜!」

「優〜! そんな奴簡単に倒してしまえ!」

紬が姫様らしくない歓声を送り、優は苦笑いを浮かべていた。

「心配しなくても、負ける気しないよ」

「始め!」

審判の声が聞こえ、門下生は声を上げる。

優はすつと集中力を上げ、鋭い目つきになる。

その目を見て、門下生は後ずさりしてしまった。その威圧感はすさまじく、まるで猛獣と戦っているようだった。

「……いきますよ」

「え？」

門下生は我に返るが、すでに遅かった。優はすばやく門下生の懐に入る。

その俊敏さに皆括目していた。観客たちはざわめきを起こす。佐祐はじつと見ていた。

「ぬっ！」

門下生は離れようとする。しかし、優のすばやさに敵わない。

「くそっ！」

門下生は振り払おうと竹刀を振り上げ、力強く振り落とす。

それを優は狙っていたのだ。

優は素早く横に避ける。振り落とされた竹刀は地面にぶつかるほどの力。そのせいで、門下生の頭はがら空きだった。

「うおりゃっ！」

優は竹刀を振りかぶり、門下生の頭の上でピタッと止めた。そしてニツと笑みを浮かべた。

「俺の勝ちでいいですか？」

呆然としていた門下生は呆氣にとられながら、曖昧にうなずいた。

「そこまで!」

審判が試合を終わらせ、優は軽く拳を握ってガッツポーズする。

「よくやったぞ! 優!」

「やった! お兄ちゃんが勝った!」

紬と陽姫は万歳して喜ぶ。それを見て優は軽く笑う。

「どうですか、父上」

佐祐は自分の父親のちょび髭に問いかける。

「ま、なかなかやるようだな。しかし、まだ一回戦。まだまだだわ」

「そういつて立ち上がり去っていく。」

佐祐はふと笑みを浮かべて紬と陽姫と戯れる優を見る。

「絶対勝ち上がってくるのだぞ、優殿」

そしてどんどん試合は続けられ、優も佐祐も無事に勝ち上がっていく。

勝ち上がるのはだいたい戦で活躍するものや、道場の門下生などで、普段農業や商業に精を出すものはあまり残っていなかった。

試合の約半分強が終わり、昼食の時間になった。

本来外で食べるのは禁止なのだが、優が外で食べたいといい、紬や陽姫、優は近くの芝生の上でお弁当を食べることにした。

「ほう。未来ではこのように外で食事をするところがあるのか。行儀悪くないか？」

「たまにはいいものだよ。こうやって外の景色を見ながら食べるのも、気分転換できて悪くないだろ？」

目の前の景色は大草原が広がり、普段見ていた景色を改めてみると違って見える。

「うむ。いいものだ。……ところで、陽姫、そなたはそこから降りろ」

「え？ どうしてですか？」

「そこは優の膝の上だろうが！」

陽姫はなぜか優の上に乗って座っていた。それを見て紬はいつになく憤慨している。

「よいではないか。それとも、お兄ちゃんは嫌か？」

「いや、俺は別にかまわないけど」

「かまえ！」

紬が鬼のような目で睨んでいる。

そのとき、じゃりっと足音がした。

「おめでとうございます、優様」

「え？」

そこにいたのは雲だった。今日も穏やかで、綺麗な着物をはおり、手には小包が乗せてあった。

「こんなところで食事とは、なかなか風流ですわね」

雲は柔らかに微笑み、綺麗な瞳で優を見る。

そんな笑顔を見て、優はつい頬を赤くしめてしまった。そんな優を見て、紬はむっとなる。

「未来ではこれが普通だけどね。良かったら、雲さんもどう？」

優は少し照れ笑いを浮かびながら誘う。

「わらわはすでに済ませてあるので。お心遣い感謝します。その、宜しければ、これを」

雲が渡したのは手元にあった小包で、中にはおにぎりやおいしそうなおかずが入っていた。

「うおっ、おいしそうだな。ありがとう、雲さん」

「いえ、優様がお喜びになられれば、わらわも嬉しく思います」

そして霰は紬に目を向けた。

「久しく、姫様」

「おう。霰」

紬は少し不機嫌そうにぶすつと答える。

そんな紬を見て、霰は含み笑いを浮かべる。

「そういえば、この催し物は、優様を側近にさせるためのものではないかね」

「そうじゃ。これで優が優勝すれば、わらわの側近となるのじゃ」

「なるほど。さようですか」

そこで霰は小さく口元を緩ませる。

「それでは、優様、次も激励申し上げます」

「うん。ありがとう」

優はおにぎりを食べながら笑みを浮かべる。霰は陽姫の頭を優しく撫でた後、優雅に去っていった。

「ふん。どうも好きになれん」

紬は腕を組んでふんと鼻を鳴らす。

「そうかな。とても優しそうで、いい人だと思うよ」

「うむ。わらわも好きだぞ」

「そうかも知れぬが、あやつはいつも何か考えておる。雲の父は戦の作戦を考えるのに優れており、娘の雲もなかなか頭の切れるやつでな。あの見透かすような目が気に入るわんだ」

「へえ」

優はどんどん雲から貰ったお弁当を食べて行く。本当におしかった。

昼食時間を終え、試合は後半戦へと入る。

優と佐祐の勢いは止まらず、苦戦することなく勝ち進んでいく。

そしてついにベスト8まで上り詰めた。

「さすがは優じゃな。ここまでよく戦った」

紬は満足そうな笑みを見せる。

「あと三回勝たないと優勝できないけどね。ま、何とか勝てて良かったよ」

優はそつとトーナメント表を見る。佐祐とやるには決勝まで上がらなければならない。

「優殿」

後ろから呼ばれ、優は振り返ると佐祐がいた。

「クジのせいで決勝までいかなくてはならなかったが、どうか負けないでくれ」

「もちろんですよ。佐祐さんもですよ」

「うむ。決勝で待ってるぞ」

そいつって佐祐は行ってしまう。優は気合いを入れて試合に臨んだ。

しかし、次の相手がよりにもよって……。

「ふふ。よくぞここまで勝ち上がったな、小童が」

優の目の前にいるのは佐祐の父親のちよび髭だった。まさか、こんなおっさんが参加しているとは。

「なぜあやつが参加しておるのじゃ？」

紬は納得いかないようだ。

優は嘆息した。

ちょっとやりにくいけど、負けるわけにはいかない。優は集中し始めた。

「始め！」

審判の声と同時にちよび髭は竹刀を振り上げ、優めがけて振り落とす。優はそれを受け止める。

そのときだ。ちよび髭はにやつと笑みを浮かべる。

「うおおりゃああああっ！」

ちよび髭は力強く押し出し、優は後ろに吹っ飛んだ。

「うおっ！」

優は観客席の中に倒れ込む。

「がっはははは！　これごときで倒れるなど、方腹痛いわ！」

ちよび髭は余裕のある態度で高笑いする。

「あのちよび髭！　優に何という事を……。打ち首にするぞ！」

紬は心底憤慨し、乗り上げて乱入しようとしている。それを佐祐が懸命に止めていた。

「お兄ちゃん、大丈夫かな？」

陽姫は心配した表情で見つめる。

「失格じゃ！ あやつを追い払え！」

紬は未だに激怒していた。

「落ち着いてください、姫様。あれも戦術の一つ、決して卑怯ではありません。それよりも、優殿が持ち堪えられなかったことの方が失態ですぞ」

「なんじゃ、佐祐は優の応援をせぬのか！」

「もちろん、私は優殿に勝ってほしいと思いますぞ。それに、姫様は優殿を過信しすぎてはいませぬか？」

そこで紬の動きが止まり、佐祐に顔を向ける。

「どついうことじゃ？」

佐祐はふと笑みを浮かべた。

「あれくらいで参るような優殿ではない。それよりも、優殿の本気が見られるかもしれませぬぞ」

二人は優に目を向ける。

優は観客から背を支えられ、ゆっくりと起き上がる。

そこには鋭く目が光り、怒りの竦った目が、佐祐の父親に向けている優の姿があった……。

十一話 勝利と敗北

観客席から起き上がり、優はゆっくりと試合場に入る。

その鋭い目は、一線に佐祐の父親に向けられ、ものすごい怒りが込められていた。

その目を見て、佐祐の体はぶるつと震えた。

これが武者震いだろうか。それとも恐怖？ どちらにせよ、これで優殿の本気が見られるかもしれない。

「お兄ちゃん、なんだか怖い……」

陽姫は紬にしがみ付き、ぎゅっと袖を掴む。

「どついうことじゃ……。あんな優、見たことない……」

紬も優から目が離せず、冷や汗を掻いていた。

優はすつと竹刀を構え、研ぎ澄まされた集中力を見せつける。

「ふん。そんな顔しても、わしには敵わぬぞ！」

ちよび髭は勢いよく襲いかかる。そしてさっきと同じように鈍い音がしてぶつかり合う。

「優！」

細がつい叫び声を上げる。しかし、そんな必要はなかった。

優はその場から一寸も微動だにせず、ちよび髭の突進を受け止めていた。

優はそのまま鋭い目つきを向ける。

「どうしたんですか？　こんなものなんですか？」

「なにっ！」

ちよび髭は焦りを覚え、胴を打ってくる。それを優は素早く避け、ちよび髭と間を取る。

「小童が、なぜそんなに重く……」

「ふん。ちよつと腰に力を入れて踏ん張っただけだ。さっきは少し油断したが、次はこつちから攻めるぜ」

「なに？」

優は一気に間を詰め突進してくる。ちよび髭は竹刀を振り落とし、優の頭向かって打ちつけようとする。

優はバシッとその竹刀を跳ね飛ばした。

「ぬっ！」

そしてそのまま肩から突っ込んだ。その勢いに負け、ちよび髭は背中から豪快に仰向けに倒れこんだ。

「さっきのお返しです」

優は見下ろしながら小さく笑みを浮かべる。

ちよび髭の表情からは、さっきまでの余裕はなくなり、あとは怒りしかなかった。

「小僧が……、調子に乗り追って……」

ちよび髭は起き上がると、大きく振りかぶって連続で面を打ってくる。優は華麗に避けたり、軽く受け止めて全て防いでいく。

「くそ！」

ちよび髭は一次間を取り、リズムを取り戻す。

「終わりですか？　なら、こっちから行きますよ」

次は優の攻撃である。優は得意の突きを何度も繰り出し、剣先をちよび髭の喉めがけて突いていく。

ちよび髭は苦戦しながらも、何度も竹刀で跳ね飛ばし、喉から遠ざけようとする。優の突きはとても素早く鋭く、そして残像のように何重に増えて見える。

ちよび髭はだんだんと払いが強くなっていく。そして突きをしようとせず、ピタッと止めた。そのせいで、ちよび髭の竹刀は空を切り、自分自身は隙だらけになった。

その機会を見逃さず、優は素早く面に向かって竹刀を振り落とす。

「調子に乗るな、小僧が！」

そのときだ。ちよび髭は自分の竹刀を下から払い上げ、優の竹刀を振り飛ばした。

「なっ！」

優はざつと後ろに下がり、じつと対峙する。

やっぱり佐祐の父親でもあり、上級武士のだけのことはある。ただ偉いだけでなく、それなりに力もある。簡単には勝たせてもらえない。

優はぎゅっと竹刀を構え、そしてチラッと紬の方を見る。紬は心配した表情をしており、ぎゅっと手を握り締め、つぶらな瞳で見つめていた。

優はちよび髭に向き直り、集中力を増した。

負けるわけには、いかない……。

「小僧……そろそろ決着させるぞ」

ちよび髭はすさまじい怒りと共に睨みつけて来る。優はふと笑みを浮かべた。

「いいですよ。こんなところで躓いてちゃ……」

優は目を光らせ、はつきりと答える。

「姫様の側近なんて、できないですもんね」

二人は一斉に距離をつめ前に出る。そして激しいぶつかり合いが生じる。

「ぬっ！」

「くっ！」

二人は少し下がり、間を開ける。そしてそのまま二人の竹刀のぶつかり合いが始まる。上、下、横、斜め、突きと、お互いの打突を防ぎ、そして攻撃を仕掛ける。

ちよび髭は優に突きをしてきた。優はここで賭けに出る。

優はちよび髭の竹刀の軌道を変えた。自分の竹刀を横に添え、そのまま下へと降ろす。そしてすばやく足で踏みつけ、そのまま自分の竹刀をおもいつきり振り落とした。

「うおおおおっ！」

バキッ！

会場にる全員が沈黙し、啞然とした表情で見ていた。

ちよび髭の竹刀は優によって二つに分離してしまった。

ちよび髭はあまりの出来事に呆然とし、恐る恐る自分の竹刀を見

る。

「こ、こんなことが……」

すると、優はそつと左手だけで竹刀を振り上げ、ちょび髭の頭にピタッと振り落とし止めた。

「さ、認めてください。……自分の負けだと」

優は冷たい目を向けながらふつと笑う。

武士にとって、自ら負けを認めるのは屈辱的なこと。

それを優は狙っていたのだ。

ちょび髭は悔しそうに歯を食いしばり、そしてその場に手を着いて、苦しそうに呟いた。

「私の……負けだ」

その瞬間、会場中から一斉に歓声と拍手が送られた。

優はふつと息を吐き、そして紬の方へと顔を向ける。

紬は心底ほつとしたような表情をし、拍手を送っていた。陽姫も同じようにその場でジャンプしながら拍手している。

優は嬉しそうに笑みを浮かべて、そして手を振って応えた。

優は見事ベスト4に入り、残る試合はあと2回。

次の相手はそこまで強くなく、城内の道場の門下生で、その中でも上位のものだったのだが、先ほどのちょび髭と比べればどうもなく、余裕で勝つことができ、難なく決勝進出を決めた。

同じように、ベスト8入りしていた佐祐も勝っており、次は決勝への進出をかけた試合が始まるうとしていた。

「優、まずは決勝進出、心から激励申し上げるぞ」

佐祐の試合がある会場へと向かいながら、紬がいう。

「ありがと。これで佐祐さんとの決着がつくな」

「うむ。優、絶対勝って、わらわの側近になっておくれよ」

その言葉を聞いて、優ははつきりとうなずく。

もう決めた。迷うことも無い。自分は、紬の側近になろう……。

そして二人は試合会場へと着いた。

なのだが……。

「佐祐様、頑張つて〜!」

「きゃー、佐祐様! こっち向いて!」

「佐祐様、かつこいい！」

会場からは若い女子達の黄色い声援が響き渡っていた。

前の方や周りはほとんどが女子達で埋まっている。その後ろに男たちがいるような感じた。

そのまた後ろで、二人は立ち止り、無言のまま見ていた。

なんか、入りづらいな……。

さすがは佐祐である。城内でも有名であるが、城下町では剣術とその美貌も有名で、かつこいい佐祐のファンは大勢いたのだ。

仕方なく、細の権限で、優たちは特別に前へと座る事が出来た。

いかにも特等席で、佐祐の試合は一望できる場所だった。

「佐祐！ 絶対勝つのじゃぞ！」

細が周りの歓声に負けなくらいの声で叫ぶ。

すると、佐祐は優たちの存在のい気づき、ゆっくりと近づいてきた。

「ん？ どうしたのじゃ？」

細は疑問の表情を思い浮かべる。

佐祐はそっと優の前に立った。

「優殿、決勝進出、心から激励申し上げます」

「いえ。……心配しないでいいんですよ？」

優は口元を緩ませる。同じように、佐祐も笑った。

「もちろん。決勝は、私と優殿の試合だ。誰が相手でも、邪魔はさせん」

そう言い残し、佐祐は試合会場に戻っていった。

優は信じ切っていた。これで佐祐との決着がつく。そして、勝つて紬の側近になると。

しかし、そう上手くはいかなかった。

「……佐祐」

紬は口元を抑え、目の前の状況を凝視する。

「佐祐さん……」

優も思わず呟く。

今日の前で何が起きているのか、理解できなかった。

周りにいる女子達も、最初までの勢いは消え、沈黙し立ち尽くすものや、その場に膝が折れ、泣き崩れるものもいた。

佐祐は頭から血を流し、そしてふらふらの足取りをしながら立っていた。

相手は灰色の男ものの着物を着ており、大きな藁帽子をかぶり、そして目には刀で切られた傷。

そこから覗く鋭い眼は、まるで狼のようで、じっと佐祐を捉えていた。

「くっ……」

佐祐は竹刀を握り、構える。

ここで負けるわけにはいかない。決勝に行くのは……私だ。

「うおおおっ！」

佐祐は突進のごとく、間を詰め襲いかかっていく。

相手は竹刀を地面に着きながら、軽く嘆息した。

「もう終わりだ……」

男は下から片手で竹刀を振り上げ、それと同時に佐祐の竹刀も天高く上がっていく。男はそのまま竹刀を振り落とし、佐祐の頭に叩きつけた。

頭を強打した佐祐はその場に倒れ、そして動かなくなった。

「さ、佐祐……。佐祐！」

紬は立ち上がって佐祐の名前を何度も叫ぶ。しかし、佐祐はぴくりとも反応せず、未だに横たわっていた。

「佐祐！」

紬は試合会場に入り、佐祐のもとによる。

「大丈夫か？ 意識はあるか？ おい！ 早く治療するのじゃ！」

試合は終わり、佐祐さんは門下生の肩に捕まり退場していく。

優はその場に立ち尽くしたまま、佐祐の行方を目で追っていた。

どうしてこんなことになったのか、何も分からなかった。

唯一わかるのは、佐祐さんが負けたということ。そして、重傷を負っていること。

優はぎゅっと拳を握り、怒りを抑えて行く。

やっと決着がついたんだ。決勝で戦うはずだった。なのに、無残にも潰された。

佐祐を倒したあの男に……。

優はゆっくりとその場に立っている男に鋭い目を向ける。

男は視線に気づき、そつと後ろを振り返ると、不気味にニヤツと笑みを浮かべた。

十二話 決着と優勝

佐祐の決勝へと進むための準決勝は、思わぬ波紋を生み、一人の男によって閉ざされてしまった。

その男は、まるで一匹の野生の狼のように、ぬらりと現れては、鋭い牙で獲物を食い殺し、そして勝利の優越感に浸っていた。

優は怒りの籠った目で、じっとその男を睨みつける。

男は不気味に笑みを浮かべながら、優の目を捉え対峙する。

「優！ そなたも早く来てくれ！」

佐祐のそばにいる紬が声を上げて呼んでいる。

優は最後まで男を睨み、そして急いで佐祐のもとへと駆けて行った。

佐祐は試合会場から出て人のいない所に寝かされた。

「佐祐！ おい、大丈夫なのか！ 佐祐！」

紬は焦った声で叫びながら、何度も佐祐の体を揺すっていた。その隣に優もかけより声をかけた。

「佐祐さん。大丈夫ですか？ 佐祐さん！」

医者は急いで消毒し、そして止血をして包帯を巻く。

そのとき、佐祐がゆっくりと口を開いた。

「あ……、う……、す、優……殿……」

「佐祐さん」

佐祐は小さく目を開け、優の顔を捉える。

「佐祐さん。俺はここです。何が言いたいんですか？」

佐祐は目に一筋の涙を浮かべ、小さく呟いた。

「……す、……す……ま………な……い……」

「え？」

佐祐さんはそのままゆっくりと目を閉じてしまった。

「佐祐！ 佐祐！」

紬は何度も叫び、体を揺する。

優は唇を噛み締め、ぎゅっと固く拳を握った。

最後の佐祐さんの言葉が胸に沁み込み、滲み出てきそうな涙を堪えた。

優はすっと立ち上がると、佐祐に背を向け歩いて行く。

それに気づいた紬が声をかけた。

「す、優……。どこへいくのだ？」

「……試合場だ」

優は怒り任せにバンツと竹刀を地面に叩きつけた。

「あいつを、ブツ倒してやる……」

怒りの籠った優の目。そして猛獣、虎のような気配を纏いながら、
ゆっくりと歩いていった。

日向統一戦はとうとう決勝戦を行おうとしていた。

試合会場はいろんな人で集まり、殿やちよび髭はもちろん、上級武士などや、城下町の人たち、そして紬、陽姫、雲も見に来ていた。

優は目の前にいる対戦相手を見た。

藁帽子で良く顔が見えないが、灰色の着物を着て、腰には竹刀が備えられている。

そしてゆったりとした感じで立ち、獲物はまだかと狙っているその雰囲気は、まるで狼そのもの。

優はぐっと奥歯を噛み締めた。

本来なら、そこには佐祐さんがいたはず。ここで試合をし、どちらが上か決着をつけるはずだった。

なのに、こんなやつに邪魔されて……。

優はぎゅっと竹刀を力強く握る。

そのときだ。

「肩に力が入ってますわ、優様」

その声を聞き、優はさっと後ろを振り返った。

そこにはやはり霰がいた。

「そんな状態では、勝てる試合も落としますよ」

霰は優雅に微笑む。優はさっと背を向けた。

「あいつのせいで佐祐さんはやられた。俺が仇を討つんだ」

すると霰はクスツと笑った。

「さすがは優様。勇敢なお心ですわ」

すると、そつと優の肩に手を置き、優しく抱きついてきた。

「しかし、そんなに力んでは、十分な力は出せませぬ。もっと力を抜いてください」

雲の声が耳元で聞こえる。優の頬は赤く染まり、そして体は緊張していた。

「ふふ。これで大丈夫ですわね」

雲はすつと離れる。優はゆっくりと振り返った。そこにはいじわるそうに笑う雲がいる。

「今のことは、姫様には内密にお願いします。それでは、勝ってくださいまし、優様」

そう言い残し、雲は観客席へと消えて行った。

優は呆然としながらその後ろ姿を見送っていた。

なぜあんなことを……。でも、確かに余分な力は抜けたかもしれ
ない。

そのとき、いきなり後ろから陽姫が抱きついてきた。

「お兄ちゃん！」

「うわっ、陽姫ちゃん！ 危ないよ」

優は何とか陽姫を支えるとそつと地面に降ろした。

すると、陽姫は少し目を赤くしながら懇願してきた。

「お兄ちゃん。絶対勝って、あの人を倒してくれ。佐祐殿の仇を討
つてくれ」

陽姫の真剣な表情を見て、優は優しく頭を撫でてやった。

「ああ。まかせろ。絶対勝ってやる」

「うむ！ 頼んだぞ！」

陽姫は満面の笑顔を見せ、大きく手を振りながら戻って行った。

すると、タイミングを見計らったように、次は紬がやってきた。

「優……」

優は紬に向き直った。紬は少し暗い表情で、視線を下げていた。

「本当なら、佐祐との決勝だったのにな。すまないが、我慢してくれ」

「ああ。わかってるよ」

「あと、この試合に勝てば、そなたはれっきとしたわらわの側近となるのじゃ……」

「ああ。そうだな」

「うむ。だから、そのために試合に勝ってくれ。……本来は、そう言いたいんじゃないがな」

紬は除々に目を潤わせ、大粒の涙を流しながら、口を開いた。

「頼む！　こんなこと、一国の姫がいうことではないのじゃが、…
…佐祐の仇を討ってくれ。あやつに勝って、佐祐の無念を晴らせて
やってくれ！」

紬は最後は震える声で懇願する。

優は紬の肩を掴み、顔を上げさせた。

「優……」

「大丈夫だ。俺が勝つ」

その自信に溢れた表情に、紬は笑顔でうなずき返した。

「うむ！」

紬は胸を張って優から離れて行く。

優は握られた自分の拳を見つめた。

勝たなくちゃな……。

「両者前へ！」

審判の声が響き、優は顔を上げるとそっと目に出る。それと同時に
対戦相手の男も前に出る。

優はじっと睨みつけ、男はへらへらと笑っていた。

すると、男が突然話しかけて来た。

「うらやましいな。そんなに仲間がいて」

優は黙って聞く。

「おっと。自己紹介がまだだったな。俺の名前は狼牙^{ろうが}。貧しい家で生まれた汚い男だよ」

「……優です」

優は冷たい口調で軽く自己紹介する。

「へへ。姫様の側近だっけ。いや、この試合で勝ったらか。悪いな、優殿」

狼牙は笑みを浮かべているが、鋭い目つきで睨んでいた。

「勝つのは俺だ」

その目に負けないよう。優もにらみ返した。

「残念ですが、勝つのは僕です」

そして審判が手を上げて声を上げた。

「始め！」

二人は始めの合図で走り出した。

そして激しい竹刀のぶつかり合いが続く。攻め、守り、避け、動き、読み、これの繰り返し。

狼牙もなかなかの腕前で、二人の剣さばきは互角。なかなか一本取れなかった。

二人は離れ、リズムを取り戻しながら睨みあう。

「へへ。やるね。じゃ、これはどうかな」

狼牙は不敵に笑い、半歩足を下げると、すっと竹刀を振り上げた。

その構えは、あの佐祐を苦しめた動作。

そう。剣道でいう上段の構えだ。

「ふふ。これをどう攻略するかな」

優は竹刀を中段に構え、集中力を上げる。

「いくぞ」

そのときだ。二人の間はそれなりにあつたにもかかわらず、狼牙の竹刀は長く伸び、優の頭めがけて振り降ろしてきた。

優はすぐに竹刀を上げて防ぐことに成功する。

「やるね。良い動きだ。そうこなくっちゃ」

狼牙は元の構えに戻すと、また遠くから振り落として来る。

狼牙の上段は左手を軸に構え、その左手一本で伸ばして打ってくる。身長があり、手足が長い狼牙にはぴったりの構えだ。

スナップを利かせ、すぐにパツと戻ってきては、素早く再び襲いかかってくる。

優は何とか前に進もうとするが、何度も襲いかかる狼牙の攻撃を防ぐ一方で、なかなか反撃することができない。

そのときだ。

「ほら、がら空きだ」

そこで優は焦りを感じた。

まさか上段からここに来るとは思わなかった。上段は上に構えるので、下からの攻撃は難しい。

にもかかわらず、狼牙は途中で軌道を変え、面ではなく突きをしてきた。

しまった……。

ズバツ！

「くっ！」

優はかろうじて首を反らして避ける。しかし、かすってしまい、

首の皮がむけ、血が滴り落ちていた。

「優！」

紬が声を上げる。

優は首の痛みを手で抑えて耐える。出血がひどく、制服の白いシヤツが赤く染まっていく。

「へへ。痛そうだな」

狼牙は不気味に笑みを浮かべる。優は息を荒げながら立っていた。

「いいね。その顔。ほら、もっと苦しめよ。もっともがけよ！ もっと俺を楽しませてくれよ！」

すると、優はふと笑みを浮かべた。そして竹刀を構え、口を開く。

「そうだな。そろそろ終わりにしよう。これで、決着がつく」

「ふつ。さすがにその傷はひどいだろ。これで俺の勝ちだ」

「確かに出血はひどいさ。でも、最後は間違ってるぜ」

「なに？」

優は集中力を研ぎ澄ませ、狼牙を睨みつける。

「勝つのは俺だ！」

優は力強く踏み込み前に出る。

「片腹痛いわ！」

狼牙は上段から竹刀を振り落とし攻撃をしかける。

優はその攻撃を防ぎ前に出る。そして懷に潜り込んだ。

「ふん。それがどうした。ここからだって攻撃できるんだぜ！ そんな近距離で攻撃できるのかよ！」

狼牙は振り上げた竹刀を降ろして来る。その軌道は優の頭に向かっていた。

「優！」

「お兄ちゃん！」

「優様！」

紬、陽姫、雲が叫ぶ。

優は目を光らせ、そして竹刀をすつと振り上げた。

「うおおおおお！」

優は右足を一步下げる。そして竹刀をおもいきり振り落とした。

ズバッ！

二人の竹刀の軌道が終わりへと向けられた。二人とも竹刀を降ろした状態にいる。

そして一步も動かず、微動だにしない。

紬は呆然としながら、つい呟いた。

「逆胴……」

優の技、それは通常の胴を逆から打つ技。対上段戦に使える技の一つだ。

そのとき、狼牙が先にゆっくりと動き出し、後ろからその場に倒れた。

審判はそっと狼牙の表情を窺う。狼牙は白目をむいて倒れていた。

すると、優は竹刀を落とし、ふらふらになりながらも、頭から血が滴り落ちて、その場から倒れることはなかった。

「勝者、優殿っ！」

その瞬間、周りから歓声がいつきに絶頂にまで上げられた。

耳がつんざくほどの観客たちの声に優はようやく我に帰る。

やった……。勝った……。俺は、勝ったんだ……。

優はぐっと拳を握る。そして小さく、拳を突き上げた。

「優！」

その瞬間、後ろから紬がおもいきり抱きつき、優は激しくその場に倒れた。

「あれ？ 優！」

紬はあまりに優が虫みたいに弱く倒れるので慌ててしまった。

「大丈夫か？ おい！」

「いってゝな。少しは優しくしてくれよ」

「優！」

優の無事を確認し、もう一度強く抱きつく紬。

「良くやった。ほんとに良くやったぞ」

紬は目じりに涙を浮かべながら感激する。

優は目を細め、そしてずっと優しく抱き返した。

「ああ……」

「お兄ちゃん！」

すると、紬の後ろから陽姫が抱きついてきた。

「お兄ちゃん、見事だったぞ！ わらわはますますお兄ちゃんが欲

しくなった!」

「そ、そうか、ありがとう……」

優は苦笑いを浮かべながら答え、二人を離し、起き上がる。

そのとき、目の前に佐祐さんを見つけた。門下生の肩を借り、こ
つちを見て、良くやったとうなずく。

「佐祐さん……」

優も強く頷き返す。

「さ、表彰式じゃ。優、前に来い」

「ああ」

紬に呼ばれ、優は前に出る。観客たちが見ている中、紬は一つ咳
払いをした。

「おっほん。それでは、優殿。ここに、日向統一戦で輝かしい成績
を残したことを、ここに表彰するぞ」

「ありがとう」

優は紬から有難い言葉を頂く。そして周りから満場の拍手が送ら
れた。

優は照れ笑いを浮かべながら軽く頭を下げる。

「おめでとつござます、優様」

霽が柔らかく頬笑みながら近づいてきた。紬は近くでぶすっとながら無視する。

「ああ、霽さん。ありがとう」

「さすがですね。わらわはきつと勝つと信じてました」

「そう？　ありがとう」

すると、霽はそつと優の顔に触れ、下から見つめて来る。その行為のせいで優の顔は赤くなってしまった。

「え、えと……、霽さん？」

「優殿、わらわは決めたぞ！」

「え？　なにが？」

霽はニコツとほほ笑むと大胆なことを言い出した。

「優殿。わらわと契りを結ぶのじゃ」

「ええええ——！」

その言葉に一番に反応したのは紬だった。

契り、それは結婚の意味。つまり、霽は結婚してくれとポロポロズしたということになるのだ。

優は混乱し、ただ茫然とその場に立ち尽くしていた。

十三話 側近と契り

日向統一戦も終わり、また元の生活に戻ってしまった。

優は見事優勝し、会議の結果、誰も否定することなく、正式に紬の側近として認められた。

ちよび髭も悔しそうにしていたが、優の力量は直に知っているの
で、認めざるを得なかった。

佐祐は紬の側近から外され、大将の一人として、戦での活躍を期待された。

全てうまくいき、紬は満足気に笑みを浮かべていた。

しかし、解決すべき難題はもう一つあることを、忘れてはいけ
ない。

紬の側近のなった優は、毎日側にいて勤めを果たしていく。

側近と言っても、紬を守るボディガードのようなもので、大して
忙しい仕事はなく、また何も無ければ暇になる。

たまに紬からの無茶な依頼があるのだが、ある意味それが一番きつ
い。

佐祐は傷も何とか癒え、今では元気になり、道場での稽古や大将
として大いに張り切っていた。

優もまだ佐祐との決着をつけていない。そのために、日々怠ることなく素振りをする。

今日も、優は庭で真剣を握って素振りをしていた。縁側では暇そうにぼーっと見ている紬がいる。

一国の姫が、そんな調子でいいのだろうか。

優は一休みしようと、手を休める。

そのとき、後ろから声が聞こえた。

「優様」

その声に優は体に緊張が走るのがわかった。

穏やかな口調に、綺麗な声、そんな人は一人しかいない。

優は苦笑いを浮かべながら振り返った。

やはりそこには上級武士の子、雲がいた。

「やあ、雲さん……」

「優様、汗をかいてますわ。さ、これをお使いまし」

「あ、ありがとう」

優は受け取ろうと手を伸ばす。しかし、雲はそうさせなかった。

「いえ。優様が自らする必要はありませんわ。わらわはして差し上げます」

「え？ いや、いいよ。そんなこと悪いし……」

「遠慮することはありません。それでは、失礼します」

雲は半ば強引に手ぬぐいで汗を拭く。優は嬉しくもあるが、少し申し訳なくも想い、複雑な心境だった。

雲は満面の笑みを浮かべて、嬉しそうに汗を拭いて行く。

そんな二人の姿を、紬は激怒を抑え、体がふるふる震えても耐えていた。しかし、やはり我慢できなかった。

紬は立ち上がり、二人に近づいた。

「おい、優。そなた、何をしておるのじゃ……」

「え？」

そこで優は後ずさりした。紬の表情は笑ってはいるが、怒りのオラが滲み出ており、目が笑っていないかった。

「いや、その……」

「わらわが優様の汗を拭いて差し上げておるのです」

そこで雲が口を挟んできた。紬の怒りがメーターを飛び越えていく。

「そなたには聞いていない。口を挟むな」

「これは失礼。挨拶も遅れ、お詫び申し上げます。しかし、せつかくの交友を邪魔されたくはありません」

「優はわらわの側近だ。そなたには関係なかるう」

「いえ、大いに関係ありますわ。なにせ、優様は……」

雲は優の腕を掴み抱きついてきた。

「わらわの夫になる方ですもの」

「み、雲さん」

優は慌てて離れようとするがそうもいかず離れない。

紬は今にも怒りが爆発しようとしていた。

「み、雲さん。別に、僕たちは契りを結んだわけじゃ……」

そこで雲が泣きそうな顔になる。

「す、優殿は、わらわのことが嫌いなのか？ わらわだと満足できぬのか？」

「いや、そんなことはないけど……」

「なら良いではないか。そこまで恥ずかしがることもないぞ」

「で、でも……」

雲は強引に腕にぎゅっと抱きついてくる。そのとき、雲の胸が腕に当たっている感触があった。そのせいで、優の顔が赤くなるのがわかる。

それに気づいた紬は、そっと自分の方の胸を見る。

雲よりもなかった……。

パカンッ！

紬はグーでおもいきり優の頭を殴った。

「いってえ〜。なにするんだよ〜」

紬は腕を組んでふんと鼻を鳴らす。

「わらわは部屋に戻る。そなたも側近なら来い」

「わ、わかったよ」

「それでは優様。またお会いしましょう」

そういつて雲は上機嫌に戻って行った。

「ほら、いくぞ」

「いて！ いてててて！」

紬は優の耳を掴んで引つ張りながら、部屋へと戻って行った。

優は紬の部屋での説教を終えると自分の部屋に戻ってきた。なぜ説教されたのかわからないが。

「お兄ちゃん！」

部屋に入った瞬間、陽姫が抱きついてきた。

「うおっ！ 陽姫ちゃんいたんだ」

「うむ。お兄ちゃんと遊びたくてな。ずっと待っておったのだぞ」

「そっか。ありがとう。何して遊ぶ？」

「今日は英語を習いたいぞ」

「よし。それじゃ、給仕室にいこうか。あそこで英語の勉強をしよう」

「うむ！」

二人は手を繋ぎながら、給仕室へと向かった。

給仕室に入ると、その場にいた人たちは途端に礼儀正しくなった。

「これはこれは、陽姫様に優様」

みんなは深く丁寧に頭を下げる。以前は挨拶さえされなかったのに……。

姫様の側近になると、多少は偉くなるようだ。出世したな。

「今日はどういった要件で？ 何かお口に合うものを……」

「いや、今日は陽姫の勉強のためにきたんだ。邪魔はしないから、入っていいかな？」

「はい。それはもう、お気が済むまで」

「それじゃ、始めるよ」

「うむ」

優は手ごろなものを掴むと、その英単語を教える。

「りんごを英語で apple っていうんだよ」

発音に自信はないが、制服のポケットにあったメモとシャープペンで綴りを書いて見せる。

「あ、あぷ……。あぷる……。あつ……。ぶ……。る」

陽姫は口をぱくぱくさせながら発音しようとしている。意外と可愛かった。

「それじゃ、次ね。これはorangeだよ」

「お、お……おれ……おれんち！」

現代での自分家みたいな言い方になってた……。

「最後はジだよ。もう一回」

「お、おれ……れん……レンジ！」

電化製品が出て来たな……。

そこで優はふと思い浮かんだ。

「じゃあ、orange rangeって言うてみて」

「え、えと……おれんちれんじ！」

すっごい家だな……。

二人は給仕室を出て優の部屋に戻る。そこで次は英文の勉強だ。

その途中、優はある人物と出会った。

「ふふ。側近の他にも子供のお守りとは、大変ですね」

昼間からお酒を煽っており、縁側に座り込んでいる一人の男。

灰色の浴衣に、目には切り傷、決勝で優が戦った狼牙だ。

狼牙はその実力をかわれ、戦で活躍できるよう、雇われたのだ。中級武士として、この城に住むようになった。

優は少しぶすつとした感じに声をかけた。

「傷はもう癒えましたか？」

「ああ。もうなんともねーよ。それより、お前は未来から来たんだって？」

「……ええ。そうですけど」

「ふふふ。そんなことを、誰が信じるかな」

「信じる信じないは自由ですが、事実です。それでは、失礼します」

「おう。またやりあおうや」

狼牙は再びお酒を煽り、縁側に寝っ転がる。

優たちは部屋の中に入った。

「なんじゃ、あの者。だらしないの」

「気にすることないよ。さ、勉強の続きだ」

「うむ」

そこで陽姫はあることを思い出した。

「そういえば、お兄ちゃんは、姉上のことを真名で呼んでいたな」

「ああ。細が教えてくれたんだ」

「そうか。なら、わらわの真名も教えてやろう」

「え？ 陽姫ちゃんもあるの？」

「うむ。もちろんだ。わらわの真名は衣^{ころも}なのだ。お兄ちゃんは、特別にそう呼んでいいぞ」

「へえ。衣^{ころも}っていうのか。それじゃ、そう呼ばせてもらうね」

「うむ。それとな、父上に相談したのだが、お兄ちゃんは、正式にわらわの特別教育係となったのだ」

「教育係？」

「うむ。この国だけでは知れないことを教えてくれるのでな。是非、これからも頼むぞ」

「そっか。うん。わかった。俺で良かったら何でも教えるよ」

「うむ。ありがとう、お兄ちゃん」

そして、今日の勉強を終えた。

日が暮れた夜に、一人の男が部屋の中でそわそわしていた。

「くそ。最近何もなかったのに。とうとう来てしまったか」

「いかがされますか？」

「どうするもこうするも、すぐに殿に報告せねば」

「はっ。それでは、私はもう少し情報を集めてまいります」

「うむ。頼んだぞ」

「はっ」

一人の男は消え、部屋には武士が一人残る。

目の前のろうそくの淡い火がゆらゆらと揺れていた。

「そろそろあるかと思ったが、来てしまったか。姫様は苦しかろうが、仕方ない」

男は部屋から出て、夜空に浮かぶ月の光を浴びた。

「戦じゃ……」

十四話 戦と恐怖

今日も穏やかな日を過ごそうと考えていた優。

霽の件は今のところ保留（？）という形になっているが、毎日のように霽は優にラブコールを送ってくる。

そのたびに、紬は異様な怒りを見せ、最初は霽につつかるも、最終的にその矛先は優に向けられていた。

なんでこんなに怒るんだろうか……。

しかし、今日はそんなこともなく、優は紬、そして陽姫こと衣と共に勉学に励んでいた。

先生は優である。

勝手にできた未来学。

おそらくここでしかない学問だろう。

主に、この戦国時代と優の住む現代の違いの話をするのだ。

その変容と環境を学び、今後の生活や知恵に使ってほしいと考え、優は二人に教える。

二人と言っても、紬はただ茫然と聞いているだけで、自ら率先して受けようという姿勢はみえなかった。

そのときだ。いきなり襖が開かれ、息を切らしながら佐祐が入ってきた。

「勉強中失礼申す。姫様、戦ですぞ！」

その言葉を聞いた瞬間、紬の目が刹那のごとく変わった。

「状況は!？」

「詳しいことはまだ。今詮索中とのこと。今から会合を開くので、姫様も参加とのこと」

「うむ。わかった」

紬は勇ましく着物を翻し、部屋から出て行く。

戦……。

その言葉を聞いて、優はどこか不安の気持ちでいっぱいだった。

自分には戦国時代の戦というものを知らない。よく大河ドラマなので、そのようなシーンはあるが、実際には知らない。

興味がないといえば、それは嘘である。

しかし、戦は戦争と同じ。殺し合いの合戦。

戦争は現代でも嫌というほどではないかもしれないが、残酷で悲惨、そして関係ない人たちまでも飲み込む恐怖。

経験してなくても、その恐怖は容易に想像でき、そして自ら体験してみたいという者はいないだろう。

優はぐつと自分の腕を握った。

怖い。

自分の心の中はこの言葉で満たされていた。震えがだんだんと大きくなるのがわかる。できるなら今すぐにでも抜け出したい。

でも、自分はここから逃げるわけにはいかない。

なぜなら……。

「お兄ちゃん。戦だそうだ。わらわは戦は嫌いじゃ。……怖い……」

ぼつりと弱音を吐く衣。優の制服を引っ張り、そして最後には抱きつき顔をうずめる。

優は自分の恐怖を押し殺し、そして衣をそつと優しく抱きしめ返す。

「大丈夫。俺がいるから」

守らなければならない人がいるから……。

城内は今いつもより騒がしかった。

何人もの武士たちが甲冑に着替え、上級武士たちは集まり会合が増え、その他女子供は避難する。

準備ができたものからそれぞれの持ち場へ向かい、そして腹ごしらえをする。

その間、殿や紬、雲、雲の父親、佐祐、佐祐の父親のちよび髭などが集まり、作戦などを考える。

その中に優も入っていた。隣に衣もいる。

「敵の数は？」

紬の質問から会合が始まる。

「情報によると、その数5百ほどかと。敵は二つ山離れた九十九の国の輩かと」

雲の父親が応える。

「この領地を狙ってきたということか……。5百ならなんとかなる」

「陣形は？」

「いつもどおりで良からう。三つに分かれ、正面、左陣、右陣に別れ、相手の大将の首を取りに行け」

雲の父親が立ちあがる。

「それでは、作戦を申す。まずは、陣形は先ほどの。正面に佐祐殿、

左陣に善歳殿、右陣に基継殿。殿はいつもどおりに」

「うむ」

「殿をお守りするのは私が。あとは各々、各陣の武士たちに伝えよ」

「」「」おうつ」「」

「あと、姫様。もしものときは、すみませぬが、お願い申しあげます」

「……ああ」

紬は少し不安な表情であるが、力強く頷く。

「あと、狼牙。お主は……」

「待てよ」

雲の父親が言おうとするところで、狼牙は遮った。

「すまぬが、拙者は好きに動かせてもらう」

「なっ！」

「確かに戦に協力するとはいった。しかし、お前らと一緒にとはいつてない。俺は俺のやりかたであいつらを殺す」

そして狼牙はすつと優を見る。

「もちろん、お前もな」

狼牙は獲物を見るような目で優を見る。

「良かるう。好きにせえ」

「へへ。どうも」

狼牙は立ち上がると部屋から出ていった。

「うむ。ここから敵について。今敵陣はここから5キロ離れた場所で待機中とのこと、すでに自陣を張り、攻め入る刻を狙っているらしく。こちらの兵は皆持ち場にて待機中。今からこの作戦を伝達すること。では、これにて以上。誰か、何か申す者はおるか」

そこで優がすつと手を上げた。

「はい……」

「優……？」

「お兄ちゃん……」

「優様……」

「なんだ、申してみよ」

優は膝の上の拳を握りながら、そつと呟いた。

「どうして、戦なんてするんですか……？」

「はっ？」

今の発言でその場にいる全員が口を開き騒がしくなる。

「貴様！ 何をいつておる！ 易々とこの城を明け渡し、あいつらのいいなりになれと申すか！」

「違う！」

ちよび髭の言葉に反発し声を上げる。

「違う……。そういうことじゃない……」

「優……」

「俺の時代には戦が無い……。戦い、争うことはない。だって、戦ったところで、勝つても、負けても、何も得るものはないのだから……。だったら、しなければいいじゃないか……。こんなことして、何も意味なんてない……。同じ人間なんだ。きっと分かりあえるはずだ。言葉で解決できるはずなんだ。もっと、この時代が戦のない平和な時代になってほしい……」

「お兄ちゃん……」

「優様……」

そこで雲の父親が嘆息する。

「戦のない時代。私も見てみたいものだ」

優ははつと顔を上げる。

「しかし、それを聞いて、はいやめます、というものが何人おるとか……。別に私は戦が好きだから戦っているわけでも、人を殺すわけでもない。できるならしたくない。だが、私には守るものがある。そして、私にはやらなければならない役目があるのだ」

「……………」

「優殿といったな」

「……はい」

「そなたに一言だけいっておく」

雲の父親は鋭く睨みつけた。

「そんな甘い言葉を、今吐くな！」

「うつ」

そこで優は顔を下げ、うつむく。

たしかに今いうべきじゃなかったかもしれない。軽率だった。今の自分の発言で指揮が下がったら負けてしまう。

そんな夢物語を、この戦国時代でいっても無駄なのだ。誰にいうと、聞く耳持たないだろう。

「他に申すものはおらぬか？」

そこでちよび髭が答える。

「今疑問に思ったのじゃが、優殿は戦に参加せぬのか？ 優殿の実力は確かなもの。お主ならきつと活躍が……」

「ならぬ！」

ちよび髭の言葉に紬が声を上げて遮る。

「優はわらわの側近！ わらわに何かあったらどうする！ そのために優がおるのじゃ！」

「しかし、優殿の力を戦で起用したほうが……」

「ならぬ！ わらわは否定おるのじゃ！ 素直に聞けば良いのじゃ！」

「は、はあ……」

ちよび髭は少し腑に落ちないが紬の気迫に負けつなずく。

「殿」

「うむ」

殿は立ち上がり、最後に言葉を発する。

「出陣じゃー！」

衣や囊はすぐに安全な場所へと避難し、会合を終えた上級武士たちは持ち場へと急ぐ。

優は紬と共に天守閣の上、紬のお気に入りの場所へと向かった。

そこから戦場の様子を窺う。まだ始まっておらず、それぞれ持ち場で待機していた。

いつものような陽気で穏やかな雰囲気は消え、異様にピリピリとした気が張り付け、全身を襲う嫌な緊張がのしかかり押しつぶされそうだった。

紬のおかげで優は戦には参加しない。しかし、こちらが負ければ、どうなるかわからない。

いずれにしろただではすまない。現代では知らない本当の恐怖が今初めて感じられる。

優は苦しくしめつける鼓動を手で抑え、ゴクツと生唾を飲み込んだ。額に汗が流れ、こめかみへと伝っていく。

そのとき、紬が口を開いた。

「按ずるな」

はっと我に返った優は隣にいる紬に顔を向ける。紬は落ち着きの

ある声で優を励ます。

「お主は心配せずともよい。胸を張って立ちかまえておけ。わらわが守るから」

その言葉の意味が理解できなかったが、それはすぐにわかることだった。

どちらも動かず、じっと対峙し続け、太陽は昇り、優の時計によると正午を差していた。

そのとき、開戦の狼煙が上がった。

出陣だ。

「いくぞ！」

「迎え討て！」

お互いの陣から武士たちが一斉に出だし、とうとう戦が始まった。

槍を持った部隊が先頭を走り、その後ろでは鉄砲隊が構えている。他にも刀を持つ者が走り、馬に乗った大将たちが駆けて行く。

そして真ん中でお互いの陣が混じり、そこで戦闘が繰り広げられた。

お互いの総大将を倒すために攻め込み、刺し、切り、撃ち、押しつ

ぶしと、殺戮の連続。その攻撃は怠る事を知らず、少しの油断で終わってしまう。

これが……戦。

これが……戦争。

目の前で繰り広げられている現状に、優は戸惑い、困惑していた。そしてその場にガタッと崩れ落ちた。

「優！」

戦の状況を見ていた紬が寄り添ってきた。

「……なんで？ どうして戦うんだよ……。こんなことして何になるんだよ。皆平和に暮らせばいいじゃないか……。仲良く暮らせばいいじゃないか……。人間だろ……。知恵があるだろ……。感情があるだろ……。だったら……。こんなこと……。殺し合うなんて、やめろよ……。」

優の声は震え、体は冷気を纏っているかのように冷たかった。

「優……。」

紬はそっと優を引きよせ、優しく包むように抱きしめた。

「優の世界では、このような戦がないのじゃな。良い世界じゃ。しかし、この世界では戦いが全て。天下を獲るには、守るためには、戦わなければならない。自分の欲求のために動く人間など、末路は戦うことしか頭がない。これが、避けては通れぬ現実じゃ。」

優は頭を抱え、嗚咽を漏らす。

人が死ぬ直前の叫び声、断末魔、そして鉄砲や大砲の飛び交う音。想像するだけで十分だった。神経が異常になってしまう。もうダメだ……。

紬は少し焦りを感じた。

こんな優の姿を見たことが無い。やはりいきなりの戦の経験は神経を蝕む。

一度平和を経験しているものが、いきなりこのような現状を目の当たりにすれば当たり前前だろう。

一刻も早く終わらせねば……。

「按ずるな、優。わらわがおる。絶対に守る。そなたを苦しめたり、死なせたりはしない。だから安心しろ。そして……その心を、忘れてはならぬぞ」

紬はすつと立ち上がり、今の状況を確認する。

今の形勢はこちらがやや不利。若干おされぎみである。小さな国なので仕方がない。

しかし、こちらには奥の手がある。

「そろそろじゃな……」

紬は近くにいた武士にいった。

「佐祐に伝えよ。……不知火を使うと」

十五話 紬の力と秘密

紬が何か作戦を言い渡し、下級武士は急いで階段を降りて行く。

「これで終わりじゃ……」

紬は小さく呟き、精神を集中させ、心を落ち着かせる。

「しらぬい……」

この言葉は何を意味するのだろうか。今から紬は何をしようというのだろうか。

そして数分し、自陣から笛が鳴り始めた。ゆったりとし、そして力強い汽笛のような音。

その音を聞いた瞬間、一斉に自陣の軍が不穏な行動をし始めた。

皆戦うことを止め、次々に退避していくのだ。

その行動に懸念を抱き、敵陣はその場で立ち尽くす。

優もどうしてこんな行動を取るのかわからなかった。

「優……」

紬が呟き、優は顔を向ける。

「今からすることはとても残酷で悲惨なものじゃ。先ほどの殺し合

いの比ではない。できればそなたには見せたくない。しかし、それでも見たいならかまわぬ。どうするかはそなたが決めるのじゃ」

優はごくつと喉を鳴らす。冷や汗が止まらない。

いったい、今から何をするのだろうか……。

その頃、佐祐は自陣で皆が戻ってきたことを確認する。

「よし、皆退いたな。……姫様、すみませぬ……」

佐祐はそつと手を上げた。それを合図に、皆弓矢を持って空へと向ける。

佐祐はバツと腕を振り落とした。

「放てっ！」

その瞬間、自陣から一斉に矢が飛びだしてきた。

その数は数えきれないほどであり、生き残った武士全員が放った矢。

その数は容易に五百は越えているだろう。

そのときだ。

「いくぞ、優……」

「え？」

すると、紬の体が突然赤く光り始め、オーラを纏ったかのようにゆらゆらと立ち昇っていた。

そして紬は右手を伸ばした。そこから赤い光が放たれ、先ほど放たれた矢へと当たる。

そしてその矢はさっきよりも倍以上の数になり、確実に敵に向かって飛んでいた。

地面に突き刺さる直前上昇し、目の前の敵に突き刺さりもする。

生き残っていた敵は皆矢による負傷で死に至り、そして誰も立っていないかった。

そして、気づけば、すでに戦は終わっていた。

「なんだよ、これ……」

「……これがわらわの力の一つじゃ……」

優は紬に目を向ける。紬はどこか悲しげな眼をしていた。

「わらわは気づいたときからこのような不思議な力が使えるようになったのじゃ。攻撃の力、名を不知火という」

「不知火……」

そこで優はハッと思い出す。

あの巻物に書かれていた文字。それはこのことだったのだ。

紬はふつと息を吐く。

「これで、戦は終わりじゃ」

そのとき、戦の終わりを告げる笛の音が静かに鳴り響いていた。

戦が終わると、紬は急いで負傷者の下へと走っていく。

戦で怪我したものは皆城内へと運び込まれるのだ。

その後ろを優は追いかけて行く。

負傷者たちは道場に運び込まれていた。

多くの武士たちが痛みに耐え、命からがら生き延びている。しかし、中には死亡した者もいた。

すでに多くの医者たちが応急手当をしている。忙しそうに動き回っていた。

「姫様！」

「姫様……」

「ひ、め……さ、ま……」

皆助けを求めるかのように声を発する。

すると、佐祐が紬に近づき片膝について頭を下げる。

「姫様。申し訳ありませんが……」

「うむ。わかっておる。一番傷の深いものから来られ！」

紬は傷の深い武士の下へと行く。その姿を優は後ろで見ていた。

「お願いします」

佐祐がいうと、紬はそつと両手を差し出した。

すると、突然手のひらから淡い青い光が瞬き始め、そして痛々しい傷がどんどん治癒していく。

「すげえ……」

優はつつ立つたまま呆然と見ていた。

医療器具や薬も使わず、あつという間に不思議な力で治していく。

これが紬の力なのか……。

「これが、わらわのもう一つの力、名を明鏡止水という……」

明鏡……止水……。

その力で紬は、その場にいた負傷者全員の傷を癒してしまった。

それから数日の間、紬は自分の部屋ですっと眠っていた。

食事の時間になろうとも起き上がろうとせず、息はあるのだが、まるで死人のように微動だにせず横になっている。

優はずっと紬の側にいた。毎日、紬が目覚めるまで居続けた。

何度も襖や衣が様子を見に来たが、二人だけにしてほしい、と伝えた。

そのときに知ったのだが、佐祐さんというには、紬は優が山賊で襲われたとき、この力を使って頭の傷を癒したそうだ。だからどうもなかったのだ。

優はじっと紬の寝顔をのぞき込む。良く見ると、やはり紬は可愛かった。

サラツとした長い髪、白い肌にパツチリとした瞳。小さな唇。現代ではすごくモテるだろうと思われるほどの美少女だ。

優はそっと紬の手を握った。

早く起きて欲しかった。話したいこと、聞きたいことは山ほどある。

まずは礼をいおう。今回は優は紬に励まされてばかりだった。ありがとう、と心を込めて伝えよう。

そして約束しよう。今度は自分が紬を守ると。

優はそつと紬の手を擦る。

綺麗ですべすべとした手だった。でも、なぜか冷たかった。

「紬……」

そして一週間後、ようやく紬は目を覚ました。

いきなり多くの栄養を取るのは悪いので、少しずつ食べて行き、だんだんとその量を増やしていく。

そして三日ほどして、ようやくいつもの紬へと戻った。

しかし、優と紬はどこか様子がおかしく、いつものような仲でなくなっていた。

そして、優と紬は天守閣に登っていた。

そこから見える景色を眺める。今は雨が降っており、山の方は霧が濃く見えない。

目の前にある景色はつい数日まで戦が行われていた場所なのだが、今ではあのと時の面影はなく、閑とした静寂に包まれていた。

まるで何事もなかったかのように……。

しかし、ずっと目を閉じれば、あの時の現状が浮かび上がり、その叫び声が、合戦の音が、頭の中ではつきりと響いていた。

二人はただ無言でその場に立っていた。

少しして、紬がポツリと呟いた。

「……もう、大丈夫なのか？」

優の精神状態を心配していったのだろう。

「……ああ」

「……お主はいろいろ苦しい目にあってしまったな。……すまない

……」

「……いや、紬が謝ることはないよ。俺が弱かっただけだ……」

「……聞かぬのか？」

「……」

「……わらわが、なぜあのような力を持つておるのか」

「……無理には聞かない。紬が話したいなら、話してくれ……」

「……では、話そう」

紬は決意をする。

「この力は、わらわが生まれたときからあったのだ……」

紬は上級武士の子として生まれた。

殿の側近と武士の中でも特に上の位の父を持ち、そして国一番と言われるほどの美人といわれた母の下で生まれ、そして妹の衣も生まれ、家族四人、仲良く暮らしていた。

そして同じ上級武士の子である佐祐、そして囊とも知り合い、幼馴染として友達もできた。

しかし、その幸せも束の間のことだった。

ある時、城内はある事件で騒がしかった。

殿の間に子は生まれないという事実だ。

一国の跡取り、殿の子が生まれないというのはどういふことか。それはその国の滅亡に等しい。

殿の息子、姫の役目は国の繁栄。この国を後世に残すため、そして領地を増やし、規模をでかくする。

他にも、もっとすべきことが、娘は他の国の殿の子のもとに嫁ぐということだ。そのために生まれて来たといっても過言ではない。

そのための子が生まれないなど、前代未聞かもしれない。

しかし、それが現実になってしまった。

そして、自分の妻に溺愛している殿は、自分の妻を裏切ることはいたくなく、他の女と結ぼうという願望はなかった。

そこで、上級武士から養子として引き取る計画を立て出した。

その候補の一人に、紬も入っていた。

周りでは国一番に偉くなれるので、他の上級武士はともうれしそうにしていた。

しかし、紬は自分の本当の親が好きで、確かに殿にはお世話になり、優しくもらっているが、いきなりその人を自分の親と認めることはできない。

やはり、自分は乗り気ではなかった。

そんなときに、戦が起きてしまった。

殿に子がないことが風の噂で広まり、隣の国が奇襲をかけてきたのだ。

その戦にはもちろん紬の父親も参加している。

そこで、最悪なことが起きたのだ。

紬の父親はその戦で死んでしまったのだ。

紬は毎晩、いや毎日のように泣き喚いた。

父親の死が認められず、何度も否定し続けたが、現実是不変である。結局戦にも負け、紬の国は隣の国からの侵略が始まるつもりである。

紬は自分の父親の死から怒りが生まれた。

そして、力が発動された。

その結果、紬は一人で隣国の武士たちを倒し、父親が守った国は再び元に戻った。

だが、紬はこれで少なからず満足した。

仇は討った。父親が守りたかったものは代わりに守った。大好きな母も、そして衣も無事に生きている。

しかし、地獄が始まってしまった。

紬の不思議な力。

そのせいで、紬の母親は紬を鬼の子だと思い、何と、紬を捨てたのだ。

そのことで、紬は精神的苦痛を味わうことになった。

大好きだった母親からの突然の裏切り。それは幼い子供にはとても残酷なことだった。

父親も、母親も無くなった紬。

そして、紬はその力を評価され、殿の養子となった。

それから数日して、紬の母親の容体が悪くなり、数日後には死亡。

よって、衣も殿の子として授けられることになった。

紬はその力を活かし、その後の戦に貢献しては活躍を見せ負けることはなくなった。

話し終わり、紬は重いため息を漏らす。そしてそつと目を閉じた。

「わらわは今複雑な気分だ……。この力で国を、そして皆を守ることができる。しかし、実の母上から鬼の子といわれ、捨てられた……。わらわの運命は、どうなっているのか……」

「紬……」

紬が殿とは血が繋がっておらず、養子だということは、以前佐祐から聞いていたので知っていたが、まさかその裏にはそんな事実が隠されていたとは……。

「……わらわは一国の姫となった。ならば、国のために勤めを果たせねばならぬ。わらわはそのために生きて来た……。だが、優が来て気が変わった」

「え？」

「国のためだけではない。たまには、自分のために生きてもいいのではないかな……」

「そっか」

そのとき、紬の目から一筋の涙が流れた。そして決意の眼差しを向ける。

「わらわはもう迷わない。この国の姫として、そしてこの力で守るじゃが、わらわは一人では生きて行けぬ」

紬はそつと優に手を差し出す。

優は少し戸惑った表情で紬を見た。

紬は柔らかく、そして優しく微笑んだ。

「お主の力をわらわに貸してくれ。わらわは国を、そしてお主はわらわを守る。それが、わらわたちの契約だ」

優はふと笑みを浮かべた。

「守ってやるさ。ここまで来たんだ。とことん、わがままな姫様に着いていくさ。……ありがとう、紬……」

優はそつと紬の手を掴み、そして固く握手を交わした。

十六話 髪型と雲

戦の件は終わり、優と紬は以前よりも仲が深まった気がした。

主と側近という関係であるが、それよりも親友といった方が納得できそうな感じた。

二人は常に一緒におり、子供たちと楽しく遊んだり、泉で自然を満喫したり、市場で買いい物をしたりなど、まるでデートのように充実した日々を送っていた。

紬は優と一緒にいるだけで、とびっきりの笑顔を見せ、楽しそうに子供のようにはしゃいでいた。

一国の姫であっても、まだ17の女の子である。遊びたい気持ちもあれば、やりたいこともたくさんある。

戦国時代の姫なら、こんなことしてる場合ではないのだが、優はそんなことよりも、もっと自分の人生を、今という自分の時間を楽しんで欲しいと思った。

それが自分にできるなら、少しでも協力してやりたい。

そして、二人は城から少し離れた場所に訪れた。

今二人の前には一つの立派な墓があった。

これは、紬の本当の両親の墓だ。

「ここに来るのも、久しぶりじゃな……」

紬は綺麗な花を添えて手を合わせ目を閉じる。

優も隣で同じように目を閉じた。

両親がいなくなり、そのせいで姫となったが、こうして出会う事ができた。そのことには感謝したい。

でも、どうか紬を、衣を、見捨てないでほしい。これからも、二人の親として、天国で見守っていてほしい。

優はそつと目を開け、未だに目を閉じている紬に顔を向ける。

これからは、自分が守ろう……。

「今日は俺の時代の遊びをするぞ！」

優が胸を張って高らかに宣言する。部屋には紬、衣、雲の三人がいた。

紬は「ほう」と感心していた。

衣は嬉しそうにいつものように元気よくはしゃいでいる。

雲は優と遊べるのが嬉しくニコニコしていた。

「俺の時代ではことは全然違う遊びがたくさんある。せっかく俺

がいるんだし、いろいろ教えてやろうと思ってな」

本当は、この遊びで楽しく過ごし、少しでも戦のなどの苦を忘れてほしくて計画したのだ。

「まずは、皆女の子なんだし、俺の時代の女の子はどんな感じなのか紹介しよう」

優はポケットに入っていた携帯を取り出した。まだ電池があり、電源はまだ点く。

その中のピクチャから写真を見せた。クラスメイトの写真を見せる。

「なんじゃ、これは。まるで本物のような、完成度の高い絵じゃの」

「なあ、お兄ちゃん。この模写の女子はなんじゃ？ 変な髪をしてるんだな」

「未来にはこんな機械があるんですね。是非とも使ってみたいですわ」

優はコホンと軽く咳払いをする。

「ええと、この写真のように、みんなの髪型を変えてみよう」

「髪型をか？ じゃが、どんなふうじゃ？」

「俺にまかせろ」

優はまずは紬の髪から取りかかる。

紬の髪は腰まであるロングヘアで、手に触れてもわかるくらいサラサラとしていた。

そして優は自分の好みの髪型に変えて行く。

「よし、こんなものかな」

優は紬に手鏡を持たせる。鏡に映る自分の姿を見て、紬は驚いた。

「……なんじゃ、これは？」

「それはポニーテールっていう髪型だよ。馬の尻尾みたいだよ」

紬の髪型は長いのでポニーテールのようにしてみた。ゴムが無かったので、リボンで結んでおり、意外にも似合っていた。

「馬の尻尾じゃと！ 優はわらわを馬にしたいのか！」

「え？ いや、そんなつもりは……」

「一国の姫が馬ごときと対等などもつてのほか！ 討ち首にするぞ！」

といった感じに、紬はごりつぶくとなってしまった。

これはまずかったようだ……。

「似合ってると思うんだけどな……」

優はぼそつと呟く。

その言葉を聞いて、紬は拗ねているが、少し離れた場所で手鏡を持ってじっと自分の髪を見て考え事をしているようだった。

「お兄ちゃん。次はわらわにしてほしいぞ。わらわにも未来の髪型を教えてくれ！」

「いいよ。それじゃ、こっちに座って」

「うむ！」

次は衣の番である。衣はまだ幼い。だから、あれしかないな。

そして数分であつという間にできた。

「これでどうかな」

「わあゝ。これはかわいいの！　こんな髪型があるのだな！」

衣にしたのはツインテールである。左右の髪を二つに分け、リボンで結んでみた。

幼い感じの衣に似合っており、元気がり、可愛い感じにできた。

「まるで垂れたうなぎをつけているようじゃ。可愛く、くねくねするぞ」

衣は自分の髪を浮かんでぐるぐる回して楽しんでいる。

うなぎって、可愛いものかな……。

「優様、次はわらわにお願い致します」

雲がかしこまってお願ひする。

「ああ。いいよ。雲にはね……」

雲も紬と同じくらいに髪が長く、そして負けないくらいにサラサラとしている。

となると……。

「じゃあ、これはどうかな」

優はできるか不安だったが、やり方は以前友達に教わったことがあるのでやってみる。

「よし、なんとかできた」

「優様がしてくれた髪型……。なんと上品で、輝いているのでしょ
う」

雲は自分の髪を見てうっとりとしている。

雲にしたのは三つ編みである。後ろで編み込み、前に垂れ流す。おっとりとした雲には、まるで優等生のような感じに見えた。

「うん、なかなか似合っているよ」

「優様がしてくださったのですから、これからはずっとこのままですわ」

「髪洗う時戻すだろ……」

そこで優は携帯を取り出した。

「せっかくだし、皆で写真撮ろうよ」

「写真？ 写真とは何じゃ？」

離れていた紬が興味津々で聞いてくる。

「この携帯で絵を取るもんだよ。さっき見せたやつも、写真なんだよ」

「さっきみたいに？ あの完成度の高い絵のことか？」

「そ。ほら、みんなこっち来て」

三人は優の周りに集まる。右に紬、上に衣、左に雲が来る。

「それじゃ、いくよ。ほら、笑って」

優は四人が映るようにボタンを押す。カシャツという音がして撮れたようだ。

「ほら、みんな良く映っているよ」

みんな可愛らしく映っていた。紬は少し恥ずかしそうに頬を赤く

染めながらチラツと優を見ており、霏は優の腕を掴んでおり、衣は後ろから抱きついていていた。優は衣のせいで顔が下を向いていた。

そんな写真を見て、三人の顔色は一瞬で青くなった。

「優〜！　なんてことしてくれたんだ！　わらわが映っておるぞ！　魂を取られたのじゃ〜！」

「どうしよう〜！　もうすぐ死んじゃうよう〜！」

「まだ優様に何もしてないのに……。これでもう死が訪れるとは……」

皆各々騒がしく暴れ回っていた。

その様子を、優は呆然と見ながら、その場に突っ立ち苦笑していた。

普通に生きてるじゃん……。

今日も霏は優にラブコールを送っていた。

最近はそのがエスカレートし、時には部屋に押し入り、時には恋文を送り、時には入浴時に覗いてきたりと……。

気持ちはわかるが、ちょっと迷惑していた。

見た目はおっとりとし、気品があって優雅な振る舞い、そして余

裕のある態度と、大人びた感じでなかなかの美少女なのだが、考えはどうも理解できない……。

頭は紬に言わせればなかなか良いようだ。雲の父親は作戦を考える役のようだし。

あときはめっちゃくちゃ怒られたが……。

そこで、ちょっと雲のことを知ろうと思い、一日一緒に過ごしてみた。

「優様が自らわらわと一緒に過ごそうなどと申すとわ。これは、契りを結んだも同然。すぐに父上に報告せねば」

すぐに走り出そうとする雲を止めて優は強引に座らせる。

「よく考えてみれば、俺まだ雲のこと知らないからな。この機会、いろいろ知っておこうと思って」

「いろいろ？　ということとは……」

雲はぽつと頬を赤く染める。

「そんな、わらわのあんなところやこんなところも拝みたいだなんて……。優様は大胆なんですな」

「何考えてんだよ……」

ということ、雲の一日と一緒に過ごしていく。

雲は朝から忙しく、午前は勉強に書道、茶道、華道などの嗜みを学び、上級武士の娘として勤めを果たしていく。

忙しいのは姫である紬だけでなく、雲も同じくらい忙しそうだった。

隣で特別に同じようにやってみたが、まったくダメだった。

「さ、優様。午後からは城下にいきますわ」

優は雲と共に城下へと降りる。その途中、ある人物と出会った。

「あ、父上」

前から馬に乗った雲の父親が来た。そしてじつと優を見て来る。

「父上はもうご存じですわね。優様です」

「ど、どうも……」

優は苦笑しながら軽く会釈する。

そんな優をじつと睨むように見ていた。嫌な汗が止まらない……。

そして無言のまま前を通って行ってしまった。

「俺、お前の父親苦手なんだよな。以前めっちゃ怒鳴られたし」

「心配ご無用。あれは照れ隠しです」

「照れ隠し？ あれが？」

「はい。娘に男ができて、ちょっと拗ねてるけど、その反面嬉しいのですわ」

「そんなわけないだろ」

「いえ。父は、厳格な感じで皆の前では通ってますから、笑ってはいけないのです。だから、少し眉毛が動いてましたわ。あれは嬉しいという笑顔を堪えていたのですわ」

「いや、ちょっと待て。いつておくけど、俺と雲の関係はただの友人だからな」

「えええ！ そうなのですか……」

「いや、なんでそんな恋人なんですよって感じに驚いてるの！」

「ま、それより、早く城下に行きましょう」

切り替え早い……。

それから雲は城下であらゆる場所に通い、何かを記録していった。

それを終えるときは、すでに三時間以上が過ぎていた。

「雲はいろいろ回って何をしているの？」

「父の仕事の手伝いです。情報を取り入れているのですわ」

「情報？　どんな？」

「飛脚や商人はいろいろな町を散策してますので、その町での様子や行動などを聞き、我が国に影響がないかを知ります。不穏な動きがあれば、すぐに対処できます」

「へえ、すごいね」

「父はもつとすごいですわ。外には多くの友人がいて、その方から隠密な情報まで取り入れることができるのですから」

雲は記録書を見て嘆息する。

「私は、父と比べればまだまだですわ……」

雲はどこか遠いところに目を向ける。そして寂しげな表情をしていた。

「父は、わらわの一番尊敬できる人なのです。頭が良く、情報力にだけ、人望があり、ただの武士が上級武士まで上り詰めた。そして母上と契りを結んだ。その間に生まれたわらわは、父上に期待されている。女子でありながら、誰にも負けない力を得ると。その期待に答えるために、わらわは日々精進しているのですわ」

「そうなのか」

「その相棒、わらわの夫となるのは、優様が良かったのです」

「どうして俺が？」

「もちろん、優様はこの時代にはないものを持っています。未来と
いう情報力が」

霰は前に歩きながら話し続ける。

「未来の話はとても興味深いものばかりでした。わらわの知らない
ことがたくさんあり、そしておもしろい。その力を、わらわのもの
にしたかった」

「そういうことね」

「でも……」

霰は振り返ると、柔らかに頬笑みかける。

「わらわが優様に惚れた一番の理由は、その勇ましい振る舞いなん
ですよ」

「え？」

すると、霰はクスッと笑った。

「さ、早く城に戻りましょう。姫様が怒りますわ」

霰は上機嫌に城へと戻って言った。

やはり、紬は優がいなかったので心配したのか不機嫌だった……。
夜遅くまで、ずっと説教されることとなった……。

十七話 恋と始まり

紬は最近の自分の変化に気付き始めた。

最近、ふと優を目で追うようになり、優が側にいなければ落ち着かなくなった。

優がいるから毎日が退屈せず楽しく過ごせ、そして有意義に日々を送ることができる。

紬は天守閣の上で外の景色を眺めながらふと息を吐いた。

「わらわは、もしかして……」

紬は気づいてはいけないことに気づいてしまった。

それは、一国の姫が抱いてはいけない感情……。

紬は、優に恋していた……。

「あ、おはよう、紬」

優が廊下で出会った紬に爽やかに笑顔で挨拶する。

「う、うむ……」

紬は顔を合わせないように下を向き、小さくうなずく。

そしてそのまま通り過ぎてしまった。

「ん？　なんだ？」

優は紬の異変に気付いたが、首をかしげるだけにした。

紬は優が行ってしまうのを確認すると、廊下の端で胸を抑えていた。

今まではこんなことなかったが、いざ自分の気持ちに気づくと、こんなにもドキドキするとは……。

意識しすぎて、逆に変な感じだった。それにまともに優の顔さえ見れなかった。

「わらわらしくないな……」

そのときだ。

「どうしたのだ、姉上」

「え？　うわっ」

いつのまにか目の前には衣がいた。不思議そうな顔して覗きこんでくる。

「いや、なんでもない……」

紬はそのまま歩きだした。

食事の時間になり、優、紬、衣、囊と四人で食べていた。

さつきから紬はチラチラと優を見ては、頬を赤くしてうつむいていた。

その光景を囊はじとーっと見ていた。

衣はポロポロご飯をこぼしてしまい、優はやれやれといった感じに世話をしていた。

紬は端でつまんでいる煮物を見る。

これを落とせば、優も衣のように世話を焼いてくれるだろうか…。

しかし、紬は軽く首を振って止めた。

そのときだ。

「あっ」

ポロつと端から煮物を落としてしまった。

「おい、紬、落としたぞ、珍しいな」

優はクスクスと笑う。そして落ちた煮物を拾おうとした。

その顔と行動を見て紬は頬を赤くしながらキッと睨みつける。

「う、うるさい！ 子供扱いするな！」

「えっ？ あ、その、ごめん……」

優は申し訳なさそうにうつむく。

紬はふんとそっぱを向いてしまった。そして小さく嘆息する。

本当はそんなことをしてほしかったのに、逆に怒ってしまった。

紬はまた一つため息を吐いた。

霏は何か察したような表情になった。

食事が終わり、紬は部屋で一人重いため息を吐く。

そのとき、霏が部屋に入ってきた。

「入ります、姫様」

紬は無言で了承する。霏は向かい側に座った。

「二人つきりだし、昔のままでいいわね」

「……ああ」

霏はふっと笑みを浮かべる。

「あんだ、優様に恋わずらいね」

「なっ」

紬の顔が一瞬で真っ赤になる。

「な、なぜそんなことがわかる……」

「今日のアンドの行動を思い返せばすぐにわかるわよ。気づかないほうが無理だわ」

紬は小さく舌打ちをした。

一番気づかれないやつに知られてしまった……。

「それで、何が望みじゃ」

紬は睨みつけ、低い声で問いかける。

「ふふ。別に何もいらないわ」

「嘘つけ」

紬が冷たく言い放つ。

「ほんとよ。ただ協力しようと思ったのよ」

「なぜお主がそんなことをする。お主も優に恋わずらいじゃろ。協力したところで、何も利益はないぞ」

「ま、そうなのですが。そうですね、一国の姫の秘密を握られる
と思えば、それはそれで趣があると思いませんか」

「相変わらず嫌味なやつじゃ」

「ですが、一つだけ言わせていただくわ」

「なんじゃ」

「あなた、自分の立ち位置を把握してるの？」

その言葉がずっしりと重く押し掛かってきた。

そう……。本来はそれは許されないことだ。

一国の姫は国の存続や繁栄のために嫁ぐことが習わし。

しかし、それを紬は破って一人の男に好意を持とうとしている。

それは、国の裏切りに近いほどの罪深き行為。

紬はうつむきながら小さくうなずく。

「……わかっておる」

「そう。なら、責めたりはしないわ。でも、選択を間違えないで。
一つ間違えれば、あなたたちは国を追われる身になるのよ。一国の
姫のせいで、罪もない男が……殺されるかもしれないことを」

紬は雲の言葉に耳を背けた。

そんなことは最初から知っている。言われなくても、十分承知している。

でも、だからといって、この気持ちを消したくはない。

初めての、恋なのだから……。

紬は優の部屋へと歩いて行く。

さつきから心臓がドキドキして落ち着かないが、動かなければ何も始まらない。

紬は部屋まで来ると、その場に立ち止まり、深く深呼吸する。

「よし」

紬は戸を開ける。

「優。いるか？」

優は中で竹刀の手入れをしていた。

「おう。どうした？」

紬は焦る気持ちを抑えながら前に座った。

「あ、その……、優、ちょっと聞きたいことがあるのじゃが……」

「ん？ なに？」

優は手入れをしながら容易に耳を傾ける。紬は頬を少し赤くしながら問いかける。

「あのな……、その……、優の時代では、どのように人は恋をするのじゃ……」

「……………はい？」

「だから、恋じゃ、恋！ 人を好きになったら、どうするのじゃ？」

「どうするって……」

優は頬を書きながら考え込む。

「そりゃ、その気持ちを相手に伝えるんだろうな」

「伝える？ それからどうするのじゃ？」

「それから？ ええと……、付き合っんじゃない」

「付き合っつ？ それはどっいうことじゃ？」

「え、えと、それは……」

「なんじゃ！ はっきりせんの！」

「そんなこといっても、俺だってわかんねーよ。今までそんなこと

なかつたんだし」

「ま、要は気持ちを伝えればいいのじゃな」

「あ、ああ。そうだな……」

「それで、身分の高いものと、低いものはどうするのじゃ？」

「身分？ ああ、俺の時代に身分とか、そんなものは関係ないよ」

「ん？ 身分がないのか？」

「まあ、身分というか、偉い人とかそんなのはいるけど、恋愛にそんなものは関係ない。好きなら、それでいいのさ」

すると、紬はすつと立ち上がった。

「わかった……」

そしてそのまま部屋から出て行った。

「どうしたんだ、いきなり……」

紬は自分の部屋に戻ると、意を決す。

「よし、今夜決行じゃ」

夜になると、優は紬の部屋に呼ばれた。

「何の用だ？ 入るぞ」

優はそつと中に入る。

中はロウソクの火が灯っており、一枚の布団が敷かれている。紬の姿は見えなかった。

「あれ？ 紬はいないのか。仕方ない。待ってるか」

優は布団のとなりに腰かけ、ロウソクの火を見つめながらぼーっと待っている。

すると、すつと戸が開いた。

「優……」

優は振り返る。

そこには白い着物を纏い、ロウソクの光に照らされ、そして頬を赤く染めた紬が立っていた。

いつものような紬には見えず、どこか大人びて見え、はつきりわかる紬の緊張が優にも移った。

「ど、どうしたんだ、紬……」

「……優……」

紬は優の前に座りこむと、綺麗な眼差しで優を見つめた。

「優……。わらわと、これから夜伽に付き合ってくれ」

「え？ 夜伽？」

紬はコクツとうなづく。

「ほ、本来は逆なのじゃが、その……、身分的には、わらわの方が上だし……」

「え、えと、あの……、その……、よ、夜伽って……なに？」

そこで紬の顔が真っ赤になる。

「そ、その、よ、夜伽とはな……い、一緒に寝ることじゃ……」

「……………え？」

そこで優の頬が赤く染まる。

「え、えと、な、なんで、俺……？」

紬はごくつと唾を飲み込む。そしてぎゅっと心臓を抑えた。

言わなければ……。気持ちを伝えなければ、何も始まらない……。

そのために、決意したのだ……。

紬は優の制服を掴む。そしてじっと見つめた。

「優……、わらわは……、お主が好きじゃっ」

「え……？」

そして紬は優に唇を合わせて来た。

そのまま紬は優を押し倒し、布団の上に倒れた……。

その頃、雲は自分の父親と向かい合っていた。

「……この情報は本当か？」

「……はい」

「雲の情報に間違いはこれまでになかった。今回も間違いはないと思う。じゃが、これは……」

「そうですわね。一刻も早く報告せねば……」

「このことを、姫様には……？」

雲は力なく首を振る。

「先ほど申しましたが、つむ……姫様は、その、優様に……」

「……本来は、それを止めるのが、お前の役目なのだが……」

「申し訳ありません……」

「……情が移ったか？」

「……はい……」

「そうだな。幼馴染なのだから、無理もない」

「はい……。紬とは、いろいろありましたからね。今回は、華を持たせました……」

「お前はいいのか？ 優殿に……」

「いいのです。だって、紬はこれから苦しい目に合うのですから」

雲は悲しげな目で、記録書を見つめる。

「紬は、もう自由はできませんから……」

そこに書いてある記録書の一つに、こう書かれてあった。

日向の国の姫、音姫に求婚の申し立てがあつた、と――。

十八話 巻物と真実

優はふらふらと城から抜け出し、そして一人城下町を歩いていた。活気づいている商いとは違い、優は深く考え込んでいた。

あの時の夜、紬に告白……想いを告げられ、そしてそのまま抱きつくように倒れたが、それから踏み止まり、ただ二人は一緒に寝るだけで朝まで過ごした。

正直、あのようなことは初めての経験であり、今考えても顔が火照り、恥ずかしさを抑えることはできない。

紬の気持ちは十分にわかった。

でも、自分自信はどうなのだろうか。

この時代にタイムスリップし、紬と出逢い、側近となり、これまで共に過ごしてきた。

そして紬に対する感情の答えは……。

優は制服のズボンのポケットに手をつ込みながら、ふと小さく口元を緩ませる。

そんなこと、決まっている……。

「あれ？」

いつのまにか、優は紬のお気に入りの場所でもあり、二人が出逢った場所でもある、泉へと来ていた。

優は改めてこの大自然に囲まれた場所を眺める。

この場所のおかげで、二人は出逢うことができ、そして恋愛感情が芽生えた。

この場所は、どうかこれからずっと無くならず残っていて欲しいものだ。

優はふと小さく息を吐く。

すると、草陰にあるものを見つけた。

「あっ」

それはあの巻物だった。

優の家の倉庫で見つけ、この時代に導いたあの古びた巻物。

気づかなかったが、あれも一緒にこの時代に落ちていたのだ。

「これがあれば、元の時代に帰られるかもな」

優は巻物を手に取り、そっと破けないように中を広げる。

その中にはやはり紬の不知火のことが書かれてあった。そして治

癒力である鏡花水月のことも。

となると、これを書かれたのはこの時代となる。それかそれ以降の時代。

細について書かれてあるのはそれくらいだった。

そしてあるものに気がついた。

「え？　これは……」

優が見つけたのは家系図だ。

一番下の名前は優の祖父の名前。まだ新しいものだ。

「へえ、家系図なんてあったんだ。なら、俺の先祖が分かるな」

優はどんどん広げて行き、自分の祖先を上へと辿っていく。

知らない人が、自分と血の繋がりがあると思うと、名前しかわからないが、少なからず親近感が湧いてしまう。

それだけでも十分に面白いものだった。

平成から昭和、大正、明治、江戸とどんどん遡っていく。

けっこう受け継がれており、なかなか長かった。

そしてとうとう戦国時代まで来た。

だんだんと緊張が走るのがわかる。

そして……。

「……え？」

優はある名前を見て呆然と黙視する。

そこに記された名前。それは思いがけない名前だった。

優は丁寧に巻物を丸め、そしてそつとポケットにしまう。

そこに書かれていた名前、それは……紬と佐祐だった――。

城に戻ってきた優。

とぼとぼと重い足取りを引きずり、自分の部屋へと向かう。

部屋の前に着いたとき、紬とばったり会った。

「あ、す、優」

紬は少し頬を染めながら呼びかける。

「紬……」

優は精気の無い目を向ける。

「す、すまないが、今いいか？ 久しぶりに、未来の話をしてほしいのじゃが」

「……悪いけど、今は一人にしてくれ」

「え？ あ、そうか。どこか気分でも優れないのか？」

「いや、大丈夫だから……」

そういつて部屋に入る。

紬は心配した表情をしながら、その場につっ立っていた。

そのとき、後ろから声がかかった。

「姫様」

紬は振り返る。そこには雲が立っていた。

「姫様、少々よろしいでしょうか」

雲がいつになく真剣な面持ちで訪ねて来る。

紬は優のことが気になったが、雲にコクツとうなずいた。

優は一人部屋の中で座り込み、俯きながら考え込む。

あの巻物に書かれてあった家系図が頭から離れない。

あの事実は、本当なのだろうか……。

そのとき、佐祐さんが部屋に入ってきた。

「優殿、少し良いか？」

「佐祐さん……」

「ん？ どうした。気分が優れないようだが」

「いえ……」

そこで優は顔を上げると、佐祐に問いかけた。

「あ、あの、佐祐さん。その……、佐祐さんの性を聞いてなかったのですが……なんていうんですか？」

「ん？ 私の性か。そういえば、まだ名乗っていなかったな。私は如月という。如月の佐祐だ。珍しいだろ？」

その答えを聞いて、優は再び俯いてしまう。

やはり、あの巻物に書かれていたことは揺るぎない事実だった。

どうか間違いだと信じ、足掻いてみたが、やはりそれは叶うはずなかった。

優は認め、受け止めることができず、固く目を瞑る。

「そうだ。優殿に言付けがあったのだ。優殿、少し酷な話だが、よいか？」

「はい……？」

「実はな……姫様に、求婚の申し立てが上がったのだ」

「え？」

その頃、同じ報告を、紬は囊から聞かされていた。

「そ、それは誠か……」

紬が目を見開いて聞き返す。

「はい。確かな情報です。……どうかしましたか？」

「ああ、いや、急なことだったから、少し取り乱してしまった……」

「それならけっこう。相手は隣国の大名の子、名は島津義明。力もあり、南国から勢力を拡大しつつあります。天下を獲る候補の一人ともいえるでしょう」

「そ、そうか……」

囊は記録書から目を外し、チラッと紬に目を向ける。

そしてポンッと、横に放り投げた。

「？ 説明は終わりか？」

「聞かなければならない方が、まったく聞く耳持たないようなので」

「うつ……。すまない……」

「……前に言っただわよね。自分の立ち位置を見失うなって」

「……う、うむ……」

「でも、それよりも、優様のことしか頭にない？」

「そ、それは……」

紬は顔を赤くしながら俯く。そんな紬を見て、霧は嘆息する。

「まったく、あんたはほんと自分勝手ね」

「むっ……。そ、そんなこと……」

霧はじと目で見える。

「ま、昔からそうだしね。正直いうとね、私も、今回のこの件について、あまりお勧めしたくないの」

「え？」

「確かに、相手は力も名もある戦国大名。だけど、それだけなの」

「……どういうことじゃ？」

「情報によれば、相手はそこまで評判は良くない。つまり金と権力に任せて、自分は何もしないの。だらしないし、頭も良くないし、おまけに女癖が悪いらしい。ほんと、男として最低よ」

「そ、そうなのか……」

「そんなやつに嫁ぎに行くのは嫌でしょ？」

「う、うむ。しかし、なぜわらわのところには？」

「おそらく、あんたのその力でしょね。ここは小さな国だけど、あんたの力があるからこそ守られてるの。この地を手に入れるには、そうそう容易なことじゃない。ならば、繋がりを持てばいいと思ったのじゃうね。関係があれば、自分のものになったようなものだし。これで一石二鳥ってところね」

「そうか……。ま、たいていそんな目的だからな」

「そうね」

「でも、優はそんなこと思わない……」

雲は腕を組みながら紬を見る。

「優は、真にわらわを愛してくれる。力や金、権力に溺れず、わらわだけを考え、そして守ってくれる。そんな優が、わらわは好きなのじゃ」

雲はふと笑みを浮かべた。

「なら、今の気持ちを殿にも言いなさい」

「え？」

「殿だって、悪い人じゃないわ。きっとわかってくれるわ」

「そ、そうだな」

「でも、あなたわかってる？」

「え？」

「この件を断れば、……最悪、戦になるかもしれないのよ」

「うっ」

戦と聞き、紬の動きが止まる。

しかし。

「それでも……」

「え？」

紬は決意の籠った声で答える。

「それでも、わらわは可能性があるなら諦めたくない」

紬は立ちあがると、急いで殿の下へとかけて行く。

その姿を見届けて、霰は重いため息を吐いた。

「まったく、これがどういうことになるのか、わかってないのかしら」

霰は記録書を手に取り、ふと口元を緩めて立ちあがる。

「忙しくわるわね……」

優は部屋から出て、紬のお気に入りの場所である天守閣に登っていた。

そこから眺めることができる景色は、いつもなら絶景に見えるのだが、今ではそんな気にもならない。

すると、後ろから声をかけられた。

「優……」

声だけですぐにわかる。

優はゆっくりと振り返った。

「紬……」

紬は優の隣に並ぶと、同じように景色を眺める。柔らかな風が吹

き、髪をなびかせて、紬の長い髪は揺れていた。

「こういうとき、教えたあの髪形をしてほしいな」

「そうじゃな。ちよつとしてみるかの」

紬はリボンを優に渡し結んでもらう。優は紬の後ろに回ると、以前したポニーテールにした。

「うむ。これだと風が吹いても髪が乱れないな」

「役に立って良かったよ」

そして無言が続く。最初に口を開いたのは紬からだ。

「優は聞いたのか？ ……わらわの求婚の申し立てのこと……」

優は小さくうなづく。

「佐祐さんから聞いたよ。……結婚、するんだね……」

紬は視線を下げる。

「優……、まだ、聞いてなかったな……」

「え？」

優は紬に顔を向ける。紬はすでに顔を上げ、真剣な表情で優を見つめていた。

「優。わらわは、お主のことが好きじゃ」

堂々という紬に迷いはなく、顔が赤くなるが、慌てたりはしなかった。

「優はどうじゃ？ お主は、わらわのことが好きか？」

紬の眼差しから問いかけられる優の気持ち。

まだ明かしていない優の紬に対する感情は……。

優は胸に手を当て、目を閉じて考え込む。

「優……」

紬はか細い声で呟く。

優は正直な気持ちを探し始めた。

国のこと……。

姫様という地位のこと……。

佐祐さんのこと……。

巻物のこと……。

そして、紬のこと……。

全てを払いのけ、紬のことだけを考え、優は答えを導き出した。

優は目を開け、紬を見つめる。

そして……。

「え？」

気づいた時、紬は優に抱きつかれていた。

ぎゅっと包むように、そして締め付けるように優の腕に囲まれる。

「優……？」

「紬……、俺、お前のこと……好きだ」

そのとき、優の目から一滴の涙が流れた……。

「優？」

紬が顔を上げて覗きこむ。優は涙を拭いて見つめる。

「紬……。俺、お前にいつてほしくない……。もっと、これからも俺のそばにいてほしい……」

そのときだ。

「うつ……ふっ……」

突然紬は泣きだした。そして目にいっぱい浮かべた涙が頬を伝って流れて行く。

「……わらわも、優の下から離れたくない……。他のものに嫁ぐなんて嫌じゃ！ わらわは、優が いい のじゃ……」

紬は顔を上げて優を見つめる。

「優！ わらわは行きたくない！ まだ嫁ぎたくない！ お主のそばに い させてくれ！」

紬の心からの訴えに真剣に聞き入る。

一国の姫が言うてはいけない言葉、それをわかっていて言うてい

る。
優はぎゅっと抱きしめた。

「ああ……」

十九話 準備と開戦

優と紬を始め、多くのお偉い方が大広間に集まっていた。

皆難しい顔をしている。険しい顔をし、静寂が包んでいた。

先ほど、紬が皆に告げた。

わらわは島津家の下に嫁ぎたくない。勝手なことはわかっていて、これは自分の意を込め、そして責任を感じながら告げている。もしかしたら戦になるかもしれないが、どうか同意してほしい。

この言葉を聞き、それから無言が続く。

すると、ずっと雲が前に出た。

「お言葉ですが、姫様の先ほどの言葉はわがまま極まりませぬ。どう考えても、姫のあるまじき言動、行動とは思えませぬ」

それを聞き、殿や上級武士は納得するようにならず。

紬は唇を噛み締め、ぎゅっと着物を掴む。

「ですが」

雲が続ける。

「今回の申し立てなのですが、情報によればこちらの利益はなく、この地を奪われ、損害しか残らない可能性があります。姫様もすで

に10と7ですが、まだ急ぐこともないと考えられます」

雲の言葉に紬はパツと笑顔を見せる。雲は紬にウインクして続ける。

「島津家の勢力は正直、我が国よりもありでしょう。しかし、彼らは姫様の力に恐れがあります。故に、勝気が皆無というわけではありません。そして武士たちの力も衰えていはおりませぬ。それに……勝てばわれらの名も上がり、もっとよりよい申し立てもあるでしょう」

雲はふと笑みを浮かべる。

「いかかですか、殿」

殿は扇子をしまう。

「うむ。そなたの言い分、しかとわかった」

殿は紬に向き直る。

「音姫。そなたはまだ嫁ぎたくないのだな」

紬は申し訳なさそうにうなずく。

「……はい」

殿はうなずく。

「ならば、良かろう」

「え？」

殿は立ちあがり、皆に伝える。

「我が娘のわがままに付き合ってもらいすまないが……。音姫はこの地のために何度も犠牲を払いながら不知火、鏡花水月を使い守り通した。武士は借りた借りは返せねばな」

皆笑みを浮かべ、立ちあがる。

「出陣じゃー！」

「おおおおおうううう——！」

全員が雄たけびを上げる。

皆の声を聞き、紬は口に手を当て、嗚咽を漏らした。

優はそつと目を閉じ、心から感謝した。

会合が終わったあと、優は雲に呼ばれた。

「優様、少しよろしいでしょうか？」

雲が深刻そうに問いかけて来る。優はコクツとうなずいた。

二人は雲の部屋に来た。向かい合って座り、お互い知対峙する。

「話とは、今後起こるだろうとする戦のことです」

「……うん」

「先ほどは勝てるようなことを申しましたが、その可能性はあまりにも低いでしょう」

「……え？」

「もしかしたら、この国は……滅びることも」

「そんな……」

優は愕然とする。

「相手は南国では有名な戦国大名。富も力もちちよりも格段に上。まともにやり合えば、いとも簡単に破れるでしょう」

優は顔に手を当てる。

この国が負ければ、全て滅びる。

国も……。

城も……。

城下も……。

商人や農民、武士たちはもちろん、一緒に遊んだ子供たちまで……。

そして、紬と出会ったあの場所……。

優はぐつと拳を握って畳に叩きつけた。

どうしたらいいんだ……。

どうすれば解決するんだ……。

優の拳が震える。

すると、そつと雲が抱きついてきた。

「え？……雲さん」

「……優様、どうか落ち着いてください。どうか……ここから逃げてください」

「え？」

「他の国に逃げれば、被害が及ぶことはありません。どうか、優様だけでも……」

優はふつと笑う。そして雲を離れた。

「優様？」

「……雲さん。俺は逃げないよ」

「え？」

「俺は逃げるために紬に協力したんじゃないんだ。……守るためにいるんだ」

「優様……」

「俺がこの時代に來たのは、そのためなんだよ。……きっと」

優は立ち上がる。

「雲さん。悪いけど、君のお父さんに伝えてよ。……良い戦力が手に入りましたよって」

優はそつと戸を開け、部屋を後にした。

優は制服のポケットに手をつ込んで佐祐の下に向かう。

戦に出る準備をするために……。

優は佐祐の下に行く。そして自分の決意、紬の想いを全て伝えた。

佐祐は腕を組んでうなづく。

「そうだったのか……。姫様も成長したものだ」

「佐祐さん。お願いします。俺に、力を貸してください!」

優は手を着いて頭を下げる。佐祐はふと笑みを浮かべてうなずい

た。

「ああ。良いだろう。力を貸そう」

佐祐は立ち上がるとある者を持って再び座った。手には刀と酒があった。

「これは……」

「今から杯を交わそう」

「え？」

「仲間の証だ。裏切らないという強い意味を持っている」

佐祐さんはお猪口に酒をつぎ、二人は手に持つ。

そのときだ。

「おっ、やっぱり酒があった」

いきなり入ってきたのは狼牙だった。相変わらずふらふらしている。

「わしに飲ませろよ」

すると、優は狼牙に向き直って頭を下げた。

「お願いします。俺に力を貸してください！」

「ああ、いいぜ」

「……え？」

優はぽかんとする。

「わしは強いやつと戦えば良い。お主の側にいれば、もっと強いやつとやれそうだからな」

「ありがとうございます」

「ふん。さ、酒を飲もうや」

三人はお酒を呷り、杯を交わした……。

「おい、来たぞ！」

一人の武士が声を上げて全員に伝える。

あれから一週間は経ったが、その内に敵軍勢は姿を現した。

何百という壮大な人数を添え、島津はこの地を狙いやってきた。

優は天守閣でその様子を細と見ていた。

「来たな……」

細がぼつりと呟く。

「ああ。……震えてる？」

紬は首を振る。

「優はどうじゃ？」

優は堪えるように手に持っている佐祐さんから貰った刀を握り締める。

「正直言えば怖いさ。でも、……男には、戦わなければならない時があるっていうしね」

「それが、今か？」

優はうなずく。

「うん。……紬、俺が守ってやるよ」

優は支度を始めるために、その場を後にした。

皆戦の準備を始め、それぞれ配置に着く。

優と佐祐、狼牙の三人は後ろにいた。

「良いか、作戦は覚えておるな」

「はい」

「あれは作戦つていえるのか？」

「島津家に勝つにはわれらしかおらぬ。姫様の為に、死んでもかつのだ」

「はい！」

優は込み上げて来る震えを抑える。

これから自分は嫌っていた戦に挑むことになる。戦争に参戦するのだ。

それがどういう意味を表すか……。

遊びでもない、ゲームでもない。現実に行きつゝいる殺し合い。

少しの油断、一瞬の隙、刹那の緩みが死に直列する。

死ねば、全て終わりだ……。

優はその死に恐怖する。まだ十七歳だ。まだまだやりたいことも、成し遂げたいこともある。

当たり前前の考えだ。

でも、その甘えが命取りになる。

優は一つだけの野望だけを抱いた。

それは……、紬を守ること……。

そのときだ。

「優……」

優はハッとして後ろを振り向く。

そこには紬がいた。

「紬、としてここに……。天守閣にいたんじゃ」

すると、紬は優の手を掴んだ。

「頼む！ 必ず、死なずに戻ってきてくれ！」

紬はきつく抱きついてくる。

「嫌なら出るな！ 怖いなら戦わなくていい！ 優にそんな必要はないのじゃ！ わらわが守ってやるから……。どうか、……。死なないでくれ……」

紬が泣きながら訴える。溢れる涙を流し、頬を伝わせる。

優は笑みを浮かべてそつと紬を抱き返した。

「ありがと、紬。でも、俺は逃げるわけにはいかないんだ。今回は、俺が紬を守る番だ」

「優……」

「きつと帰ってくるよ。そのあと、話したいことがあるんだ」

「わらわにか？」

「ああ。だから、紬は待っていてくれ」

優は紬を離し見つめる。

「うむ。待っておるぞ。わらわも、不知火で応戦するからの」

紬は最後に笑顔を見せ、走って元の位置に戻って行った。

「優殿、そろそろじゃぞ」

「はい」

優は甲冑を気、準備を終える。

すでに体の震えは消えていた……。

お互いの陣が静かに対峙し、時が来るのを待つ。

異様な緊張感が漂い、皆勝つことだけを考えている。

優は兜をかぶり、そして腰に備えてある刀に触れる。

自分に、人を切る勇氣は……。

そのとき、開戦の狼煙が上がった。

「いくぞ！」

お互いの陣が一斉に動き始めた。

前にいた武士たちが走りだし、立ち止まることなく敵陣めがけ槍を向ける。

そしてお互いの陣が混じった瞬間……殺し合いが始まった。

切る、切られるの連続。

休む暇もなく、相手の大将の首を獲るために前に進む。

早く終わるには、早く助かるには、早く勝つには、大将を倒すほかない。

お互いの武士たちが戦っている中、この三人は後ろで状況を見ていた。

「さて、そろそろ行くか」

佐祐が槍を持って馬に跨る。

「へへ。震えが止まらぬな」

狼牙は余裕の表情で武者震いしていた。

優は馬に跨りながら、天守閣を見上げる。

紬は大丈夫だろうか……。

「優殿」

佐祐が呼び、優は振り返る。

「この戦は勝つ為でも、倒す戦いでもない。……守る戦いだ」

「……はい」

「優殿の守りたいものは何じゃ」

「……紬、音姫です」

佐祐はうなずく。

「ならば、そのために戦え。それができるのは、優殿だけじゃ」

「はい！」

優は活気のある声を出す。

佐祐は口元を緩ませた。

「いくぞ！」

三頭の馬は走り出した。

この三人が、この戦の勝敗を握ることになる……。

二十話 終戦と帰還

優と佐祐、狼牙の三人は馬に乗り戦地から大きく離れて行く。

三人の作戦は、戦慄を離れ、大きく外回りし、敵陣の大將のいる所まで一気に押し寄せるのだ。

まともにやり合えば勝てるはずがない。大きな賭けにでなければ……。

紬は天守閣で上から戦場の様子を窺う。

やはり相手は有名な戦国大名でもあり、その力、勢いはこちらの比ではない。

確実に押しやられ、形勢は誰が見ても不利である。

すぐに不知火を使い、応戦してもいいのだが、数が多すぎて間に合わないだろうし、力を使い過ぎれば、鏡花水月が使えなくなり、負傷した武士たちの手当てが遅れてしまう。

あともう少しでいい。敵の数を減らし、形勢を良くすれば……。

「優殿、もうすぐ敵陣である」

先頭を走る佐祐さんが後ろの優に告げる。

「はい……」

「良いか、決して同情してはならぬ。それは死に繋がる。一番悲しむのは姫様だ。どうか死なないでくれ」

「……はい……」

「ふん。しけた顔しやがって。しっかりしねえと、すぐにあの世行きだぞ」

それはわかっていた。ただ、心配なのは、自分が人を切ることができるかだ。

この時代では人を切ることとは名誉であり、名を上げるために、そして勝つために許された行為であるが、現代ではそれは許されない、絶対的掟。

まだ覚悟さえ決まっていない自分なのに、このまま参戦していいのだろうか。

三人は草陰の手前で馬から降り、姿勢を低くして敵陣へと入りこんでいく。

「待て」

佐祐さんが制止させる。

目の前には敵陣のマークに書かれた陣地がある。白い垂れ幕中は

良く見えないが、大将がおり、それを守る強い武士たちがいるのだろっ。

「良いか、今から作戦通り、奇襲をかけるぞ。相手の不意を討つのだが、成功すればいいが、失敗する可能性も大きい。迷いは禁物。相手の大将を倒すことだけ考えるのだ」

二人は頷く。

「よし、狼牙と私が先に出る。優殿は後ろから着いて来るのだ」

「わかりました」

「へへ、やっとやれるぜ」

狼牙は嬉しそうに余裕の笑みを浮かべる。

優は腰に挿してある佐祐さんから貰った刀を握る。

緊張が収まらない。試合なら、こんなことないのだが、今から生死をかけた戦いが始まる。

自分が死ねば、この国も、人も、そして細も……死ぬ。

「よし、行くぞ」

佐祐さんの合図で三人は走り出した。

優は、覚悟を決めた。

紬はさっきからそわそわして落ち着きが無かった。

今の状況では不知火は使えない。予想以上に負傷者が多く、このままでは鏡花水月のために力を残すしかない。

無敵と思っていた不知火が、こんな形で封じられるとは予想外だった。

それに、優の安否が気になる。

まさか優が戦に参加するなんて……。

やはり無理にでも止めればよかったかもしれない。

優はこの時代の者ではない、関係のないことなのだ。

ならば、死に行くようなこと……。

「……っ……」

そこで紬は口元を抑え、その場に崩れ落ちる。

自分のせいだ。

自分のわがままで、優が死んでしまう……。

全部自分のせいだ。

「うつ……、ふつ……、うつう……」

紬は嗚咽を漏らし、涙を流してしまう。

自分の無気力に、自分の無責任に、無償に腹が立った……。

「優……」

どうか、生きて帰ってきて……。

「うおおおおおっ！」

三人は奇襲をかけ、背後から攻め込んだ。

やはり大将らしき人がいた。しかし、その分多くの武士もいる。

「雑魚はまかせろ！」

狼牙が槍を振りまわし、次々に倒していく。

「優殿、ここからは別行動だ！ 相手の大将を倒すことだけ考えるんだ！」

「はい！」

佐祐さんは刀を抜き、目の前の敵から倒していく。

優は大将を探した。 大将は隅の方に下がり、何人かの武士が守

っていた。

優は刀を握り飛び出した。

「ぬっ。見慣れぬ姿だな」

「……お前が大将か」

「変な言葉を使うのだな。いかにも、私が大將だ」

「お前には聞きたいことがある」

「ん？ なんだ」

優は周りを警戒しながら問い掛ける。

「どうして紬……音姫を欲しいと思ったんだ」

「ああ、そりゃあの力に決まっておるじゃろ」

その答えに優は疑問の表情になる。

「……力？」

「そうとも。音姫の不思議な力の噂は十分耳にしておる。不知火、鏡花水月、実に欲しい力だ。この力さえあれば、天下も夢じゃない。いや、それだけではない。金も、地位も、名誉も、そして女、全て私のものだ！」

「だったら、お前は音姫の気持ちは何も考えてないんだな！」

「気持ち？ お主はさつきから何をほざいておる。一国の姫の役目など、領土拡大しか使い道は無かるう。なのに断りおって。もう必要な。来ないから奪うまでよ」

島津は不敵に高笑いする。

優は刀を握る拳に力が入っていた。

許せなかった。こいつだけは、許せなかった……。

確かにこの時代ではそうかもしれない。環境によって考えも見方も変わることはある。

でも、だからといって……。

人の心を弄んでいいはずがない！

「くっ！」

もう迷いはなかった。気がつけば、手が勝手に動き、刀を抜いていた。

目の前に煌めく刃は、光に反射し、その鋭さを物語っていた。

「お前は、俺が倒す」

「ふっ。子供が、小癪なまねを。……やれ！」

さっきまで大将を守っていた武士たちが刀を抜いて襲いかかって

くる。

優は肩の力を抜いてすつと構え、集中力を高める。

もう、死ぬ気がしなかった……。

「優……」

紬は顔を上げて戦場の状態を確認する。

形勢は未だに不利。もうダメだ……。

そのときだ。

「姫様！ 報告します！ 佐祐殿、狼牙殿、優殿の、以下三名による奇襲が成功。今大将を目の前に戦闘中とのこと！」

「なにっ」

紬は目を凝らして遠くにある敵陣を凝視する。確かに中では慌ただしかった。

「すぐに援護の準備！ 残っている者全員で攻め入るのじゃ！」

「はっ！」

報告に来た武士はすぐに階段を降りて行く。

「優……」

紬は泣きながらも笑みは消えなかった。

生きていてくれたか……。

「な、なんじゃ、これは……」

敵の大將は目の前の光景に呆然となる。

たった一人の敵、見慣れぬ姿をした若者に糸もたやすくやられて
いるのだ。

皆それなりの腕のあるものばかり。なのに、夢のようにその場に
倒れ伏しているのだ。

優はその場で甲冑を脱ぎ捨てた。そして大將を睨みつける。

「次は、お前の番だ……」

「ぐっ……。他におらぬか！ 戦えるものはおらぬか！」

しかし、大勢いた武士たちは佐祐や狼牙にやられ、その数はすでに
皆無だった。

優は鋭い目つきで睨みながら、すつと刃先を大將に向けた。

「詫びろ。今ここで謝罪するんだ。音姫の侮辱を謝れ。さもなくば、

「ここでお前を殺す」

「うつ……。わ、わかった……」

そのときだ。

パンッ！

渴いた音が響き渡った。その音が止むとき、ドサッと優はその場に倒れた。

「優殿！」

佐祐はすぐに優のもとに駆け寄る。

「優殿！ 大丈夫か！」

「うつ……。くそっ……」

「動くな。撃たれたのだな。すぐに止血する」

すると、優はすつと佐祐の肩を掴んで立ち上がった。

「あいつを……。殺してやる……」

「待て！ 無茶するな！」

しかし、優は目の前にいる大将から目を離さなかった。

大将は手に持っている銃を構えながら笑みを浮かべる。

「ふん。かすめただけか。次は当てる」

しかし、遅かった。

すでに優は動いており、一瞬で懐に入っていた。

「なにっ！」

「くらええ！」

優は柄を握り締め、そして刃を仰向けにし、天高く突き上げ、弧を描かせた。

大將は首をやられ、宙を舞う。

そして力はて、その場に倒れた。

優はその場に膝を着いた。

これで、終わりだ……。

「……………んっ……………」

優は目を開けた。ぼやけた視界を元に戻し、当たりを見渡す。

自分は佐祐の背中におり、戦が終わって帰っている途中だった。

「お、気がついたか、優殿」

「佐祐さん……。俺たち、勝ったんですね？」

「ああ。勝った。私たちは勝ったのだ」

その言葉に全員が笑みを浮かべる。

優は腰にある刀にそつと触れた。

「佐祐さん、この刀、ありがとうございました。まさか、人を切らない刀があるなんて……」

「うむ。それは逆刃刀というのだ。刃がないから、打撲程度しか使えぬ。優殿にはぴったりだがの」

「……これのおかげですよ。俺は、人を殺さなくて済みました」

優はふと息を吐く。

「ほら、見えて来たぞ」

「え？」

目の前には自分たちの国、そして住み家が広がっていた。

皆こちらを見て大きく手を振っている。

そこで優はやっと実感できた。

守れた。

この国を……。

城を……。

そして、紬を……。

そのときだ。

「優ー！」

城の入り口から大きな声が聞こえた。

そこには紬がいた。他にも、衣も、雲もいる。

優はその姿を見ただけで嬉しくなった。

「佐祐さん……自分で歩きます」

「ん？ そつか」

佐祐さんはそつと優を降ろす。

優はふらふらになりながらも、ゆっくりとした足取りで歩き、そして紬たちの下に向かっていく。

紬も歩きだし、何度も滲み出て来る涙を手の甲で払いながら進んでいく。

そして二人は立ち止り、向かい合った。

「……優」

「……ただいま、お姫様」

優はニツと笑みを浮かべる。

紬は目じりを拭いて笑い返す。

「このたわけが。無事に帰って来たっていったのに、ぼろぼろではないか」

「ごめん。でも……」

優は真っ直ぐに紬を見つめた。

「死ななかっただろ」

その言葉に、紬は抑えきれなくなった涙を流し、そのまま優に抱きついた。

「優！」

紬を受け止め、そっと抱きしめ返す。

「良かった……。本当に良かった……。良くぞ帰ってきてくれた……。ほんとに、すまなかった。……。ありがと、優……。」

優は紬の頭を撫でながら、そっと目を瞑った。

これで、全て終わったんだ……。

戦が終わりに、一ヶ月が経った。

紬の鏡花水月のおかげで生き残った者たちの傷も完治し、無事に元に戻って行った。

優の傷も治り、今では万全だった。

そんなとき、優と佐祐は紬のお気に入り場所である泉の場所まで来た。

「どうしたのだ、こんなところまで」

佐祐さんが問いかける。

優は馬から降り、紬が前に掘った跡のある木に触れながら口を開いた。

「佐祐さん。俺は……もうすぐ消えます」

「なに？ どういうことだ？」

「……役目を果たしたから」

「役目？ それは何だ？」

「ちゃんと話します。佐祐さんには、全て……。その前に、今から僕と真剣勝負してください」

「なに？ ここでか？」

「はい。そして約束してください」

「なにを？」

「もし僕が勝ったら……紬と結婚すると」

「なっ！ それはどういう——」

「約束ですよ。それでは、いきます」

優は逆刃刀を抜き、集中力を高める。

佐祐も馬から降りると、真剣を抜き、じっと構える。

「佐祐さん……」

「ん？」

「……ありがとう」

優は俊敏に動きだし、佐祐も後から出て、試合が始まった。

その次の日、優、紬、佐祐の三人は再びこの場所を訪れた。

「それで、話とは何だ、優？」

紬は綺麗に輝く泉を手で掬いながら問い掛ける。

「うん……。紬、悪いけど、ここでお別れだ」

「……え？」

紬は耳を疑い、その場に立ち上がって優を見る。

「な、なんの冗談じゃ？ 嘘じゃろ？ 嘘だといってくれ！」

紬は真剣に懇願する。しかし、優は力なく首を振った。

「そんな……」

紬の目から涙が流れる。

「どうしてじゃ……。ここにおれば良い。ずっと……。ここにおれば良いではないか……。何も不自由なく暮らさせてやる。望みがあれば何でもやる……。だから、ここにいてくれ……」

それでも、優は首を振る。

「俺はこの時代のものじゃない。自分の時代に帰るんだ……。それにわかったんだ。俺がここに来た理由」

「……それは、何じゃ……？」

「紬、お前を守るためだ」

「え？」

優はそつと紬に近づき、そして優しく抱いた。

「紬を守ること、それが、俺がこの時代に來た理由だ。死なせないために……」

「な、何をいうておる……。そんなことが理由に——」

「なるんだよ。俺は未来から來たんだ。……全てわかるんだよ」

「そんな……」

優はそつと紬を離し見つめる。

「紬……、ありがとう。お前のことは忘れない。だから……」

そこで優はうつむき、口を閉ざす。

「優……」

紬がぽつりと呟き、手で口を抑える。

優は流れ出て来る涙を我慢しようと唇を噛み、拳を固く握っていた。

それでも、溢れる涙は止まらず、頬を伝い落ちて行く。

ここにきて、いろんなことがあった。

紬と出逢い、下僕になり、衣に出逢い、こきつかわれ、試合もして、雲に出逢って、側近になって、戦にも出た。そして……。

一人の女を好きになった……。

「うつ……、ぐすつ……」

優は何度も手の甲で涙を拭う。しかし、なかなか収まらず視界がぼやける。

しょうじき言えば、ここにいたい。ずっと紬のそばにいたかった。

でも、歴史を変えてはいけない。

ここで、帰らないといけないんだ。

優は震える体を何とか抑え、懸命に口を開く。

「……紬……。俺さ、ここにきて……楽しかったぜ……。いろいろお前には、手を焼かされたけど……うつ……。それが、充実して……すっげえ……楽しかった……」

優は何度も鼻を吸り、息を吸う。

「だから……紬の側近になれて……、この時代で出逢って……本当に良かった……」

細も手で口を抑えながら涙を流し続ける。そして一言も聞き逃さないようにと、耳を傾き続けた。

「……俺がいなくなっても、元気でな……。衣や囊と……。仲良くするんだぞ……」

「……うん……うん……」

「もう……一人で何でもこなせよ……。頼ってばかりじゃ……。ダメだからな……」

「うん……」

「それから……それから……」

言いたいことはたくさんある。でも、それを上手くまとめることができなかった。

ただ、目の前にいる女性を、忘れないようにしようということしか、今の自分にはできなかった。

「……ありがとう……。元気でな……」

優は最後のそう残し、ポケットにある巻物を取り出した。

その瞬間、白い光が輝き始めた。

これで、お別れだ……。

「優！」

紬が声を上げる。

「わらわも、お主と出逢えて本当に良かった。心から感謝する！
わらわは待つておる！　いつかきっと、また会いに来てくれると！」

優は涙を拭うと力強くうなずいた。

「うん！」

「ありがとう、優！」

その瞬間、優の姿は消え、光だけが残り、その光もやがて消えて
しまった……。

「痛っ！」

優は自分の家の物置の中で倒れていた。

「いつて〜。あれ？　ここは……」

優は携帯で時間と日付を確認する。

「え？」

日付はあの日と変わらない。時間も十分程度しか経っていなかった。

「どういうことだ？」

そのときだ。

「おら、優！ さつさと片付け終えないと、飯抜きだぞ！」

母屋から親父の声が聞こえる。

「俺、戻ってきたのか……」

いまいちぱつと納得できなかった。

とりあえず、物置から出て庭に出る。

そのとき、優の足が止まった。

「あつ……」

目の前にある木。そこにある幹に字が掘ってあった。

『音姫のもの。無断での伐採は禁ず』と。

「紬……」

優はそつと笑みを浮かべた。

「おら、優！ さつさと着替えて来い！」

目の前にいる親父に言われ、優は上機嫌になり、家に入った。

佐祐と紬は座りながら話をしていた。

前の前にある泉は綺麗である。

佐祐は全て話した。

ここに優が来た理由。それは、

紬の嫁ぎに行く話をもみ消し、島津家との結婚を中止させる。そして戦に参加し、紬を守る。最後には、佐祐と結婚し、子孫を作らせる。

つまり、紬を佐祐意外の男と結婚させないために、ここに来たということだ。

優はただそのためだけに、この時代に来て紬を守ったのだ。

それから、この場所で優と佐祐が真剣勝負したことも話した。

「そうじゃったのか……。なら、優はわらわの孫にあたるのか」

「そういうことになりますね。遅い孫です」

「うむ。そうじゃな……」

そこで佐祐は頬を赤くしながら、ぼそつと呟いた。

「あ、あの、姫様……」

「ん？ 何じゃ？」

「その、これは、優殿に負けたから言っわけじゃありませんので」

「うむ。それで、何じゃ？」

「はい、その……」

「うむ」

「……結婚してください」

「……………」
「うむ……………」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6130o/>

時を越えた出逢い

2011年2月17日15時33分発行